

## 第五章

米国議会図書館本の素姓——行方不明の諸仲本か——

## 一 はじめに

本章では、米国議会図書館蔵『源氏物語』（以下、「LC本」とする。）の本文について、それがどういう写本であるのか、LC本の素姓や伝来について明らかにしたい。

LC本(LC control No.2008427768)とは、米国議会図書館アジア部日本課(Library of Congress, Japanese Rare Book Collection)に二〇〇八年より所蔵となった『源氏物語』写本の新出資料である。LC本の本文調査は斎藤達哉氏、高田智和氏を代表として二〇一〇年から開始され、その成果報告書<sup>(1)</sup>において、LC本は、五十四帖揃、寸法は各巻によって違いはあるが、縦二五・二五・二五、横十六・八・十七、列帖装(綴葉装)、料紙は鳥の子、題簽は朱色、表紙は濃青色(後補改装か)と書誌概要が記されている。「源氏 全部五十五冊／五辻殿諸仲御筆／外題三条西殿実隆御筆」と記された慥貪式の塗箱に納められ、古筆了仲の折紙が添えられている。

了仲の折紙によれば、本文は五辻諸仲【長享元年(一四八七)→天文九年(一五四〇)】、外題は三条西実隆【康正元年(一四五五)→天文六年(一五三七)】の手によるものと記されている。書写年代は米国議会図書館蔵書目録(<http://con.loc.gov/2008427768>)においては、実隆没年の一五三七年以前とされている。本文に関しては、割注のような二行書を交えた特殊表記の和歌、一冊内での書写行数が一定しない、傍記の混入、丁裏の文字の転写など、表記上の特徴を持つことがすでに指摘されている。<sup>(3)</sup>本章は、これらの書誌や本文形態の特徴をふまえて、

既知の五辻諸仲本との関わりについて指摘し、LC本の本文の実態を明らかにしたい。

## 二 古筆了仲による折紙の近似

LC本に添えられた古筆了仲【明暦二年（一六五六）～元文元年（一七三六）】の折紙は上記掲載のものであり、内容は以下の通りである。

源氏物語四半本 全

五辻殿諸仲卿真筆

外題三條西殿実隆公

御一筆無疑者也

正徳元年

五月下旬

古筆

了仲鈞玄齋（陽刻朱印）

正徳元年（一七一）五月下旬、この『源氏物語』（四半本）は五辻諸仲の真筆であり、外題は三条西実隆によるものであることが記されている。古筆了仲は天保七年（一八三六）版『古筆了伴大人閔和漢書画古筆鑑定家系譜並印章』<sup>（4）</sup>によれば、古筆別家の三代目であり、元文元年（一七三六）に亡くなり、「鈞玄齋」という印章は、「折紙二用」とあり、折紙に用いる印であったことがわかる。



高田智和氏、斎藤達哉氏によれば、三代了仲の折紙は、この他、専修大学図書館蔵蜂須賀家旧蔵本『和漢朗詠集』(上下二冊、建長三年(一二五一)写、上帖伝高辻(菅原)長成筆・下帖伝高辻清長筆)にもあることがすでに確認され、折紙の形式の一致、年号も正徳元年(一七一)であり、『蜂須賀家旧蔵本目録』には『和漢朗詠集』に「正徳九年卯曆」と翻刻されているが、「正徳」は六年までしか存在せず、正徳元年が「辛卯」の年であり、『和漢朗詠集』の複製本で確認したところ、これは「正徳元年卯曆」の誤りであると思われる)、LC本の折紙の年号と一致していることが指摘されている。さらに、専修大学図書館蔵蜂須賀家旧蔵本には、上下二冊で、室町時代初期写、伝光厳院宸筆とされるもう一つの『和漢朗詠集』が存在し、これも折紙は三代了仲によるものである。伝光厳院宸筆本には元禄十三年(一七〇〇)と記された了仲の折紙が付いている。つまり、LC本の折紙と専修大学図書館蔵本『和漢朗詠集』二種の極書は、いずれも形式、筆跡、極印が一致していることが確認できるのである。

LC本の書写者とされる五辻諸仲について、『尊卑分脉』『公卿補任』『増補諸家知譜拙記』『顯伝明名録』『諸家伝』等によれば、五辻家は宇多源氏、庭田氏と同じ祖であり、源雅信の子である源時方を祖とする。家格は半家、家業は神楽である。鎌倉初期に五辻仲兼以降、五辻家と称す。諸仲【長享元年(一四八七)〜天文九年(一五四〇)】はその子孫である。地下家であった五辻家は、天文七年(一五三八)十二月二七日に諸仲が従三位に叙せられたことにより、堂上家に加わることとなる。同九年(一五四〇)十月二十八日に五十四歳で薨去している。神田久義氏によれば、諸仲は五辻家にとって中興の祖ともいえる人物であり、『実隆公記』にその名が散見し、実隆



に和歌の添削を依頼する書状があることから、諸仲は三条西家の学問を受ける立場にあったと述べている。

諸仲に関する書物としては『諸仲藏人奏慶記』<sup>(9)</sup>があり、これは明応九年（一五〇〇）の拝賀の記録を記したものである。また、『日本書流全史』<sup>(10)</sup>によれば、実隆を祖とする三条殿流（逍遙院流）に諸仲の名が見える。『和歌懷紙集成』<sup>(11)</sup>には諸仲筆とされる「五辻諸仲三首懷紙」があり、これは天文八年（一五三九）五月二十五日の月次和歌御会の折のものである。『実隆公記』永正五年（一五〇八）九月七日条には、諸仲が五枚の三十六歌仙の画の色紙に歌を書いてほしいと所望し、色紙を預け置いたという記述も見える。これらのことから、諸仲は和歌や書を通して、LC本の折紙に見える三条西家と関わりがあった人物であることがわかる。

五辻諸仲が書写したとされる『源氏物語』について、渡部榮氏の著書『源氏物語従一位麗子本之研究』<sup>(12)</sup>に興味深い記述がある。本論文の序や第二篇の序章でも述べたように、「従一位麗子本」とは源麗子により平安時代末期に作成されたとされる『源氏物語』の写本である。夢浮橋巻末に「京極北政所御奥書之一本書写之畢」とあることから、「京極北政所本」とも称された。源麗子は村上天皇の子具平親王の孫で、源師房と藤原道長の五女尊子との娘であり、藤原師実の妻となった人物である。<sup>(13)</sup>昭和初期になって、この転写本と見られる写本が出現した。この転写本が、渡部氏が著書で述べられている写本（以下、「麗子本」とする）<sup>(14)</sup>である。麗子本を調査するにあたり、渡部氏は麗子本に対校した本文について次のように記述している。

此所までの部分に就いては殆ど必要は無かつたのであるが、此の後の部分の論述に対して、かなり重要な資料を提供する一本を紹介し、以下考察の便宜上本文を併記する事とする。此の本は縦八寸四分、横五寸六分、

青色の表紙に正中に朱色の題簽を押し、鳥子紙の粘葉装で、五十四冊一筆本である。一丁平均十書きの部分が最も多く、十一行の部分も多少存する。知人の仲介を得て借覽し校合研究の機をあたへられたものであつて、現在東京市居住の某氏の珍藏される所である。

奥書が存しないので、確實には誰の手に依つて書写され、如何なる系統の親本に依つて転写されたものかは明かにしがたいが、次の如き古筆の極め札が附されてゐる。

源氏物語四半本全五辻殿諸仲卿真筆外題三條西殿実隆公御筆無疑者也

正徳元年

古筆

五月下旬

了 仲

印

麗子本と対校した本文には「源氏物語四半本全五辻殿諸仲卿真筆外題三條西殿実隆公御筆無疑者也」という極札の付いた五辻諸仲卿の真筆本（以下、「諸仲本」とする）を用いたとある。これは前述のLC本の折紙の記述と一致するのである。折紙の「御一筆」の「一」が欠如しているものの、ほぼ同じ記述と言つてよいだろう。渡部氏は諸仲本に折紙ではなく、極札があつたとするが、極札にしては長文の内容であり、極札とは考えにくい。「正徳元年」「五月下旬」をあえて二行に分けており、これは折紙の記述形式を活かして翻刻したものであろう。「一」については渡部氏が書き落としたのではないかとも思われる。「一」の有無を除けば、本文形式が完全に一致することから、渡部氏が言う極札はLC本の折紙である可能性が極めて高い。つまり、渡部氏が見た諸仲本に添えられていた折紙と、LC本の折紙とは同一のものと考えられるのである。

諸仲本は「縦八寸四分、横五寸六分」とあり、一寸を約三糎として換算すると、「縦八寸四分（約二五・二糎）、横五寸六分（約十六・八糎）」となる。これはLC本の大きさ（縦二五・二五・二糎、横十六・八・一七糎）とほぼ一致する。「青色の表紙に正中に朱色の題簽を押し、鳥子紙の粘葉装で、五十四冊一筆本である。」<sup>(15)</sup>と言い、「粘葉装」という記述以外はLC本の形状とほぼ一致する。諸仲本は「粘葉装」とあるが、LC本は「列帖装（綴葉装）」である。しかし、諸仲の時代に粘葉装の形態の本文は考えにくいのではないだろうか。川瀬一馬氏によれば、綴葉装に関して、「平安後半期頃からはじめて我が国独自の装丁様式（冊子の一様式としての綴葉）が現れたのである。即ち、若干の料紙を重ねて半折一括りとし、数括りを重ね合せて表紙を添へ、糸でかぎつたもので、古人は之を糊付けの粘葉と別称せず、同じく鐵杖閉などと呼んでゐるのは、この綴葉であると思はれる。」<sup>(16)</sup>（「綴葉」なる名称は先年日本書誌学会に於いて筆者等の考案した新造語である）と述べている。川瀬氏の著書は一九四三年に刊行されていることから、昭和初期の頃まで「粘葉」「綴葉」は装丁の名称を区別していなかったことがわかる。それを川瀬氏らが、「粘葉」と区別するために「綴葉」という新しい言葉を作ったと述べている。渡部氏の著作は昭和十一年（一九三六）の昭和初期刊行のものであり、おそらく粘葉装、綴葉装の呼称が混沌としていた時代であつたのではないかと思われる。

表紙の装丁は「青色表紙の正中に朱色の題簽」と一般的なものであるが、現在のLC本の表紙は「濃青色に柿渋色題簽」とあり、酷似する。やはり、同一のものの可能性が強い。

さらに、「二丁平均十書きの部分が最も多く、十一行の部分も多少存する。」<sup>(16)</sup>というのは、一冊内で書写行数が一定しないLC本と一致する。LC本の行数について、各帖の行数の報告があるので、同じ行数を巻別にまとめ

| 行数       | 巻名  | 巻数 |
|----------|---|----|
| 8・9      | 桐壺、篝火、若菜下   | 3  |
| 8・9・10   | 帯木  | 1  |
| 8・10     | 幻   | 1  |
| 9        | 空蟬、夕顔、末摘花、閑屋、若菜上、総角、宿木  | 7  |
| 9・10     | 鈴虫、御法、竹河、早蕨、夢浮橋   | 5  |
| 9・10・11  | 東屋、手習   | 2  |
| 10       | 若紫、紅葉賀、花宴、葵、賢木、花散里、須磨、明石、滯標、蓬生、絵合、松風、薄雲、朝顔、少女、初音、胡蝶、野分、行幸、藤袴、真木柱、梅枝、藤裏葉、夕霧、匂宮、紅梅、橋姫、椎本、浮舟 | 29 |
| 10・11    | 玉鬘、螢、常夏、柏木、蜻蛉   | 5  |
| 10・11・12 | 横笛  | 1  |

てみると次表のようになる。十行書きの巻が二十九巻と圧倒的に多いことから、渡部氏の言う「平均十書き」というのは妥当であろうと思われる。十一行を含む巻は八巻（玉鬘・螢・常夏・柏木・蜻蛉・横笛・東屋・手習巻）が確認できる。八・九行書きについての渡部氏の言及はない。さらに、具体的に渡部氏が取り上げている桐壺巻が十・十一行書きではなく、八・九行書きであることから、諸仲本とLC本が同一のものであるとすれば、丁数は五十四帖の調度真ん中辺りの巻を任意で抜き出して記したということになるうか。二十七巻目の篝火巻の辺りを基点とし、その前後六巻である二十一巻目の少女巻から三十三巻目の藤裏葉巻までの十三巻は十・十一行書きであるから、それを全体の行数の基準として採択した可能性が考えられる。

諸仲本は「知人の仲介を得て借覧し校合研究の機をあたへられたものであつて、現在東京市居住の某氏の珍藏される所である。」とし、麗子本と校合するために都内在住の某氏蔵から借用したものであることがわかる。

また、渡部氏は諸仲の系譜について、富仲の息子であり、為仲の父であると系図で示し、長享元年（一四八七）の丁未の生まれであることを明記する。しかし、諸仲本の他の写本を知らないもので、折紙のいう諸仲の真筆であ

るかについては判断方法がないという。ただし、外題に関しては、実隆ではなく、その子である「證本源氏物語」の中の三条西公条【文明十九（一四八七）〜永禄六（一五六三）】の筆と同筆であると指摘する。

そこで実際に日本大学所蔵三条西家本<sup>(17)</sup>（三）の公条筆といわれる桐壺巻の筆跡と、LC本（LC）の題簽文字の筆跡を比較してみたところ、

（三） 桐壺巻の題簽「つほ（徒本）」≠（LC） 桐壺巻題簽「つほ（徒本）」

（三） 桐壺巻二丁表四行目「はゝ（波ゝ）」≠（LC） 帚木巻題簽「はゝ（波ゝ）」

（三） 桐壺巻一丁裏二行目「おほ（保）」して「≠（LC） 夕顔巻題簽「ゆふかほ（保）」

（三） 桐壺巻一丁裏十行目「ひ（比）」きい「≠（LC） 葵巻題簽「あふひ（比）」

（三） 桐壺巻一丁裏四行目「か（加）」んたちめ「≠（LC） 柏木巻題簽「か（加）」しは木」

確かに「つ（徒）」「ほ（本）」「は（波）」「ほ（保）」「ひ（比）」「か（加）」の筆跡が実隆より公条に近いと考えられる。渡部氏が言うように、公条と諸仲は同年に生まれていることから、交流があつたことは十分に考えられる。

『実隆公記』<sup>(18)</sup>においても、永正五年（一五〇八）正月一日条「今夜御祝参仕人々、甘露寺中納言 伯二位 相公

羽林 伊長 雅業 重親 秀房 源諸仲等云々」や永正五年（一五〇八）四月十八日条「今日賀茂祭也、…（中略）…於三間有一獻、大慈光院、安禪寺、大慈院等御参、甘露寺中納言、伯二位、相公羽林、雅業、言綱、源諸仲等候之」によれば、他の公卿らとともに新年の祝いや賀茂祭の日の酒宴に、相公羽林（公条）、諸仲が共に参内している様子が窺える。そこで本章においても、外題は伝三条西公条筆と考えておく。

斎藤氏、高田氏によれば、LC本、添えられた折紙、塗箱には相互にずれがあり、「三者をひとまとまりにして見るのではなく、互いに別々のものが、過去に一つに集まって現在に至った可能性を考慮して、その上で書写年代を考えるべきように思われる。」と述べている。塗箱は確かに別であるとしても、LC本と折紙とは、渡部氏の記述を考慮すれば常に一緒にあったものと考えられる。

さまざまな古写本において、かつては取り上げられていたものの、戦争で行方知れずとなったものも少なくない。その代表格が渡部氏のいう麗子本であり、いくつかの写本と比較して述べている。その中に、五辻諸仲が写し、外題は三条西実隆（公条）によると思われる写本、諸仲本がある。麗子本と同様、諸仲本も所蔵不明であるが、折紙の一致にとどまらず、書誌概要もLC本は諸仲本に極めて近いと思われる。そこで、さらにLC本の本文の実態について考察してみたい。

### 三 LC本と諸仲本の共通異文

諸仲本は現在、渡部氏の『源氏物語従一位麗子本之研究』に掲載されている翻刻活字本文においてのみ、確認することができる本文である。桐壺巻において、渡部氏は麗子本と表現が近いと思われる諸仲本の本文箇所を任意に選び取り、麗子本、諸仲本、さらに河内本（尾州家本）の活字翻刻を上・中・下段の三段に併記して掲載している。加えて、気になる箇所には青表紙本の翻刻本文『湖月抄』も添えている。「桐壺の巻において使用した

諸仲本に就いては所蔵者の都合により、現在、此れ以上詳細に他の部分にも亘つて比較説明する自由を與へられて居らない。併し全部の校合、調査は既に終了して居るので、近く第二の手續として、諸仲本の全貌を明らかにしたい。」と述べてはいるものの、桐壺巻のみの対校にとどまっている。つまり、諸仲本は五十四帖の全てにおいて比較することは出来ず、桐壺巻の翻刻本文の抜粋のみが存在していることになる。そこで、桐壺巻の抜粋箇所  
の諸仲本【諸仲】とLC本【LC】とを比較し、さらに現存する『源氏物語』の写本<sup>(20)</sup>三一本とを対校したところ、  
【諸仲】と【LC】には、【諸仲】【LC】にしか見られない独自の共通異文三十五例がある。

以下、順を追って説明する。なお、対校した『源氏物語』諸写本三一本は以下に掲げた。【LC】【諸仲】が極めて近い本文であり、いかに他の『源氏物語』諸写本と孤立した共通異文を持っているかということを明確にするために、『源氏物語』諸写本の中から、『大成』桐壺巻の底本である池田本(池)の表記、さらに【LC】【諸仲】に近い表記を持つ写本がある場合には比較対象として提示した。なお、渡部氏が諸仲本の翻刻において、麗子本と全く一致する箇所を傍線や点線で省略した箇所の表記は、渡部氏の翻刻した麗子本に従ってそのまま同じように引き写した。対校本文の差が一文字程度の差でわかりにくい箇所には適宜傍線を施した。

【LC】 議会図書館本

(池) 池田本

(書) 書陵部三条西家本

【諸仲】 諸仲本

(肖) 肖柏本

(大) 大島本

【麗子】 従一位麗子本

(三) 日大蔵三条西家本

(明) 明融本

(伏) 伏見天皇家本

(孝親) 専大中山孝親筆本

(大正) 大正大本

(穂) 穂久邇文庫本

(高) 高松官家本

(絵入) 絵入源氏

(保) 保坂本

(尾) 尾州家本

(九大) 九大古活字本

(飯) 飯島本

(平) 平瀬本

(湖月) 湖月抄

(国徹) 国文研正徹本

(御) 御物本

(首書) 首書源氏

(京徹) 京都女子大正徹本

(陽) 陽明家本

(仏) 伝阿仏尼筆本

(慶徹) 慶應大正徹本

(国) 国冬本

(慈) 慈鎮本

(書徹) 書陵部正徹本

(麦) 麦生本

(為秀) 専大冷泉為秀筆本

(阿) 阿里莫本

①【LC】まうのほり給ふ時にも(三ウ二)

【諸仲】まうのほり給ふ時にも

【諸仲】めんたうの戸

(池) では「まうのほりたまふにも」とある。近

近いのは(肖)「めたうのと」であるが、他にはない。

いのは【麗子】「まうのほり給ふ折にも」である。「時」とするのは、【LC】【諸仲】のみである。

③【LC】さしかためて心をあはせて(三ウ五)  
【諸仲】さしかためて心をあはせて

②【LC】めんたうの戸(三ウ五)

(池) では「さしこめこなたかなた心をあはせて」



とある。「こなたかなた」の表記がないのは【LC】  
【諸仲】のみである。

④【LC】しり給ふ人々は（四才八）

【諸仲】しり給ふ人々は

（池）では「しり給人は」とある。「人々」とする  
のは（慈）「しり給へる人々は」である。「しり給ふ  
人々は」とするのは【LC】【諸仲】のみである。

⑤【LC】世にはいておはするなりけり（四才八）

【諸仲】世にはいておはするなりけり

（池）では「世にいておはするものなりけり」と  
ある。近いのは【麗子】「世にはいておはするものな  
りけり」である。【麗子】と一致するのは（陽）、（仏）、  
（慈）であり、（国）は「よにはいておはしけり」と  
あるものの、【LC】【諸仲】と全く同じではない。

⑥【LC】いとよはかになりたまひぬ（四ウ五）

【諸仲】いとよわかになりたまひぬ

（池）では「いとよはうなれは」とある。近いの  
は【麗子】「いとよわうなりたまひぬれは」であるが、  
これも【LC】【諸仲】のみの表記である。

⑦【LC】たゆるやうなれは（五ウ五）

【諸仲】たゆるやうなれは

（池）では「たゆけなれは」とあり、【LC】【諸  
仲】のみの表記である。

⑧【LC】よゐよりはしむへければ（五ウ七）

【諸仲】こよひよりはしむへければ

（池）では「こよひよりときこえいそかせは」と  
ある。前半部分「こよひ」に近いのは【麗子】「こよ  
ひよりあるへければ」である。【LC】「よゐ」と【諸  
仲】「こよひ」は「こ」の有無で一文字の違いが見ら  
れるものの、可能性としては二つある。一つは【L  
C】の「こ」が抜け落ちてしまったこと、もう一つ  
は【諸仲】自体にも「よゐ」があった可能性である。

いずれにしても両者は近い表記と言ってよいだろう。

後半部分を「しむへければ」とする本文は【LC】

【諸仲】のみである。

⑨【LC】御ありさまをは（七ウ六）

【諸仲】御ありさまをは

（池）では「ありさまを」とある。近いのは【麗子】「有さまをは」である。「御」を持つのは【LC】

【諸仲】のみである。

⑩【LC】あひ給へととみに（八オ九）

【諸仲】あひ給へととみに

（池）では「とみに」としかなく、「あひ給へ」がない。同じなのは、（九大）「とみに」（十二オ九）

あひ給へ

であるが、「あひ給へ」が後から補入された表現である。近いのは【麗子】「あひたまひてはとみに」、

（陽）「あひたまへれととみに」、（国）「あひ給えりとみに」、（仏）「あひたまへれととみに」であるが、

いずれも微妙な差異が残る。

⑪【LC】うへの御心はへを（十ウ六）

【諸仲】うへの御心はへを

（池）では「かしこき御心さしを」とある。同じなのは、（飯）「うへの御心はへを」（二〇ウ四）である。前半部分「うへ」とあるのは、（御）「上御心さしをも」、（穂）「うへの御心さしを」である。後半部分「御心はへ」とあるのは、【麗子】「かしこき御心はへをも」、（仏）「かしこき御心はへを」である。

⑫【LC】いふかしくなと（十一オ四）

【諸仲】いふかしくなと

（池）では「ゆかしうなと」とある。近いのは【麗子】「いふかしくなを」であるが、「なと」としているのは【LC】【諸仲】のみである。

⑬【LC】ていしのみかと（十二オ六）

【諸仲】亭子のみかと

(池)では「亭子院の」とある。「院」を「みかと」とするのは【LC】【諸仲】のみであり、その他写本には見られない。

⑭ 【LC】うたをも我御世のみ (十二才七)

【諸仲】うたをも我御世のみ

(池)では「うたをも」とある。渡部氏は解説において、「諸仲本ノ「我御世のみ」ノ一句ハ前後ノ関係ヨリシテ、不穩当ナ存在デアルト思ハレル」と述べる。文意はともかくとして、誤字であるとしても、「我御世のみ」は他の諸本には見られない表現である。【LC】【諸仲】の近似性を裏付けけるものとしては、「我御世のみ」という語句は確かな表現であるといえる。

⑮ 【LC】かきりいみしきゑし (十三才八)

【諸仲】かきりいみしきゑし

(池)では「いみしきゑし」とある。「かきり」の

ある本文は【LC】【諸仲】のみである。

⑯ 【LC】なつかしかりしけはひを (十三才五)

【諸仲】なつかしかりしけはひを

(池)は当該する本文がない。河内本系統の本文に多い代表的な表記の部分である。近いのは【麗子】や(高)「なつかしかりしかたちけはひを」である。「かたち」がないのは、【LC】と【諸仲】のみである。

⑰ 【LC】みないひあはせつゝ (十四才八)

【諸仲】みないひあはせつゝ

(池)では「いひあはせつゝ」とある。「みな」があるのは【LC】【諸仲】のみである。

⑱ 【LC】うたて (十六才二)

【諸仲】うたて

(池)では「うたてそ」とある。「そ」がないのは【LC】【諸仲】のみである。

⑬【LC】物給ふをのつから（十七オ八）

【諸仲】もの給ふをのつから

（池）や【麗子】は「物たまはすをのつから」とある。「もの（物）給ふを」とあるのは【LC】【諸仲】のみである。

⑭【LC】かくもんをせさせたまつり

（十七ウ八）

【諸仲】かくもんをせさせたまつり

（池）は当該する本文がない。近いのは、【麗子】「かくもんをさせたまへり」、（陽）（仏）「御かくもんをせさせたまつり」である。【LC】【諸仲】のみの表記である。

⑮【LC】なすらへにたに（十八オ五）

【諸仲】なすらへにたに

（池）では「なすならひに」とある。「たに」に近いのは（陽）「なすならひにたに」である。これも【L

【諸仲】のみである。

⑯【LC】聞えさせ給へれと（十八ウ七）

【諸仲】きこえさせ給へれと

（池）では「きこえさせ給けり」とある。「給へれ」とするのは【LC】【諸仲】のみである。

⑰【LC】みやすところもいときりつほの更衣の

（十八ウ八）

【諸仲】みやすところもいときりつほの更衣の

（池）では「きりつほのかういの」とある。【麗子】は「きりつほの更衣の」、（仏）（陽）は「きりつほのみやす所も」とある。渡部氏は、【諸仲】は妥当を欠くものであると指摘し、別系統の本文をもって校合傍書したものを転写の際に混入させてしまったものか、または見せ消ちの部分を本行本文として書いてしまったものかと述べ、前者の指摘を採択している。いずれにしても、⑱と同様で、誤写や混入であると

しても「みやすところもいとぎりつほの更衣の」という表現は他本にはない。【LC】【諸仲】が極めて近い本文であるということの証明にはなる。

②4 【LC】女御たちの（十九才二）

【諸仲】女御達の

（池）では「わか女みこたちの」とある。他の本に「女御」という表記はなく、【LC】【諸仲】のみである。

②5 【LC】御はらに（十九才三）

【諸仲】御はらに

（池）では「おなしつらに」とある。近いのは【麗子】「同じ御はらに」である。これも【LC】【諸仲】のみの表記である。

②6 【LC】聞えさせ給ふれは（十九才三）

【諸仲】きこえさせ給ふれは

（池）では「きこえさせ給」とある。近いのは【麗

子】「きこえさせ給ひければ」であるが、「給ふれは」は【LC】【諸仲】のみである。

②7 【LC】たけにかく心ほそくて（十九才四）

【諸仲】たけにかく心細くて

（池）では「かく心ほそくて」とある。近いのは【麗子】「けにかく心細くて」、（飯）「けにかく心ほそくて」である。「たけに」とするのは【LC】【諸仲】のみである。

②8 【LC】見たてまつるそ（十九才七）

【諸仲】見奉るそ

（池）では「見たてまつる」とある。「そ」があるのは【LC】【諸仲】のみである。

②9 【LC】心さし見えたてまつり（二〇才七）

【諸仲】こころさし見え奉り

（池）では「心さしをみえたてまつる」とある。「を」がないのは【LC】【諸仲】のみである。

③⑩【LC】おほしたち（二〇才九）

【諸仲】おほしたち

（池）では「おほしたり」とある。「おほしたち」とあるのは、【LC】【諸仲】以外では、（為秀）の「おほしたち」（三六才八）のみである。

③⑪【LC】かゝやく日のみこと（二〇才四）

【諸仲】かゝやく日のみこと

（池）は「かゝやく日の宮」とある。これも⑭や②③と同様に、「みや」の誤写かと思われるが、「みこ」とするのは【LC】【諸仲】のみであり、両者の近似性を示す確実な証拠である。

③②【LC】おりひつこものなと（二二才九）

【諸仲】おりひつこものなと

（池）では「おりひつものこ物なと」とある。「も」がないのは【LC】【諸仲】のみである。

③③【LC】人々いみしかる（二二才九）

【諸仲】人々いみしかる

（池）は当該する本文がない。近いのは【麗子】「人のいみしかる」である。【LC】【諸仲】のみの表記である。

③④【LC】こゝら見るに人なくも（二四才二）

【諸仲】こゝら見るに人なくも

（池）では「に人なくも」とある。近いのは【麗子】「こゝら見る世にありかたく」、（尾）（高）「こゝら見るよにありかたく」である。前半部は河内本系統の本文「こゝら見るよに」に近く、後半部分は青表紙本系統の本文「に人なくも」と同じ構成の表記は【LC】【諸仲】のみである。

③⑤【LC】はゝみやすところのかたの（二四才五）

【諸仲】母御息所の方の

（池）では「はゝみやす所の御方」とある。「御」がないのは、【LC】【諸仲】のみである。

以上、三五例の【LC】と【諸仲】の独自の共通異文を考察した。②⑩のように傍記で補うことによって一致を見せるもの、⑧のように一字抜け落ちてはいるがそれ以外の表記は二本にしかないもの、⑪の飯島本や③⑩の為秀本のように、【LC】【諸仲】以外にも共通する異文を持つ写本が一本ずつ見られるものもある。さらに誤字や誤写、目移りなど程度による諸本との校異箇所も見受けられる。しかし、右記の五例(②⑧⑩⑪③⑩)を除いて、【LC】【諸仲】にしかない表記が三五例中、三〇例見られることは、【LC】と【諸仲】が『源氏物語』諸写本と孤立した本文であることを裏付けるものといえよう。つまり、【LC】【諸仲】は極めて近い本文形態を持つと考えられるのである。

また、【LC】の独自異文二例がある。

③⑥ 【LC】女君いみしと(五ウ二)

(池) 女もいと  
いみしと

③⑦ 【LC】すくよこの(十八才二)

(池) すくえうの

③⑥「女君」③⑦「すくよこの」は、一見ともに③⑥「君」と「も」、③⑦「よこ」と「えう」のように、よく似ている表記の写し間違いのようにも思える。しかし、誤写であるとしても、【LC】には⑪「宮」を「みこ」としたり、②④「女」を「女御」としたりと呼称についての独自の表現を有しているため、「女君」というのもあながち誤写であると断定できない。もともとこのような本文であった可能性もある。こうした【LC】の独自の本文箇所にとど

まらず、桐壺卷全体には漢字や仮名表記に差が見えることから、【LC】と【諸仲】は全く同一の本文というわけではなく、諸仲本を転写したものが、LC本ということになるのであるだろうか。

さらに興味深いのはLC本や諸仲本の共通異文に、一番近い本文が麗子本であるということである。具体的には【麗子】と近い本文箇所十五例(①⑤⑥⑦⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲)は重要である。次いで、共通箇所が多い本文は(陽)(仏)で五例、(慈)の三例、(飯)(国)の二例であり、陽明本、伝阿仏尼本、慈鎮本、飯島本、国冬本はLC本に近い傾向の本文を有していることも窺えるのである。

#### 四 LC本と麗子本の近似

渡部氏は麗子本との近似性を諸仲本に見ている。前節のLC本と諸仲本の独自の共通異文においても、麗子本に近い本文を確認することができる。そこで最後に、LC本と諸仲本に近似する麗子本の本文箇所を指摘しておきたい。桐壺卷全体の詳細な本文の確認には、本章末に掲げた三本(麗子本、諸仲本、LC本)対校翻刻本文の別途一覧表を参照していただきたい。諸仲本と同じように、麗子本も渡部氏の『源氏物語従一位麗子本之研究』の活字翻刻でしか確認できない本文である。そのため、比較の形式、対校する『源氏物語』写本三十一本は、前節に掲げたものと同じとする。

以下に、桐壺卷における【LC】【諸仲】【麗子】の独自の共通異文十九例を明示した。参考として、池田本や



近似する諸本を併記することとする。なお、第三節と同様に、渡部氏が諸仲本の翻刻において、麗子本と全く一致する箇所を傍線や点線で省略した箇所の表記は、渡部氏の翻刻した麗子本に従ってそのまま同様に引き写した。対校本文の差が一文字程度の差でわかりにくい箇所には適宜傍線を施した。

①

【LC】きよけなる(二才四)

【諸仲】〈翻刻活字がないため、不明〉

【麗子】きよけなる

(池) きよらなる

②

【LC】御むかへをくりの人々(三ウ四)

【諸仲】御むかへおくりの人々

【麗子】御むかへおくりの人々

(池) 御をくりむかへの人

(国) 御むかへおくりの人

③

【LC】おり／＼もあり(三ウ六)

【諸仲】おり／＼もあり

【麗子】折々もあり

(池) 時もおほかり

(国) おり／＼あり

④

【LC】聞えいてたまはす(五才三)

【諸仲】きこえいてたまはす

【麗子】きこえいてたまはす

(池) きこえやらす

⑤

【LC】たゝよそなから(五ウ六)

【諸仲】たゝよそなから

【麗子】たゝよそなから

(池) かくなから

⑥

【LC】いかにもなりはてんを (五ウ六)

【諸仲】いかにもなりはてんを

【麗子】いかにもなりはてんを

(池) ともかくもならむを

⑦

【LC】なき程までも (七ウ二)

【諸仲】なきほとまでも

【麗子】なきほとまでも

(池) なきあとまで

⑧

【LC】かたへをたに (十オ三)

【諸仲】かたへたたに

【麗子】かたへをたに

(池) かたはしをたに

⑨

【LC】まかてよらせ給へ (十オ四)

【諸仲】まかてよらせたまへ

【麗子】まかてよらせたまへ

(池) まかてたまへ

⑩

【LC】人けなきはちかましさを (十ウ三)

【諸仲】人けなきはちかましさを

【麗子】人けなきはちかましさを

(池) 人けなきはちを

(九大) 人けなきはち〇をかましさを (十四ウ七)

⑪

【LC】かたれはつきもせず (十一オ五)

【諸仲】かたれはつきもせず

【麗子】かたれはつきもせず

(池) かたりてつきせず

⑫

【LC】ゑにかきとめたるやうきひ (十三才八)

【諸仲】絵にかきとめたる楊貴妃

【麗子】絵にかきとめたる楊貴妃

(池) 絵にかける楊きひ

⑬

【LC】物うとましようのみよろつに (十八才六)

【諸仲】物うとましようのみよろつに

【麗子】ものうとましようのみよろつに

(池) うとましようのみよろつに

⑭

【LC】すくれたる名たかうきこえおはします

(十八才七)

【諸仲】すくれたる名たかうきこえおはします

【麗子】すくれたるなたかうきこえおはします

(池) すくれ給へるきこえたかくおはします

(陽) すくれたる名たかくおはします

⑮

【LC】なすらはれに給へる (十八ウ三)

【諸仲】なすらはれ似たまへる

【麗子】なすらはれ似たまへる

(池) にたまへる

(仏) (陽) なすらはせ給へる

⑯

【LC】春宮の御は女御の (十八ウ七)

【諸仲】春宮の御母女御の

【麗子】春宮の御母女御の

(池) 春宮の女御の

⑰

【LC】めてたくおほし (二〇ウ六)

【諸仲】めてたくおほし

【麗子】めてたくおほし

(池) ゐたちおほし

(国) みかとよろつにめてたくおほし

⑮

【LC】いと物あてやかなるに(二三ウ一)

【諸仲】物あてやかなるに

【麗子】物あてやかなるに

(池) いとはなやかなるに

(三) 物あさやかなるに

⑯

【LC】いとよからねと人からを(二三ウ五)

【諸仲】いとよからねと人からを

【麗子】いとよからねと人からを

(池) いとよからねと

(国) いとよくはあらねと人からを

以上、【LC】【諸仲】【麗子】の独自の共通異文十九例について考察した。①のように【諸仲】が不明のものや、

⑧⑯のように一字違いの程度のもの、⑩のように傍記であつても同じ表現のものがあるなどは多少見受けられる。

しかし、②③④⑤⑥⑦⑨⑪⑫⑬⑭⑮⑯の十五例は、【LC】【諸仲】【麗子】にしか見られない本文である。

対校した『源氏物語』三一本の諸本にはない表記である。特に①「きよけ」⑫「かきとめたる」⑯「御は、女御」

⑮「いと」物あてやかなるに」などは、『源氏物語』の物語の内容の差異にも関わる重要な本文校異であると考

えられる。さらに、これらの【LC】【諸仲】【麗子】の本文は、第三節と同様に陽明本、伝阿仏尼本、国冬本と

も近い傾向の本文を有していることが窺えるのである。

## 五 おわりに

以上、LC本と五辻諸仲筆本との書誌形態や本文との関わりについて指摘し、LC本の本文の実態を考察した。

LC本は、昭和初期、渡部榮氏が見て以来行方不明であった諸仲真筆本そのものか、あるいはその忠実な転写本であるのか、という二つの道筋が見えてくる。いずれにしても、従一位麗子本との関係で『源氏物語』研究史上に姿を現した伝本、もしくはその伝本に近い転写本が、約八十年の歳月を経て、その存在が明らかになったわけ、写本の伝流史という観点からも、『源氏物語』研究史そのものからも、重要な問題提起をするものであることに変わりはない。

LC本と諸仲本は、本文の漢字仮名表記の差異や異文、書誌による半丁ごとの行数など、多少の違いが見受けられる。本の大きさ、表紙、折紙の酷似から考えれば諸仲本とLC本は同一のものであり、その一方で、異文から考えれば忠実な転写本ということになる。現段階ではどちらの可能性も考えられる。異文の問題の方が重要とも思われ、昭和初期の転写本の可能性も捨てきれない。

しかし、仮に転写本と考えた場合、翻刻資料しかないという問題とさまざまな偶然性を想定しないと、転写本と考えるのは難しいのではないだろうか。

例えば、

江戸時代の正徳元年（一七一一）、諸仲本（A）に折紙（a）が付けられる。

←

江戸時代、諸仲本（A）の転写本として諸仲本（B）を作成。折紙（a）は諸仲本（A）に付属したままである。

←

昭和になり、渡部氏が諸仲本（A）と折紙（a）を見る。

←

その後、諸仲本（B）と折紙（a）が組み合わせられる。

←

平成になり、米国議会図書館に諸仲本（B）と折紙（a）が合わせて所蔵される。

以上のように仮定し、諸仲本（B）を諸仲本（A）の転写本とすると、では、転写はいつ行われたのか、諸仲本（B）は折紙（a）といっ一緒になったのか、という疑問が残るのである。つまり、諸仲本そのものとは断定できずに転写本と仮定した場合、LC本の折紙は諸仲本（A）に付けられた元々の折紙（a）であることは動かしがたいため、希有な偶然の積み重ねを想定しなければならないということになるのである。

渡部氏は麗子本と一致する箇所において、諸仲本の翻刻を省略し、「麗子本ト全ク一致ス」と記すのみで、諸仲本の翻刻を明示していない箇所が多く見られる。さらに、渡部氏旧蔵の麗子本の写真版（巻末奥書、桐壺巻の一

部「太液の芙蓉未央の柳くちきらせ給しにかなはさり」半丁分の抜粋）を著書の巻頭に掲げているため、その写真版の箇所と著書内の渡部氏による麗子本の翻刻箇所とを比較したところ、写真版の「色あひを」が麗子本翻刻では「いろあひ」、写真版の「うるはしうけうらにこそ」が麗子本翻刻では「うるはしうこそ」、写真版の「この露」が麗子本翻刻では「このつゆ」となっており、半丁分においてさえも漢字仮名表記の間違いや脱字等の箇所が計三箇所も見られるのである。ゆえに諸仲本の翻刻においても、漢字仮名表記の間違いや誤字脱字箇所のある可能性が高い。LC本の本文において、漢字仮名表記の差異は傍らに置いておくとして、【LC】【諸仲】の独自の共通異文三十五例が確認できることはやはり重要であると思われる。この三五例の独自の共通異文は、管見の限りではあるが、現存する『源氏物語』三一本の諸本には見られないものであり、【LC】【諸仲】にのみ見える『源氏物語』の本文表記なのである。そういう意味において、両者は『源氏物語』諸本からひどく孤立した本文、すなわち、極めて酷似した本文であると考えられる。

LC本は、渡部氏が麗子本と対校した五辻諸仲真筆本そのものである可能性の高い本文が新出したものと考えて良いのではないだろうか。そして、LC本は諸仲本を通して、麗子本を探る一つの手立てとなる可能性も秘めた本文であることが期待されるのである。

(1) LC本の調査プロジェクトは、国立国語研究所共同研究プロジェクト「仮名写本による文字表記の史的研究」(代表者：斎藤達哉氏、二〇一〇年三月終了)に始まり、人間文化研究機構の人間文化研究連携共同推進事業(平成二十二年度「海外に移出した仮名写本の緊急調査」、平成二十三年度「海外に移出した仮名写本の緊急調査(第二期)」、代表者：高田智和氏)の一部として実現したものである。LC本原本のアメリカ調査は、予備調査(二〇一〇年一月二十五日～二十七日)、詳細調査(二〇一一年一月二十四日～二十五日、二〇一二年二月一日～三日)の計三回が実施され、二〇一〇年、二〇一一年のアメリカ調査メンバーの一人として同行させていただいた。二〇一二年一月に全巻の翻刻を終了し、国立国語研究所HPからテキストを公開している(国立国語研究所「米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文」(<http://textdb01.ninjal.ac.jp/LCgenji/>)。

また、原本画像は桐壺・須磨・柏木巻の三巻を米国議会図書館アジア部が公開している。

(<http://lcweb4.loc.gov/service/asian/asian0001/2012/2012html/2012200842768000toc.html>)。

(2) 斎藤達哉氏・高田智和氏編『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻刻―桐壺・藤裏葉―』(国立国語研究所、二〇一一年三月)。

(3) 伊藤鉄也氏「米国議会図書館アジア部日本課蔵『源氏物語』の調査概要」(斎藤達哉氏・高田智和氏編『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻刻―桐壺・藤裏葉―』(国立国語研究所、二〇一一年三月)。和歌の特殊表記については、豊島秀範氏「アメリカ議会図書館本の和歌表記の特徴―和歌の一行散らし書きを中心に―」(『國學院大學大学院平安文学研究』第二号、二〇一〇年九月)、また、異体仮名の特徴については、斎



藤達哉氏「語の表記における仮名字体の「偏り」と「揺れ」——米国議会図書館蔵源氏物語写本の「ケハヒ」と「カタハライタシ」の表記」（小山利彦氏編著『王朝文学を彩る軌跡』武蔵野書院、二〇一四年）等の詳細な論考がある。

(4) 森繁夫氏『古筆鑑定と極印』（臨川書店、一九八五年復刻版）所収「古筆了伴大人閔和漢書画古筆鑑定家系譜並印章」に拠る。

(5) 高田智和氏・斎藤達哉氏「米国議会図書館蔵『源氏物語』について——書誌と表記の特徴——」（『国立国語研究所論集』第六号、二〇一三年十一月）。

(6) 専修大学図書館編『専修大学図書館蔵 蜂須賀家旧蔵目録』（専修大学出版局、一九八四年、四九～五一頁）。

蜂須賀家旧蔵本十一『倭漢朗詠抄』上下・建長三年写（複製版、専修大学図書館、二〇〇七年）、蜂須賀家旧蔵本十二『倭漢朗詠抄』上下・室町初期写（複製版、専修大学図書館、二〇〇七年）に拠る。

(7) 『尊卑分脉』第三編（『新訂増補国史大系』第六〇巻上、吉川弘文館、二〇〇一年、四〇三頁）、『公卿補任』第三篇（『新訂増補国史大系』五五巻、吉川弘文館、二〇〇一年新装版、三九八頁）、『増補諸家知譜拙記』五ノ五（続群書類従完成会、一九七七年、一九七頁）、『顕伝明名録』上・巻第二・五一（日本古典全集刊行会、一九三八年、八六頁）、『諸家伝』十・五辻（日本古典全集刊行会、一九三九年、八〇〇頁）。

(8) 神田久義氏「米国議会図書館本『源氏物語』の書写形態に関する一試論」（豊島秀範氏編『源氏物語本文の研究』國學院大學文学部日本文学科、二〇一一年）。

(9) 『諸仲藏人奏慶記』(『続群書類従』第十一輯下・公事部装束部、卷第三〇一・公事部、続群書類従完成会、一九五七年、七〇五～七一〇頁)。

(10) 『小松茂美著作集第十六卷 日本書流全史二』(旺文社、一九九九年、三七五・三九四・四〇七頁)。

(11) 『和歌懷紙集成』第十六図「五辻諸仲三首懷紙」(汲古書院、二〇〇五年、三四～三五頁)。「実隆公記」卷五上(続群書類従完成会、一九六三年、九三頁)の永正五年(一五〇八)九月七日程に「諸仲三十六人内画図五、色帟歌所望、預置了」とあり、諸仲が五枚の三十六歌仙の画の色紙に歌を書いてほしいと所望し、色紙を預け置いたという記述が見える。

(12) 渡部榮氏『源氏物語従一位麗子本之研究』(大道社、一九三六年)。

(13) 従一位麗子本に関しては、池田利夫氏「源氏物語の古写本」(別冊國文學『源氏物語事典』(一九八五年五月)の『源氏物語事典』特装版、学燈社、一九九三年六月、三六〇～三六六頁)を参照した。源麗子と、麗子本の伝来やその後の行方について、史実や注釈書類から追った詳細な言及がなされている。

(14) 注(12)に同じ(六五頁)。

(15) 川瀬一馬氏『日本書誌学之研究』(大日本雄弁会講談社、一九四三年、七頁、一九一五～一九一六頁)。

(16) 注(5)に同じ。

(17) 『日本大学蔵 源氏物語』第一卷(八木書店、一九九六年)。

(18) 注(11)の『実隆公記』に同じ(一・三七頁)。

(19) 注(5)に同じ(三頁)。

(20) 本論文の凡例に提示した写本以外の出典を以下に明記する。

(国徹) 人間文化研究機構・国文学研究資料館所蔵『源氏物語』(請求記号…サ四/七五/一一)

(京徹) 京都女子大学図書館吉澤文庫蔵『きりつほ』(請求記号…吉澤文庫/YK/九一三・三六/M)の

マイクロ(国文学研究資料館所蔵、請求記号…二四二/七二/七)の紙焼写真

(慶徹) 慶應義塾図書館所蔵『源氏物語』(請求記号…一三二X/一五八/一)

(書徹) 宮内庁書陵部蔵『源氏物語』(請求記号…五五四/一四、複四〇三二)

(為秀) 専修大学図書館所蔵『源氏物語』伝冷泉為秀筆本(請求記号…A/九一三・三/MU五六)

(孝親) 専修大学図書館所蔵『源氏物語』伝中山孝親筆(請求記号…A/九一三・三/MU五六)

(仏) 伊藤鉄也氏「桐壺」の第二次的本文資料集成—伝阿仏尼筆本・伝慈鎮筆本・従一位麗子本・源氏釈

抄出本—『源氏物語本文の研究』おうふう、二〇〇二年)の翻刻活字資料(伝阿仏尼筆本、室伏信助

氏校合本)に拠る。

(慈) 伊藤鉄也氏「桐壺」の第二次的本文資料集成—伝阿仏尼筆本・伝慈鎮筆本・従一位麗子本・源

氏釈抄出本—『源氏物語本文の研究』おうふう、二〇〇二年)の翻刻活字資料(伝慈鎮筆本、室伏信

助氏校合本)に拠る。

\*以下に、麗子本、諸仲本、LC本の桐壺巻翻刻対校一覧表を掲げる。

【一〇本】  
 (1) いづれの御時にか女御更衣あまた  
 きふらひ給けるなかに  
 (2) 一〇三 もとより我はと思ひあかりたまへ  
 る御かた／＼  
 (3) 一〇五 あさ夕のみやつかへにつけても人  
 の心をのみうこかし  
 (4) 一〇一 かんたちめ殿上人なども  
 (5) 二〇一 世のおほえはなやかなる御かた／＼  
 にもをとらす  
 (6) 二〇二 はか／＼しき御うしろみなければ  
 ことある時は  
 (7) 二〇四 世になくきよけたる  
 (8) 二〇五 いづしかと心もとなからせ給て  
 (9) 二〇一 大かたのやむことなき御思ひはか  
 りにて  
 (10) 二〇二 はつきみははしめよりをしなへて  
 のうへみやつかへなどしただまふへ  
 (11) 三〇一 春宮にもならせすは此みこをすへ  
 給ふへきなめりと  
 (12) 三〇七 なか／＼なるもののおもひをし給ふ  
 人そいとくろしける御さうしは  
 きりつほなりけりあまたの御かた／＼  
 へをすき給つゝひまなき御まへ  
 わたりを人々心つくし給ふもけに  
 こととはりと見えたり  
 (13) 三〇二 まうのほり給ふ時にもあまり打し  
 きる時はうちはしわたとのゝほど

【諸仲本】  
 (1) いづれの御時にか女御御息所あま  
 た侍ひたまふなかに  
 (2) もとより我はとおもひあかりたま  
 へる御方々  
 (3) 朝夕の宮つかへにつけても人の心  
 をのみうこかし  
 (4) 上達部殿上人なども  
 (5) 世のおほえはなやかなる御方々に  
 もねとらす  
 (6) はか／＼しき御うしろみなければ  
 ことある時は  
 (7) 世になくきよけたる  
 (8) いづしかと心もとなからせたまひ  
 (9) 大かたのやむことなき御おもひは  
 かりにて  
 (10) 母君ははしめよりをしなへての上  
 宮仕へしたまふへき  
 (11) 春宮にもようせすはこの御子のぬ  
 だまふへきなめりと  
 (12) なか／＼なる物おもひをそしたま  
 へ人そいとくろしける御さう  
 しはきりつほなりけりあまたの御  
 方々をすきたまひてひまなき御前  
 わたりに人の心をつくしただまふも  
 けにこととはりと見えたり  
 (13) まうのほり給ふ折にもあまりうち  
 しきる時々は打懸渡殿のほど／＼

かしこの道にあやしきわざをしつ御むかへおくりの人々もきぬのすそたへかたくなき事ともおほかり

(14) 三ウ五 又ある時はえさらぬめんだうの戸をさしかためて心をあはせてはしたなめわつらはし給ふおほり／＼もあり

(15) 四オ二 此みこみつになり給ふ年御はかまきの事あり一のみこのたてまつりしにをたらすくつかさおさめ殿の物をつくしていみしうせさせ給ふ

(16) 四オ六 ありかたにくめつらしきまて見え給ふを見たてまつるかきりの人々はえそねみあへ給す物のこころしり給ふ人々はかゝる人も世にはいておはするなりけりとあさましきまて目をおとろかし給ふ

(17) 四ウ五 だゝ五六日のほどにいとよはかにたりたまひぬ

(18) 五オ一 いふ方なくかなしとおほさる

(19) 五オ二 ことに出て聞えいたまはす

(20) 五オ四 きしかたゆくすゑおほしめされす我もなく／＼よろづを要りのたまはす

(21) 五オ九 をくれさきたゞしと娶らせ給けるにかく打すてゝはざりともゆきやらしといひもやらせたまはすむせかへらせ給ふ御ありさまを女君いみしと見たてまつらせたまひて

かしこの道にあやしきわざをしつ御むかへおくりの人々もきぬのすそたへかたくなき事ともおほかり

(14) 又あるときはえさらぬめんだうの戸をさしかためて心をあはせてはしたなめわつらはし給ふおほり／＼もあり

(15) この御三つになりたまふ年御はかまきの事あり一のみこの奉りしににおとらす内藤家納との物をつくしていみしうせさせたまふ

(16) ありかたにくめつらしきまて見え給ふを見たてまつる限の人々はえそねみあへたまはす物の心しりたす人もかゝる人も世にはいておはするものなりけりとあさましきまて目をおとろかし給ふ

(17) だゝ五六日のほどにいとよわうなたりたまひぬ

(18) いふ方なくかなしとおほさる

(19) ことにいててもきこえいたまはす

(20) きし方ゆく未おほしめされす我もなく／＼よろづをきりのたまはす

(21) おくれさきたゞしとちきらせたまひけるをかくうらすてゝはざりともゆきやらしといひもやらせたまはすむせかへらせたまふ御有さまを女いみしと見たてまつらせたまひて

かしこの道にはあやしきわざをしつ御むかへおくりの人々も衣のすそたへかたくなき事ともおほかり

(14) またある時はえさらぬめんだうの戸をさしかためて心をあはせてはしたなめわつらはし給ふおほり／＼もあり

(15) この御三つになり給ふ年御はかまきのことあり一のみこのたてまつりしににおとらすくつかさをさめどのの物をつくしていみしうせさせ給ふ

(16) ありかたにくめつらしきまて見え給ふを見たてまつるかきりの人々はえそねみあへ給す物のこころしり給ふ人々はかゝる人も世にはいておはするなりけりとあさましきまて目をおとろかし給ふ

(17) だゝ五六日のほどにいとよわかにたりたまひぬ

(18) いふ方なくかなしとおほさる

(19) ことにいててもきこえいたまはす

(20) きし方ゆく未おほしめされす我もなく／＼よろづをきりのたまはす

(21) おくれさきたゞしとちきらせたまひけるをかくうらすてゝはざりともゆきやらしといひもやらせたまはすむせかへらせたまふ御有さまを女いみしと見たてまつらせたまひて

こゝかしこのみらにはあやしきわざをしつ御むかへをくりの人々もきぬのすそたへかたくなき事ともおほかり

(14) 三ウ五 又ある時はえさらぬめんだうの戸をさしかためて心をあはせてはしたなめわつらはし給ふおほり／＼もあり

(15) 四オ二 此みこみつになり給ふとし御はかまきの事あり一のみこのたてまつりしにをたらすくつかさおさめ殿の物をつくしていみしうせさせ給ふ

(16) 四オ六 ありかたにくめつらしきまて見え給ふを見たてまつるかきりの人々はえそねみあへ給す物のこころしり給ふ人々はかゝる人も世にはいておはするなりけりとあさましきまて目をおとろかし給ふ

(17) 四ウ五 だゝ五六日のほどにいとよはかにたりたまひぬ

(18) 五オ一 いふ方なくかなしとおほさる

(19) 五オ二 ことに出て聞えいたまはす

(20) 五オ四 きしかたゆくすゑおほしめされす我もなく／＼よろづを要りのたまはす

(21) 五オ九 をくれさきたゞしと娶らせ給けるにかく打すてゝはざりともゆきやらしといひもやらせたまはすむせかへらせ給ふ御ありさまを女君いみしと見たてまつらせたまひて

ともあまだはしむへき事おぼせう  
けたまはれるこよりよりあるへけ  
れはわりなりおぼしめしなからま  
かてきせだてまつりたまふ御むね  
つとふたからせたまひてつゆまと  
るませたまはす明しかねさせたま  
ふ

(23)  
夜なか打すくるほどにたえはてた  
まひぬとて泣ききけは御使もい  
まひなくかへりまいりたるをき  
こしめすまゝに御心まとひして何  
事もおぼしわかれすいみしくてこ  
もりおぼします

(24)  
なほおぼするものとのみおぼゆる  
かいとかないければ

(25)  
さかしくのたまひつれと車より  
おちぬへくまろひまとひたまへは

(26)  
三位のくらくらいおくりたまふよし勅  
使きてそのせんみやうよむなんい  
とかなしきわざなりける

(27)  
物おもひしり給ふはさまかたな  
とのためたかりしにだそへて心は  
のなたらかにめやすくにくみ所な  
かりこなど今そおもひいつる

(28)  
なきほどまても人の胸あくましか  
りける人の御おほえかな

(29)  
若宮の御こひしさのみつきせすお  
もほしいてられてしたしき女房御  
めのとなどをつかはしつゝ有さま  
をはきこしめす

(30)  
南おもてにおろして母君もあひた  
まひてはとみにえ物ものたまはす

(31)  
とひあはすへき人たになきをしの  
ひてはまいりたまひてかひなき御  
ものかたりをだにとなん

すほうともあまだいむへき事人々  
におほせこと給ふにこよりよりは  
しむへければわりなりおぼしめし  
なからまかてさせたまひてつ  
御むねつとふたからせたまひてつ  
ゆまとるませたまはすあかしかね  
させ給ふ

(2)  
よ中する程になんたえはて給ひ  
ぬとてなきさわけは御つかひもあ  
いなくかへりまいりたるをきこし  
めすまゝに御心まとひして何事  
もおぼしめすいみしくてこもりおぼ  
します

(4)  
なをおぼするものとのみおぼゆる  
かいとかひなければ

(5)  
さかしくのたまひつれと御車より  
おちぬへくころひまとひ給へは

(6)  
三位のくらくらいおくり給ふよし勅使  
りてそのせんみやうよむいとかな  
しきことなりける

(7)  
ものおもひしり給ふはさまかたな  
などのためたかりしにだそへて心は  
のなたらかにやすくにくみこころ  
なかりし事などいまそおほしいつ  
る

(8)  
なきほどまても人の胸あくましか  
りける人の御おほえかな

(9)  
わかみやの御こひしさのみつきせ  
すおほしいてつゝしたしき女房御  
めのとなどをつかはしつゝ御あり  
さまをはきこしめす

(10)  
みなみおもてにおろして母君あひ  
給へととみにえものたまはす

(11)  
とひあはすへき人たになきをしの  
ひてはまいりて御心なき御ものか  
たりをだになん

おほせこと給ふにこよりよりはしむ  
へければわりなりおぼしめされな  
からまかてさせたまひてつり給ふ御  
むねつとふたからせ給て露まどるま  
せたまはすあかしかねさせ給ふ

(3)  
夜中するほどになんたえ入たま  
ひぬとてなきさわけは御つかひも  
あへなくかへりまいりたるをきこ  
しめすまゝに御心まとひして何事  
もおぼしめされすいみしくてこも  
りおぼします

(4)  
なをおぼする物とのみおぼゆるか  
いとかひなければ

(5)  
さかしくのたまひつれと御くるま  
よりもおちぬへくこよりまとひ給  
へは

(6)  
三位のくらくらおをくり給ふよし勅  
くしきたりてその宣命よむいとか  
なしき事なりける

(7)  
ものおもひしり給ふはさまかたな  
などのためたかりしにだそへて心は  
のなたらかにめやすくにくみと  
ころなかりしことなどいまそおほ  
し出る

(8)  
なきほどまても人の胸あくましか  
りけるひとの御おほえかな

(9)  
わかみやの御恋しさののみつきせ  
すおほし出つゝしたしき女房御め  
のとなどをつかはしつゝ御ありさ  
まをはきこしめす

(10)  
みなみおもてにおろしてはきみ  
あひ給へととみにえものたま  
はす

(11)  
とひあはすへき人たになきをしの  
ひてはまいり給て御心なき御物か  
たりをだになんや

(32) ちるともにくらさぬおほつかなさ  
をくちおほしくいまはなほ昔のかた  
みにぞそらへてものしたまへ

(33) くれまどふ心のやみもたへかたき  
かたへをたにはるくはかりなひ  
ときこえまほしう侍を御わたくし  
にも心のとかにまかてよらせたま

(34) 人けなきはちかましさをかくし

(35) かしこき御心はへをおもひたま  
へられ侍るこれわたりなき心のや  
みになんといひもやらす

(36) かたくなになりはつるも前の世の  
いふかしくなんとうちかへしつゝ  
しほたれかちらにのみおはしますと  
かたれはつきもせず

(37) 命綱はまいりてまた大とのこもら  
せ給はさりけるをいとあはれに  
見たてまつる

(38) 長良殿の御息亭子院のかせ給て  
伊勢と實之に上ませたまへる大和  
ことのほをもつてのうたを  
たすそのすちをまへることにはせ  
させたまふ

(39) 絵にかきとめたる梅貴妃のかたち  
はいかしき最師といへどもふてか  
きりありければいとにほひすくな  
し『大液の芙蓉未央の柳もけにか  
よひたりしかたぢ色あひをからめ  
いたるよそひはうるはしうけうら  
にこそありけめなつかしううた  
けなりしありきまほお花の風にな  
ひきたるよりなほよひなてしこの  
つめにぬれたるよりなうたくな  
つかしかりしかたけはひをおほ  
しいづるに花とりの色にもねに  
もよそふべきかたそなき』

(32) ちるともにくらさぬおほつかなさ  
をくちおほしくいまはなほ昔のかた  
みにぞそらへてものしたまへ

(33) くれまどふ心のやみもたへかたき  
かたへをたにはるくはかりなひ  
ときこえまほしう侍を御わたくし  
にも心のとかにまかてよらせたま

(34) 人けなきはちかましさをかくし

(35) うへの御心はへをおもひたまへら  
れ侍るこれわたりなき心のやみに  
なんといひもやらす

(36) かたくなになりはつるも前の世の  
いふかしくなんとうちかへしつゝ  
しほたれかちらにのみおはしますと  
かたれはつきもせず

(37) 命綱はまいりてまた大とのこもら  
せたまはさりけりとあはれに見た  
てまつる

(38) 長良殿の御息亭子のみかとのか  
せ給て伊勢と實之に上ませたまへ  
る大和ことのほをもつてのう  
たをくちおほしくいまはなほ昔のか  
たみにぞそらへてものしたまへ

(39) 繪にかきとめたる梅貴妃のかたち  
はいかしき最師といへどもふてか  
きりありければいとにほひすくな  
し『大液の芙蓉未央の柳もけにか  
よひたりしかたぢ色あひをからめ  
いたるよそひはうるはしうけうら  
にこそありけめなつかしううた  
けなりしありきまほお花の風にな  
ひきたるよりなほよひなてしこの  
つめにぬれたるよりなうたくな  
つかしかりしかたけはひをおほ  
しいづるに花とりの色にもねに  
もよそふべきかたそなき

(32) ちるともにくらさぬおほつかな  
さをくちおほしくいまはなほ昔のか  
たみにぞそらへてものしたまへ

(33) ちるともにくらさぬおほつかな  
さをくちおほしくいまはなほ昔のか  
たみにぞそらへてものしたまへ

(34) 人けなきはちかましさをかくし

(35) うへの御心はへをおもひたまへら  
れ侍るこれわたりなき心のやみに  
なんといひもやらす

(36) かたくなになりはつるも前の世  
のいふかしくなんとうちかへしつゝ  
しほたれかちらにのみおはしますと  
かたれはつきもせず

(37) みやう嬌はまいりてまたおほとの  
こもらせたまはさりけるとあはれ  
に見たてまつる

(38) ちやうこんのかの御免ていしのみ  
かどのかせ給て伊勢とつらゆきに  
よませ給へるやまことの葉をも  
もつてのうたをくちおほしくいま  
はなほ昔のかたみにぞそらへてもの  
したまへ

(39) ちるともにくらさぬおほつかな  
さをくちおほしくいまはなほ昔のか  
たみにぞそらへてものしたまへ

(40) 十三ウ九  
 二きてんには世の中物むつかし  
 おほざれてうへの御つほねにも  
 うおほざれてうへの御つほねにも  
 のほり給はす

(41) 十四ウ一  
 よるのおとに入らせ給てもつめ  
 まどろませ給ふ事いとたかし

(42) 十四ウ七  
 おと二をんないとわきなきわさか  
 などみなひあはせつゝなけくさ  
 きの世にもさるへき契りこそは  
 はしましけめ

(43) 十六ウ六  
 なすらひ給ふへきたにぞなかりけ  
 る何れの御かたへもえかくれあ  
 へ給はす

(44) 十六ウ一  
 すていひつゝけはこととしう  
 うたてなりぬへき人の御さまなり  
 ける

(45) 十七ウ五  
 かくありかたき人にたいめしたる  
 よる二ひのかへりてはかなしか  
 るへきこと心の心へを

(46) 十七ウ八  
 おほやけよりもおほくの物給ふを  
 のつからことひろこりてもらさせ  
 たまはねと春宮のおほちおとゝな  
 とまきつたまひて

(47) 十七ウ七  
 ゆくさきもたのもしけなめる事と  
 おほしきためていよ／＼かくもん  
 をせさせたまつりみち／＼のさ  
 えをならはさせ給ふにきはことにか  
 しこくて

(48) 十八ウ二  
 すく上このかしこきみちの人に  
 かんかへさせ給ふにもおなしさまに  
 のみかんかへ申せは

(49) 十八ウ四  
 とし月にそへてみやすむとろの  
 御事をおほしわするゝ時なしく  
 さむやとさるへき人々まいらせ給  
 へとなすらへにだに招きよるゝた  
 にかたき世かなと物うとまじうの

(40) 十三ウ九  
 弘備殿にはよのなかもものむつかし  
 うおほざれてうへの御つほねにも  
 のほり給はす

(41) 十四ウ一  
 よるのおとに入らせ給てもつめ  
 まどろませ給ふ事いとたかし

(42) 十四ウ七  
 おと二をんないとわきなきわさか  
 などひあはせつゝなけくさ  
 世にもさるへき契りこそは  
 はしましけめ

(43) 十六ウ六  
 なすらひ給ふへきたにぞなかりけ  
 る何れの御かたへもえかくれあ  
 へ給はす

(44) 十六ウ一  
 すていひつゝけはこととしう  
 うたてなりぬへき人の御さまなり  
 ける

(45) 十七ウ五  
 かくありかたき人にたいめしたる  
 よる二ひのかへりてはかなしか  
 るへきこと心の心へを

(46) 十七ウ八  
 おほやけよりもおほくの物給ふを  
 のつからことひろこりてもらさせ  
 たまはねと春宮のおほちおとゝな  
 とまきつたまひて

(47) 十七ウ七  
 ゆくさきもたのもしけなめる事と  
 おほしきためていよ／＼かくもん  
 をせさせたまつりみち／＼のさ  
 えをならはさせ給ふにきはことにか  
 しこくて

(48) 十八ウ二  
 すく上このかしこきみちの人に  
 かんかへさせ給ふにもおなしさまに  
 のみかんかへ申せは

(49) 十八ウ四  
 とし月にそへて御患所の御ことをお  
 ほしわするるときなしくさむや  
 とさるへき人々まいらせ給へとな  
 すらへにだに招きよるゝたにいた  
 だき世かなとものうとまじうのみ

(40) 十三ウ九  
 弘備殿にはよのなかもものむつかし  
 うおほざれてうへの御つほねにも  
 のほり給はす

(41) 十四ウ一  
 よるのおとに入らせ給てもつめ  
 まどろませ給ふ事いとたかし

(42) 十四ウ七  
 おと二をんないとわきなきわさか  
 などみなひあはせつゝなけくさ  
 きの世にもさるへき契りこそは  
 はしましけめ

(43) 十六ウ六  
 なすらひ給ふへきたにぞなかりけ  
 る何れの御かたへもえかくれあ  
 へ給はす

(44) 十六ウ一  
 すていひつゝけはこととしう  
 うたてなりぬへき人の御さまなり  
 ける

(45) 十七ウ五  
 かくありかたき人にたいめしたる  
 よる二ひのかへりてはかなしか  
 るへきこと心の心へを

(46) 十七ウ八  
 おほやけよりもおほくの物給ふを  
 のつからことひろこりてもらさせ  
 たまはねと春宮のおほちおとゝな  
 とまきつたまひて

(47) 十七ウ七  
 ゆくさきもたのもしけなめる事と  
 おほしきためていよ／＼かくもん  
 をせさせたまつりみち／＼のさ  
 えをならはさせ給ふにきはことにか  
 しこくて

(48) 十八ウ二  
 すく上このかしこきみちの人に  
 かんかへさせ給ふにもおなしさまに  
 のみかんかへ申せは

(49) 十八ウ四  
 とし月にそへてみやすむ所の御事を  
 わするゝ時なしくさむやと  
 さるへき人々まいらせたまへとな  
 すらへにだに招きよるゝたにいた  
 き世かなと物うとまじうのみよる



よろづにおほしなりぬるに先帝の  
四の宮の御かたよりすくれたる  
なたかうきこえおほします

(50) うせたまひにし御息所の御かたち  
になすらはれ似たまへる人を三代  
の宮つかへにつたはりぬるに見  
つけつけぬに

(51) まことにとやと御ころとまりてね  
んころにきこえさせたまひけり母  
后あなおそろしや春宮の御母女御  
の御心いとさかなくてきりつほの  
更衣の

(52) 心ほそきさまにておはしますに唯  
わか女み子達の 同し御はらにおも  
ひきこえんといねんころにきこ  
えさせ給ひければ (中略) 兵部卿  
のみやなどにもけにかく心細くてお  
はしますさんより

(53) とり／＼といとめてたれとうち  
おとなひたまへるにいとわかうち  
つしけにてせらにかくれ給へど  
朝夕にさふらひたまへはおのつか  
らもり見奉る母御息所はかけたに  
おほえたまはぬにこれなんいとは  
り似給へりと典侍のきこえけるを  
おさなき御心こゝちに

(54) かよひて見えたまふも似けなから  
すなとときこえたまへればおさな心  
ちにもうれしとおもひてはかなき  
花もみちにつけてもおかしきさま  
なるをまつこゝろさし見え奉り弘  
徽殿の女御又二のみやとも御中そ  
は／＼しきめくもとよりおほしな  
またちいててものしとおほしたち  
世にたくひなしと見奉り給ふ名た  
かくおはする女御の御かたちにも  
なをこのきみのにほはしきは藤  
ならひ給て御おほえもと／＼な  
れはか／＼やく日のみこときこめ  
る

(55) この君の御わらはすかたいとかへ  
まうくおほせとぞてのみあるへき  
この君の御わらはすかたいとかへ  
まうくおほせとぞてのみあるへき

つにおほしなりぬるに先帝の四宮  
の御かたち世にすくれたる名たか  
うきこえおほします

(50) うせたまひにし御息所の御かたち  
になすらはれ似たまへる人を三代  
の宮つかへにつたはりぬるに見  
つけつけぬに

(51) まことにとやと御ころとまりてね  
んころにきこえさせ給へれと母き  
さきあなおそろしや春宮の御母女  
御のみこころいとさかなくてみや  
すところもいときりつほの更衣の

(52) 心ほそきさまにておはしますに唯  
女御達の 御はらにおもひきこえん  
かとねんころにきこえさせ給ふれ  
は (中略) 兵部卿のみやなどだけ  
にかく心細くておはしますさんより  
は

(53) とり／＼といとめてたれとうち  
おとなひなとし給へるにいとわか  
ううつくしけにてせらにかくれ給  
へど朝夕にさふらひたまへはおの  
つからもり見奉る母御息所はかけ  
けたにおほえたまはぬにこれなん  
いとより似給へりと典侍のきこえ  
けるをおさなき御心こゝちに

(54) かよひて見えたまふも似けなから  
すなとときこえたまへればおさな心  
ちにもうれしとおもひてはかなき  
花もみちにつけてもおかしきさま  
なるをまつこゝろさし見え奉り弘  
徽殿の女御又二のみやとも御中そ  
は／＼しきめくもとよりおほしな  
またちいててものしとおほしたち  
世にたくひなしと見奉り給ふ名た  
かくおはする女御の御かたちにも  
なをこのきみのにほはしきは藤  
ならひ給て御おほえもと／＼な  
れはか／＼やく日のみこときこめ  
る

(55) この君の御わらはすかたいとかへ  
まうくおほせとぞてのみあるへき  
この君の御わらはすかたいとかへ  
まうくおほせとぞてのみあるへき

みよろつにおほしなりぬるに先帝  
の四宮の御かたち世にすくれたる  
名たかうきこえおほします

(50) うせたまひにしやすところの御か  
ちになすらはれに給へる人を三代  
の宮つかへにつたはりぬるにえみ  
だてまつりつけぬを

(51) まことにとやと御心とまりてねん  
ころに聞えさせ給へれとさき  
あなおそろしや春宮の御は女御  
のみこころいとさかなくてみやす  
ところもいときりつほの更衣の

(52) 心ほそきさまにておはしますに  
た女御たちの御はらに思ひ聞え  
むかはといねんころに聞えさせ給  
ふれば (中略) 兵部卿の宮などた  
けにかく心ほそくておはしますさん  
よりは

(53) とり／＼といとめてたれとうち  
おとなひなとし給へるにいとわか  
ううつくしけにてせらにかくれ給  
へどあさ夕にさふらひ給へはをの  
つから見だてまつるをえはつみや  
どとねなんいとはより似給へりと内侍  
のすけの聞えけるをおさなき御  
心こゝちに

(54) かよひて見え給ふもにけなから  
すなとときこえたまへればおさな心  
ちにもうれしと思ひてはかなき花  
もみちにつけてもおかしきさまな  
るをえはまつ心さし見えだてまつ  
こゝろさし心よせきこえ給へればこ  
そは／＼しきめく打そへてもとよ  
りのにくさもたらひてよものしと  
おほしたち世にたくひなしと見た  
てまつり給ふ名たかくおはする女  
御の御かたちにもなを此世のにほ  
しけなをよの入ひかるまときこ  
ゆ藤つほならひ給て御おほえもと  
り／＼なれはか／＼やく日のみこ  
そ聞ゆ

ならねは十二にて元服したまふめ  
てたくおほしいとみなてかきりあり  
ることに事をぞくせせ給

(56) その日のお前のおりひつものこも  
のなど人のいみしかる右大井なん  
うけたまはりて

(57) なか／＼かきりなくいかめしうな  
んありけるやかてその夜

(58) いつかたにても物あてやかなるに

(59) 御中はいとよからねと人からをえ  
見すくし給はてかしつき給ふ四の  
君にあはせたまへり

(60) うへのつねにおほつかなかりめし  
まつはせは心の中には唯藤盛の御  
ありさまをたくひなしとおもひき  
こえたまひてさやうならん人をこ  
そ見めこゝら見る世にありかた  
おほしけるかなおほいのひめ  
君いとつかしけにかしつかれたる  
人とは見ゆれと心にもつかすおさ  
なきほどと御ひと心にかかりて  
いとくるしきまでそおほしける

(61) 御心につくへき御あそひをしよる  
つにおふな／＼おほしいたつこ  
うにおはものしけいさを御さうし  
にて母御息所の御方の人々里の殿  
はもくすたりたくみつかさなどに宣  
旨くたりたくひなくあらためつ  
くらせ給ふ

(62) おもしろきとこるなりけるをいと  
池のこゝろひろくしなしてめてた  
くへりのよし

事ならねは十二にて元服せさせ  
てまつり給ふめたくおほしいと  
なみてかきりあることに事をぞく  
させ給

(56) その日のお前のおりひつものな  
と人々いみしかる左大井なんうけ  
たまはりて

(57) なか／＼かきりなくいかめしうな  
んありけるやかてその夜

(58) いつかたにても物あてやかなるに

(59) 御中はいとよからねと人からをえ  
見すくし給はてかしつき給ふ四の  
君にあはせたまへり

(60) うへのつねにおほつかなかりめし  
まつはせは心の中に唯藤盛の御  
ありさまをたくひなしとおもひき  
えたまひてさやうならん人をこ  
そ見めこゝら見るにに人なくもお  
ほしけるかなおほいのひめ  
いとつかしけにかしつかれたる人  
とは見ゆれと心にもつかすおさ  
なきほどと御ひと心にかかりて  
いとくるしきまでそおほしける

(61) 御心につくへき御あそひをしよ  
つにおふな／＼おほしいたつこ  
うにおはものしけいさを御さうし  
にて母御息所の方の人々里の殿は  
もくすたりたくみつかさなどに宣  
旨くたりてになうあらためつくら  
給ふ

(62) おもしろきとこるなりけるをいと  
池のこゝろひろくしなしてめて  
たくへりのよし

(55) 二十う四  
このきみの御わらははすかたいか  
へまうくおほせとさてのみある  
き事ならねは十二にて御けんふく  
せさせたまへり給ふめたくお  
ほしいとみなてかきりあることに  
ことをぞくせさせたまひぬ

(56) 二二う八  
その日の御まへのおりひつもの  
など人々いみしかる左大井なんう  
けたまはりて

(57) 二二う三  
なか／＼かきりなくいかめしうな  
んやかてその夜

(58) 二二う九  
いつかたにても物あてやかなるに  
かなるに

(59) 二二う五  
御中はいとよからねと人からをえ  
見すくしたまはてかしつき給ふ四  
のきみにあはせ給へり

(60) 二二う八  
うへのつねにおほつかなかりめし  
まつはせは心やすくさとすみえ  
ほの御ありさまをたくひなしと  
もひ聞え給てさやうならん人をこ  
そ見めこゝら見るにに人なくも  
おほしけるかなおほいのひめ  
いとつかしけにかしつかれたる人  
とは見ゆれと心にもつかすお  
ほえ給ておさなき種の御ひと

(61) 二二う三  
御こゝろにつくへき御あそひをし  
よるつにおふな／＼おほしいたつ  
こにおはものしけいさを御さう  
く内にはもとのしけいさを御さう  
しにてはみやすとこるのかたの  
人々まかてからさふらはせ給ふ  
さとの殿はもくすたりたくみつか  
さなど宣旨くたりてになうあら  
ためつくらせ給ふ

(62) 二二う八  
おもしろきとこるなりけるをい  
と池のこゝろひろくしなしてめ  
てたくへりのよし

第三篇 野々口立圃と『源氏物語』

## 序 章

第三篇では、江戸初期の俳諧師・俳画師であつた野々口立圃における『源氏物語』の享受の一端について考察する。

野々口立圃<sup>(一)</sup>【文禄四年（一五九五）～寛文九年（一六七〇）】は、名は親重、通称、庄右衛門（『寛文比俳諧宗匠并素人名誉人』・市兵衛・宗左衛門（『俳林良材集』）等、屋号は雛屋・紅粉屋（『滑稽太平記』）、雅号は立圃・松翁・松斎・如入斎、法名は日祐・松翁庵立圃日英。先祖は累代の武士で、祖父野々口義親は藤原氏の諸司を勤めた後、丹後国桑田郡本目村に退隠する（『立圃追悼集』『俳林良材集』）。父の代に京都に移り、雛人形屋を創業したという。『難波の別』によれば、「我は都一条の町に生れ出て、四十余年物思ひくらせし身なりしが」とあり、京都一条で出生したという。早くから猪苗代兼与に連歌を、松永貞徳に俳諧を、尊朝親王に書を、烏丸光広に和歌を、狩野探幽に画を学んだという。貞門七俳仙の一人でもある。以下、立圃の略暦を追ってみたい（\*本章末に「野々口立圃略年譜」を作成した）。

寛永八年（一六三一）年二月、松江重頼と『犬子集』の撰集に着手する。しかし、その後疎遠となった重頼が寛永十年（一六三三）正月、単独で『犬子集』を刊行、これに対抗して同年十一月一日、一門の句を増補した『誹諧発句帳』を刊行する。寛永十三年（一六三六）二月二三日に俳諧作法書の嚆矢『はなひ草』が成立する。翌年正月晦日、父の『追善九百韵』を独吟興行し、刊行の際には「立圃」と署名する。この頃、入道したかと思われる

る。

『滑稽太平記』によれば、寛永十七年（一六四〇）四六歳の時、初めて江戸へ赴く。以後、江戸、京都、大阪、筑紫等へと居所を転々とする。慶安元年（一六四八）には九州へ向かい、翌年、秋月城主長興と太宰府天満宮奉納の両吟「俳諧千句」を興行する。慶安四年（一六五二）四月上旬、初めて備後国福山藩に下向する。以後、寛文元年（一六六一）頃までの十一年間に渡って福山藩に仕え、俳諧を指南した。同年九月に『草戸記』、十一月に『俳諧作法』を執筆する。『隔蓑記』によれば、承応元年（一六五二）四月二四日、金閣寺住持である鳳林承章を初めて訪問する。同年八月十二日、福山藩主水野勝俊参府のため福山を出発、立圍も福山から同乗し、扈從している。

承応三年（一六五四）六十歳の時、『源氏物語』の梗概書である『十帖源氏』が成立したとされる。明暦三年（一六五七）二月二四日、水野家京都屋敷（一条下ル松下突抜町）留守居役中嶋治右衛門を同道して承章を訪ね、藩主日向守（水野勝貞）所望の歌仙絵色紙に聖護院宮（道晃法親王）の染筆周旋を依頼している。万治三年（一六六〇）に『難波の別』を執筆する。同年七月五日、備後国水野内記（勝信）息女の詠歌の点取幹旋の依頼状を、中嶋治右衛門の書状と共に立圍は承章へ送っている。このように、福山藩主水野家と承章との仲介役を立圍は常に担っている。文芸教授の周旋のお礼として、その後も水野家から直接承章の所へ、畳表や備後素麺などが届けられている。

万治三年（一六六〇）九月八日、承章が仙洞に参上し、後水尾院に立圍作「十八番之発句合」二巻を奉献、叡

覧に入れている。地下のものであった俳諧が堂上の人々にまで親しまれるようになったことが窺える。同年十二月、『源氏小鏡』の内容に俳諧の発句と絵を添えてさらに平易にした『源氏鬢鏡』が刊行され、立圃は「篝火も螢もひかる源氏かな」（篝火巻）と、一句を入集している。

万治四年（寛文元年、一六六一）一月九日、天満の川崎二郎左衛門方孝宛返信に、立圃は、『十帖源氏』が出来たので持参したいこと、「源氏の絵」は知り合いを一・二箇所問い合わせるも、皆「大き二候て」ご注文のようなものは無く、特別に「あつらえ」るなら可能であること等を認めている。同年二月、『十帖源氏』をさらにコンパクト化した『おさな源氏』が成立、刊行は奥書に「寛文元辛丑仲春立圃」とあることから、「寛文」と改元（四月二十五日から「寛文」となる）された後のことと思われる。同年四月、『十帖源氏』が刊行される（刊記には「万治四年卯月」とある）。

立圃は俳諧師として活躍する傍ら、俳画の祖とも称されていた。慶安三年（一六五〇）以前に成立したとされる立圃の代表作『休息歌仙』は俳画の源と言われている。前述した『源氏物語』の梗概書である『十帖源氏』『おさな源氏』の挿絵も立圃によるものである。寛文六年（一六六七）『十二枝句合』を染筆、寛文七年（一六六八）春、仮題「紫式部墨描横物画讃」に、「ありやなしやこそまことの花の種 立圃書」「絵は六十歳の比より新稽古にて今七十三歳の清書なれば、心ありて御覧じ候へかし」とあることから、絵は晩学であったようである。

寛文九年（一六七〇）九月三十日未の刻、七十五歳で永眠する。辞世の句「月花の三句目を今しる世かな」。法名、松翁庵立圃日英。死後、立圃の子息野々口生白（鏡山）編により、『立圃追悼集』が作成される。

以上の立圃の略年譜をふまえつつ、まず第一章では、立圃作『十帖源氏』の挿絵をモチーフとした専修大学図書館所蔵『源氏物語画帖』<sup>(2)</sup>（以下、『専大源氏画帖』とする）の詞書を中心として、鳳林承章の文化サロンに着目したい。『専大源氏画帖』は、江戸初期成立、『源氏物語』五十四帖の代表的な場面六〇図に詞書を配した折本形式の画帖である。詞書は飛鳥井雅章・愛宕通福・道晃法親王・日野弘資・清閑寺瀬房・柳原資廉・中院通茂・中御門資瀬・持明院基時・甘露寺方長の公家十名による寄合書となっている。絵は狩野派の流れをくむ岩佐派か、詳細は不明であるが、『十帖源氏』の挿絵がモチーフとなっている。詞書には下絵が施され、絵には金泥がふんだんに用いられた豪華な仕立てである。

立圃が出入りしていた文化サロンの一つに、鳳林承章<sup>(3)</sup>のサロンがある。鳳林承章【文禄二年（一五九三）～寛文八年（一六六八）】は、勸修寺晴豊の六番目の子であり、鹿苑寺、相国寺第九十五世の住持である。勸修寺家は藤原高藤家であり、代々武家伝奏を務めた。承章の叔母、勸修寺晴子は後水尾院の祖母、新上東門院であり、承章にとって後水尾院は三歳下の従甥にあたる。承章は後水尾院の厚遇を得、宫廷文化人として公家・武家・町人を問わず交流し、広い視野で寛永文化の繁栄を支えた人物の一人である。承章の文化活動は寛永一二年（一六三五）から寛文八年（一六六八）までの三四年間にわたる自身の日記『隔莫記』からその様相を知ることができる。

『隔莫記』は金閣寺関係の基本資料であり、江戸の文化を知る上でも大変貴重な資料である。横谷一子氏<sup>(4)</sup>が指摘するように、和歌・物語文学（伊勢物語・源氏物語・平家物語等）・能・狂言などの近世以前の古典文芸、俳諧や歌舞伎などの江戸期以降の文芸記録もみえ、承章自身も文人として、書画・造園設計・薬剤・茶・華・讃・鑑

定・針灸などに精通していたようである。

『<sup>(5)</sup>隔蓑記』よれば、「十一日、於北山、能圓<sup>梅林</sup>被來、源氏之講尺被始之。」とあり、寛永十四年（一六三七）九月

十一日、承章は能圓から『源氏物語』の講釈を受けている。梅林能圓は「京都北野 徳勝院 紹巴<sup>(7)</sup>の門」や「北

野宮司法橋「法眼」紹巴<sup>(8)</sup>直弟」という記録によれば、京都の北野天満宮・祠宮三家の一つである徳勝院の人であ

り、『源氏物語』の注釈書『紹巴抄（源氏物語抄）』を記した連歌師里村紹巴の門人であるという。紹巴は三条西

家に入りしていた人物であり、その門人である能圓から、承章は寛永十四年（一六三七）より明暦二（一六五

六）年までの二十六回に渡って『源氏物語』の講釈を受けている。講釈の内容は、桐壺・若紫・末摘花・紅葉賀・

花宴・葵・賢木・花散里・須磨・初音巻といった『源氏物語』の第一部に集中している。

また、『専大源氏画帖』詞書伝称筆者である道晃法親王・飛鳥井雅章については、『隔蓑記』に以下のような記述がみえる。

廿一日、…古今集之御伝授今日相濟故、妙法院御門主宮・聖護院御門主宮・飛鳥井前大納言雅章卿・

岩倉前中納言具起卿、此四人御伝授之御祝振舞也。為御相伴、勸修寺前大納言經広卿与予被召者也。…今日

之御客衆、聖門主・妙門主・飛鳥井大・岩倉中・勸修寺大・某、此六人、紅葉傘一柄充奉拝領者也。輕傘無

類也。

明暦三年（一六五七）二月二十一日、御水尾院から古今伝授を受けた道晃法親王・飛鳥井雅章・堯然法親王・岩倉具起他に対して祝宴が催され、承章も陪席している。石川真弘氏<sup>(10)</sup>によれば、具起は立圃と交流があり、立圃筆



『花見之記』（綿屋文庫蔵）に「執々の金玉、今に始ずながら愚耳を驚し候。狂詞を為すといへども本歌の風を背かず、其艷艶美にしてしかも誹興拔群の作者、比類無く候歟。詞書是又感味あさからず候」との賞賛の辞が見える。承章と立圃はともに具起主催の俳諧の会にも参加しており、具起は立圃の良き理解者であったようである。

これらのことをふまえつつ、第一章では『専大源氏画帖』を手がかりとして、堂上から地下人にまで及ぶ承章サロンの文人たちの動向の一端を紐解いてみたい。『専大源氏画帖』の制作年代、依頼主、制作目的についての私案を提示してみたい。

次に第二章では、俳画師としての立圃という観点から、『専大源氏画帖』の絵の特色を探る。『専大源氏画帖』の絵が『十帖源氏』の挿絵をモチーフとしていることに關しては、すでに井黒佳穂<sup>(11)</sup>氏が指摘している。源氏絵の享受史を追いながら、『十帖源氏』の挿絵がどのように変容し、『専大源氏画帖』に取り込まれているかを詳細に論じている。

立圃は江戸初期の京都において、俳諧のみならず、俳画師としても有名であった。『画工便覧』<sup>(12)</sup>によれば、「名親重、住<sup>三</sup>京都、貞徳門弟、翫<sup>二</sup>俳諧<sup>一</sup>于<sup>レ</sup>世<sup>三</sup>發<sup>二</sup>於名<sup>一</sup>、常戯人物鳥獸花草図而共賛<sup>二</sup>発句<sup>一</sup>」とあり、名は親重、京都に住み、松永貞徳の門弟として俳諧師として世に名を馳せ、人物・鳥獸・草花の絵に自賛を添えたものを作り、俳画にも長けていたことがわかる。『画本手鑑』<sup>(13)</sup>卷六・補遺によれば、「発句の趣画 立圃世にしれる通書画ともにまめやかにして清玩なり。画てハ其上に一句一首をそへ、和才のよけいに草画をなす事むべなる哉。誰が筆跡を慕ともみえねども、清潤にしてよく其趣にのる」と、世に知られた立圃の画は本格的で静かに鑑賞するべ

きものであり、いわゆる略筆で描いた墨絵や淡彩画である草画に自賛を添えたものであったことがわかる。

これらの立圃における俳画師としての評価は、『休息歌仙<sup>(14)</sup>』や『十二枝句合<sup>(15)</sup>』などの作品から見てとれる。『休息歌仙』(縦三九・五糎、横八五三・三糎、柿衛文庫蔵)は、紙本淡彩、卷子本、三十六歌仙を花と月の左右十八組に配し、歌仙の名を詠み込んだ句を賛とする。その名の通り、三十六歌仙たちがくつろいだ姿で描かれ、非常に人間味あふれる俳諧的な趣向を持つ作品である。『十二枝句合』(縦二五・二糎、横三四二・五糎、赤木文庫旧蔵、早稲田大学蔵)は一卷、立圃の自筆句合で、奥書によれば寛文六年(一六六六)に成立したとある。十二支の動物に装束を着せ、一対ずつ左右に配置し、それに立圃の発句を合わせたものである。動物の組み合わせは、辰と戌、巳と亥、午と子のように、七番目同士を合わせる「七つ目」というめでたい組み合わせになっている。淡彩で描かれた動物たちの飄々とした姿は、そのまま世俗にこだわらず、超然としたつかみどころのない立圃の生き様を垣間見せ、俳画を極めた遊び心あふれる立圃の手腕を伝えている。これらの作品の風趣は、『専大源氏画帖』の絵のモチーフとされる『十帖源氏』の絵にも共通し、『源氏物語』の登場人物たちの心情そのままに表情豊かに表現されている。

そこで第二章では、俳画師立圃についての考察を進め、『十帖源氏』の挿絵にはない『専大源氏画帖』に描かれた蛸・若菜下巻の絵の特徴を探り、江戸初期における『源氏物語』享受の実態に迫ってみたい。

第三章は、野々口立圃作『十帖源氏』の本文構造について考察する。

『十帖源氏』は江戸初期(承応三年(一六五四)頃成立・寛文元年(一六六一)刊行)に俳諧師・野々口立圃<sup>(16)</sup>

によって作成された『源氏物語』の梗概書、いわゆるダイジェスト版である。挿絵一三一図を含み、その名の通り、十巻の構成である。『十帖源氏』についてはまず吉田幸一<sup>(17)</sup>氏の重厚な研究がある。それによると、『源氏物語』のダイジェスト化は古くは鎌倉時代から行われ、江戸時代になってからも町人の手によって新たに多くのダイジェスト版が作られた。『源氏物語』の原文の雰囲気を少しでも一般庶民、女性や子供達にもわかりやすく簡単に伝えたい、との意向で制作されたものであるという。

清水婦久子<sup>(18)</sup>氏は『十帖源氏』の本文は、寛永正保（一六四〇）頃に刊行された無跋無刊記本『源氏物語』に拠るものだという。今西祐一郎<sup>(19)</sup>氏も指摘しているように、無跋無刊記本『源氏物語』は一部識者の間で「素（す）源氏」と称されていた、柱刻や丁付けもなく、注釈や挿絵、刊記や付録もない、物語本文だけを刻した製版本のことを指す。清水<sup>(20)</sup>氏は、『絵入源氏』や『湖月抄』などの河内本系統の本文を含む流布本とは異なり、三条西家本系統の本文を受け継ぎ、版本『万水一露』に近似している無跋無刊記本『源氏物語』を傍らに置いて、立圃はダイジェスト版を作成していたと推定している。湯浅佳子<sup>(21)</sup>氏は、『十帖源氏』は『源氏物語』本文を比較的丁寧に抽出し、平易な言葉に替えていると指摘する。中西健治<sup>(22)</sup>氏は、立圃がこれだと思う本文を単に摘録したのではなく、松永貞徳門下の重鎮として、原作の叙情的な場面を絵と共に簡潔平易に提供しようとしたのだと論じている。いずれにしても『十帖源氏』の本文の要約方法は判然とせず、どのような制作意図があったのか、究明すべき課題は多い。

そこで第三章では、無跋無刊記本『源氏物語』と、それに依拠したと思われる『十帖源氏』の本文とを比較検

討することによって、『源氏物語』を独自に抽出・改変した『十帖源氏』の本文構造に迫ってみたい。

以上のように、第三篇では、第一篇・第二篇を受けて、江戸初期における野々口立圃と『源氏物語』との関わりを中心として考察してみたい。江戸初期の文芸において、地下のものとされていた俳諧が、公家の間でも広まるようになる。重要なネットワークの一つとなったのが鳳林承章の文化サロンである。承章サロンには公家・武家・町人を問わず、才能のある優れた文化人たちが多数、頻繁に出入りしていた。その参加者の一人が野々口立圃である。立圃は承章に俳諧を指南しつつ、自らも俳諧・絵に関わる一流の文芸を吸収していったと考えられる。

そこで、第三篇では、立圃の周りに彩られた文芸から、江戸期における『源氏物語』享受の一端を紐解いてみたい。

## 注

- (1) 野々口立圃の年譜については、木村三四吾氏「野々口立圃」『俳句講座2』俳人評伝上、明治書院、一九五八年、一一三～一二五頁)、高木蒼梧氏「立圃」『俳諧人名辞典』(巖南堂書店、一九六〇年、十一頁)、米谷巖氏「野々口立圃年譜」(吉田幸一氏編『十帖源氏 下』古典文庫第五一二冊、古典文庫、一九八九年、四五三～四九四頁)、雲英末雄氏「立圃」『日本古典文学大辞典』第六卷、岩波書店、一九八五年、二二二～二二三頁)、母利司朗氏「立圃」『俳文学大辞典』、角川書店、一九九五年、九六五～九六六頁)、石川真

弘氏「立圃の書画幅について」(『俳画の流れ立圃から芭蕉へ』福山城博物館、一九九五年、七〇～七二頁)等を参照した。

(2) 専修大学図書館所蔵『源氏物語画帖』(A/九一三・三/MU五六)。

(3) 『国書人名辞典』第四卷(岩波書店、一九九八年、三〇四～三〇五頁)、『寛永文化のネットワーク』『隔蓑記』の世界』(思文閣出版、一九九八年)を参照した。

(4) 横谷一子氏『隔蓑記』にみる一町人の文芸と古典受容』(『佛教大学大学院紀要』第二七号、一九九九年三月)。

(5) 『隔蓑記』の本文引用は、『隔蓑記』(一九五八～一九六七年)の復刻版、赤松俊秀氏校注編『隔蓑記』(思文閣出版、一九九七年)に拠る。以下、同じ。

(6) 承章と能圓との関わりに関しては、辻英子氏『在外日本重要絵巻集成』(笠間書院、二〇一一年、四三頁)に指摘がある。

(7) 『名家伝記資料集成』第三卷(思文閣出版、一九八四年、二九〇頁)。

(8) 『頭伝明名録』上巻・第三・一一五(日本古典全集刊行会、一九三八年、一四八頁)。

(9) 注(4) 横谷氏論考中の『源氏物語』講義記録を記した表、注(5)を参照した(一二三九頁)。

(10) 注(1)の石川氏論に同じ(七一頁)。立圃筆「花見之記」は、天理図書館綿屋文庫俳書集成第十三巻『野々口立圃集』(八木書店、一九九六年)掲載の『立圃自筆巻』下「東山花見之記」(請求記号…わ/四三/八/

五、四六～五六頁）に拠る。具起の識語については識語写真（五五～五六頁）と書誌解説（三～五頁）を参照した。岩倉具起の俳諧の会に関しては、『隔蓑記』承応二年（一六五三）十二月十三日条に見える。詳しくは第三篇第一章で述べる。

（11）井黒佳穂子氏「テキストとイメージから追う物語性の構築―絵巻から浮世絵まで―」（専修大学大学院博士學位論文、二〇一三年三月）。

（12）『日本絵画論大系』二「画工便覧」（名著普及会、一九八〇年、五一六頁）。

（13）安田篤生氏「江戸時代における光琳像の変遷について（下―三）―酒井抱一（二）―」（『愛知教育大学研究報告』第六一号、二〇一二年三月、九五頁）を参照した。安田氏によれば、大岡春卜編『画本手鑑』は大府立中之島図書館蔵享保五年刊本に拠るといふ。

（14）柿衛文庫蔵『休息歌仙』は柿衛文庫HPの所蔵品紹介「立圃休息歌仙図」解説に拠る。

[http://www.kakimori.jp/2007/06/post\\_7.php](http://www.kakimori.jp/2007/06/post_7.php)

（15）早稲田大学図書館所蔵『十二枝句合』（請求記号…ヘ五／六〇九八）は早稲田大学図書館HP「古典籍総合データベース」(<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>)の解説に拠る。

（16）渡辺守邦氏「十帖源氏」（『日本古典文学大辞典』第三巻、岩波書店、一九八四年、二七七頁）、「所収本書誌」（吉田幸一氏編『十帖源氏 上』古典文庫第五〇七冊、古典文庫、一九八九年、三九七～四一四頁）を参照した。

(17) 吉田幸一氏「Ⅱ『十帖源氏』考」(『絵入本源氏物語考 上』日本書誌学大系五三(一)、青裳堂書店、一九八七年、一九四～二四四頁)。

(18) 清水婦久子氏『源氏物語版本の研究』(和泉書院、二〇〇三年)。

(19) 今西祐一郎氏「江戸初期刊 無跋無刊記 整版本 源氏物語」解説(九州大学附属書館「九大コレクション」貴重資料画像) (<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/search/browse/rare>) に拠る。

(20) 清水婦久子氏「版本『万水一露』の本文と無刊記本『源氏物語』」(『青須我波良』第五三号、二〇〇三年三月)。

(21) 湯浅佳子氏「立圃『おさな源氏』『十帖源氏』」(鈴木健一編『源氏物語の変奏曲―江戸の調べ―』三弥井書店、二〇〇三年)。

(22) 中西健治氏「十帖源氏攷」(『立命館文学』第五八三号、二〇〇四年二月)。

\*以下に、立圃と『源氏物語』、『専大源氏画帖』に関わる事項を中心として、「野々口立圃略年譜」を作成した。年譜作成には、木村三四吾氏「野々口立圃」(『俳句講座2』俳人評伝上、明治書院、一九五八年、一一三～一二五頁)。米谷巖氏「野々口立圃年譜」(吉田幸一氏編『十帖源氏 下』古典文庫第五一二冊、古典文庫、一九八九年、四五三～四九四頁)、「立圃略年譜」(『俳画の流れ立圃から芭蕉へ』福山城博物館、一九九五年、八〇～八一頁)を参照した。

| 野々口立園略年譜       |     |  |  |
|----------------|-----|--|--|
| 年代             | 年齢  | 事項   | 出典                                     |
| 文禄4<br>(1595)  | 1歳  | 先祖は異代の武士で、祖父義朝は藤原氏の陪司を勤めた後、丹後国桑田郡本目村に退隱。父の代に京都に移り、種人形屋を創業者。京都一条で頼重(立園)誕生。  | 立園追悼集<br>俳林良村<br>難波の別                  |
| 寛永8<br>(1631)  | 37歳 | 二月、松江重頼と『太子集』の撰集に着手する。   | 重頼自序                                   |
|                |     | 八月六日、『徒贈魚島五十句、草木五十句』に明心居士(貞徳)の加判を受ける。  | 山本唯一氏翻刻『遠歌<br>俳諧研究』41号所収               |
| 寛永10<br>(1633) | 39歳 | 正月、松江重頼のみで『太子集』を刊行。重頼、貞徳と確執となる。  | 貞徳永代記                                  |
|                |     | 十一月一日、『徒贈発句集』を刊行。  |  |
| 寛永13<br>(1636) | 42歳 | 二月二三日、徒贈作法書の撰写『はなひ草』成る。  |  |
| 寛永14<br>(1637) | 43歳 | 正月晦日、父の『追善九百韵』独吟興行、刊行。「立園」と署名あり。この頃、入道したか。   |  |
| 寛永17<br>(1640) | 46歳 | この年、初めて江戸へ赴く。  | 清澤太平記                                  |
| 慶安元<br>(1648)  | 54歳 | 十一月朔日頃、京都を出立、九州へ向かう。   | 筑紫紀行                                   |
| 慶安2<br>(1649)  | 55歳 | 秋月城主長興と太宰府天満宮奉納の両吟『徒贈千句』興行。五月自跋、『そらつぶて』。   | 同神社蔵                                   |
| 慶安3<br>(1650)  | 56歳 | 『休息歌仙』は慶安三年以前に成立、この年以前に刊行か。  |  |
| 慶安4<br>(1651)  | 57歳 | 二月、備後国福山藩の重臣、福山総奉行萩野新右衛門重富著『朝記』に、跋文を送る。  |  |
|                |     | 四月上旬、初めて福山に下向。＊以後、寛文元年頃まで11年間に渡って福山藩に仕えた。  | 増添紀行                                   |
|                |     | 四月頃、二代福山藩主勝俊の亡父勝成追悼発句に協賛し独吟五〇韻。  | 明泉寺蔵                                   |
|                |     | 九月頃、仮題『草戸記』執筆。   |  |
|                |     | 十一月、仮題『徒贈作法』執筆。  |  |
| 承応元<br>(1652)  | 58歳 | 四月二四日、金園寺住持風林承重を初めて訪問。   | 隔實記                                    |
|                |     | 八月十二日、福山藩主水野勝俊参府のため福山を出発、立園も福山から同乗扈從する。  | 海路東上紀行                                 |
| 承応2<br>(1653)  | 59歳 | 十一月十日、勝俊公に扈從して帰京。  | 隔實記                                    |
| 承応3<br>(1654)  | 60歳 | 元日、承重を訪ね、歳旦吟を披露しあう。  | 隔實記                                    |
|                |     | 『十帖源氏』成立か。   |  |
| 明暦元<br>(1655)  | 62歳 | 五月、三代水野日向守勝重、参府のため福山を出発、立園も扈從して江戸へ赴く。  | 明暦二年「西中紀行」                             |
| 明暦3<br>(1657)  | 64歳 | 二月二四日、水野家京都屋敷(一条下ル松ノ下安後町)留守居役中嶋治右衛門を初めて同道して承重を訪ね、藩主日向守(水野勝貞)所望の歌仙絵巻に聖徳院宮の榮華園慶を依拠。                                | 隔實記                                    |
| 万治3<br>(1660)  | 66歳 | 『難波の別』執筆、『源氏物語』兩夜の品定めにならって、人間の出自を上中下に分けて、その幸不幸を説いた二巻がある。   | 木村三四吾氏「立園」                             |
|                |     | 七月五日、備後国水野内記(勝信)息女の縁歌の点取のこと鞍馬の依頼状を、水野日向守京屋敷留守居役中嶋治右衛門の書状と共に承重へ送る。  | 隔實記                                    |
|                |     | 九月八日、承重、仙洞に参上。後水尾院に立園作「十八番の発句合」二巻を奉獻、献賈に入れる。   | 隔實記                                    |
|                |     | 十二月跋、宗賢・信房編『源氏實錄』に発句一句(暮火巻)を入集。  |  |
| 寛文元<br>(1661)  | 67歳 | 一月九日、天満の川崎二筋左衛門方幸宛返信。『十帖源氏』が出来たので持参したいこと、「源氏の絵」は知り合いを一二箇所問ひ合わせるも、皆「大き二候て」ご注文のようなものは無く、特別に「あつえ」るなら可能であること等、を報告する。 | 尾形仇氏翻刻「立園書<br>第十八通」ほか『遠歌俳<br>諧研究』41号所収 |
|                |     | 二月、『おきな源氏』成立、刊行は改元後か。  |  |
|                |     | 四月、『十帖源氏』刊行。   |  |
|                |     | 八月十八日、『備後国朝之清原堂之縁記』執筆  | 攝津寺蔵                                   |
|                |     | 十二月十六日、水野内記より書表三十帖を贈る由、立園から承重へ伝え、届ける。  | 隔實記                                    |
| 寛文2<br>(1662)  | 68歳 | 五月十一日、承重へかねて鞍馬依頼の「水野内記所之百首和歌二点并改正之事」のうち、「去方」掛点の一巻、承重より「水野内記方立園迄」届く。  | 隔實記                                    |
| 寛文6<br>(1667)  | 72歳 | 『十二枝句合』執筆。   | 赤木文庫蔵                                  |
| 寛文7<br>(1668)  | 73歳 | 春、仮題『紫式部最勝撰物語』に、「ありやなしやこそまことの花の種 立園書」「絵は六十歳の比より新撰古にて今七十三歳の清書なれば、心あけて御覧じ候へかし」とある。                                 | 『鑑定筆記』<br>木村三四吾氏「立園」                   |
| 寛文9<br>(1670)  | 75歳 | 九月三十日、未の刻永眠。辞世「月花の三句目を今見る世かな」。法名、松翁庵立園日英。立園の子息野々口生白(錦山)編『立園追悼集』。   |  |



# 第一章

## 『源氏物語画帖』の詞書における

鳳林承章サロンの人々

# 一 はじめに

本章は、専修大学図書館所蔵『源氏物語画帖』（以下、『専大源氏画帖』とする）を視座として、鳳林承章の文化サロンに着目しつつ、江戸初期の文人たちの様相の一端を明らかにするものである。

『専大源氏画帖』は、家紋入の風呂敷に包まれた黒漆塗箱入（箱の表に「源氏繪」

と金字）である。家紋は、『日本家紋総鑑』によれば「隅入り蔓角に違い鷹の羽」と

あり、「飯沼氏（信濃国伊那郡飯沼より起る清和源氏族か）」とあるが詳細は不明

である。縦二十七・一糎、横二十・八糎（画帖寸法）、縦二七・二糎、横二〇・八糎

（色紙寸法）、厚みは五糎、三帖（一帖二十図、計六十図）、片面折帖仕立てである。第一冊「桐壺①」～「絵合」・

第二冊「松風」～「若菜下①」・第三冊「若菜下②」～「夢浮橋」という構成であり、各巻一枚ずつの五四枚に加

えて、桐壺巻①②・帚木巻①②・紅葉賀巻①②・玉鬘巻①②・藤裏葉巻①②・若菜下巻①②においては各二枚ず

つあり、計六〇枚となっている。見開きの右に詞書、左に絵を配し、詞書の右肩に「詞書筆者名」「巻名」「詞書



桐壺①題簽

の書き出し」を記した文様題簽（六十枚すべて統一文様、詞書筆者と同筆ではない）がある。

詞書の料紙には下絵が施され、絵には金泥がふ



風呂敷の家紋

んだんに用いられた豪華な仕立てである。『専大源氏画帖』についてはすでに井黒佳穂<sup>(3)</sup>子氏が説話文学・絵画の面から調査・研究を行い、源氏絵の享受史を追いながら、『専大源氏画帖』の挿絵は野々口立圃作『十帖源氏』の挿絵がモチーフとなっていることを指摘している。

本章では、『専大源氏画帖』の詞書の本文、詞書の伝称筆者を手がかりとして、堂上から地下人にまで及ぶ鳳林承章サロンの文人たちの動向の一端を探ってみたい。

## 二 『専大源氏画帖』の詞書

『専大源氏画帖』の詞書は、飛鳥井雅章・愛宕通福・道見法親王・日野弘資・清閑寺瀬房・柳原資廉・中院通茂・中御門資瀬・持明院基時・甘露寺方長の公家十名による寄合書である。詞書本文は青表紙本系統である。大島本・日大三条西家本の本文と比較してみると、六〇枚の詞書のうち、内訳は以下の通りである。

大島本・日大三条西家本の本文と一致する……三七枚【左記以外すべて】

大島本と一致する……二枚【柏木】【橋姫】

日大三条西家本と一致する……二枚【帚木①】【蜻蛉】

一致しない……十九枚【桐壺①】【空蟬】【夕顔】【紅葉賀②】【花宴】【賢木】【明石】【蓬生】【関屋】【絵合】

【朝顔】【玉鬘②】【初音】【野分】【真木柱】【若菜上】【鈴虫】【幻】【匂宮】

六〇枚中、大島本が三条西家本のどちらか一方と一致する四枚を含み、計四一枚が一致していることがわかる。諸本と一致しない箇所は十九枚であり、以下に、異文の箇所一九例を掲げ、『専大源氏画帖』の詞書の特徴を探ってみたい。

【桐壺①】「あまたたひあやしむ国」とあり、大島本・日大三条西家本は「あまたゝひかたふきあやしむ国」である。

【空蟬】「ともしたる」とあり、大島本・日大三条西家本は「ともしたり」である。

【夕顔】「なさけなけなめるなをとて」とあり、大島本・日大三条西家本は「なさけなけなめる花をとて」である。

【紅葉賀②】「いたうはつれみのへたれとそゝけまかは」とあり、大島本・日大三条西家本は「いたうみのへたれとまかは」である。

【花宴】「こなたさまに」とあり、大島本・日大三条西家本は「こなたさまには」である。

【賢木】「香をかくはしみ」とあり、大島本・日大三条西家本は「香をなつかしみ」である。

【明石】「雲ゐに」とあり、大島本・日大三条西家本は「雲ゐを」である。

【蓬生】「こゝろも」とあり、大島本・日大三条西家本は「こゝろを」である。

【関屋】「せきやまより」とあり、大島本・日大三条西家本は「せき屋より」である。

【絵合】「中宮もおはしますふかく」とあり、大島本・日大三条西家本は「中宮もおはしませはふかう」である。

【朝顔】「かきねは」とあり、大島本・日大三条西家本は「かきねそ」である。

【玉鬘②】「いのりたまへ」とあり、大島本・日大三条西家本は「いのり申給へ」である。

【初音】「例のなく」とあり、大島本・日大三条西家本は「例のゝこるなく」とある。

【野分】「みたれたるこゝちす」とあり、大島本・日大三条西家本は「みたれたるをみる心ちす」である。

【真木柱】「よりてうと」とあり、大島本・日大三条西家本は「よりてさと」である。

【若菜上】「みかりたまへる」とあり、大島本・日大三条西家本「みかへりたまへる」である。

【鈴虫】「ふりせぬきむの御こと」とあり、大島本は「ふりせぬなと聞え給てきんの御こと」・日大三条西家本は「ふりせぬ聞え給てきんの御こと」である。

【幻】「よりてたまひていかにとや」とあり、大島本は「よりてとり給ていかにとかや」・日大三条西家本「とり給ていかにとかや」である。

【匂宮】「はるははなそのを」とあり、大島本は「春は梅花そのを」・日大三条西家本は「春はむめの花そのを」である。

【夕顔】の「な」「花」、【真木柱】「うと」「さと」、【若菜上】「みかり」「みかへり」、【匂宮】「梅」の有無等は誤植や抜け落ちであると思われる。【空蟬】は詞書の末尾を整えるために「り」を「る」としたか。一字くらいの差でどちらでも意味は通じるもので、異文らしきものは、【花宴】「は」の有無、【明石】「に」「を」、【蓬生】「も」「を」、【朝顔】「は」「そ」、【玉鬘②】「申」の有無、【幻】「とや」「とかや」である。

それ以外に諸本とは違う異文や省略されたかと思われるものは、【桐壺①】【紅葉賀②】【賢木】【関屋】【総合】  
【初音】【野分】【鈴虫】【幻】に散見される。【桐壺①】「あまたたひあやしむ国」は大島本・日大三条西家本では  
「あまたゝひかたふきあやしむ国」とあり、「かたふき」の語が『専大源氏画帖』にはない。管見した限りでは「か  
たふき」がない本文はなく、京都女子大本が「あやしむ国」の本行本文に「あまたたひかたふき」を傍記して補  
っているのが一番近い例である。【紅葉賀②】「はつれ」「そゝけ」を含む諸本は管見の限りではない。【賢木】「か  
くはしみ」という諸本は見当たらず、諸本や『紫明抄』『河海抄』等の古注釈書においては全て「なつかしみ」で  
ある。光源氏の和歌「乙女子かあたりと思へはさかきは香をかくはしみとめてこそおれ」の部分であるが、こ  
の和歌には『源氏物語聞書』や『岷江入楚』などにおいて、引歌として「榊葉の香をかくはしみとめ来れば八十  
氏人そまとゐせりける」（『拾遺和歌集』神楽歌）の影響が指摘されている。おそらくは「榊葉の」和歌の「かく  
はしみ」との混同によるものかと考えられる。【関屋】「せきやまより」とするのは、この他、御物本、尾州家本、  
陽明本、麦生本、阿里莫本等であり、河内本・別本系統の本文傾向がみられる。【総合】「中宮もおはしますふか  
く」の「ふかく」と「ふかう」のウ音便表記の差異は諸本にも見られるが、「おはします」という表現は諸本に見  
られない。【初音】は「のこる」がない。「のこりなく」「のこるなく」等の表現は諸本に見えるものの、「のこる」  
のないものはない。【野分】は「をみる」がない。「みたれたるにほひを」と「にほひ」が追加される本文はある  
が、省略されているものはない。【鈴虫】は「(など)聞え給て」がなく、【幻】は「とり」がない。

また、大島本と一致し、日大三条西家本と一致しない二枚は【柏木】【橋姫】である。

【柏木】「かけ給人」とあり、大島本はこれと同じで、日大三条西家本は「かけ給はむ人」である。

【橋姫】「まねきつへかりけり」とあり、大島本はこれと同じで、日大三条西家本は「まね<sup>きつ</sup>へかりけり」である。

【柏木】は「給はむ」の「はむ」がないが、【橋姫】は見せ消ちして、「まねきつへかりけり」と補っているので、ほぼ同じ表記と言ってよいだろう。

対して、日大三条西家本と一致し、大島本と一致しない二枚は【帯木①】【蜻蛉】である。【賢木】巻には異文箇所が二つあり、一つは前述した「かくはしみ」と「なつかしみ」の異同であるが、もう一つは日大三条西家本には一致する箇所である。

【帯木①】「これは二のまち」とあり、日大三条西家本はこれと同じで、大島本は「二のまち」である。

【蜻蛉】「かきりなく」とあり、日大三条西家本はこれと同じで、大島本は「かきりもなく」である。

【賢木】「いかきをも」とあり、日大三条西家本はこれと同じで、大島本は「いかきも」である。

これを見る限りでは、大島本、日大三条西家本のどちらに近いと言うことは難しい。両者の異同が大島本は二箇所「かけ給人」「まねきつへかりけり」、日大三条西家本は三箇所「これは二のまち」「かきりなく」「いかきをも」が共通しており、異同は【帯木①】を除外するとして、両方とも一字程度の差異である。『専大源氏画帖』の詞書に引用された本文箇所からはどの本文により近いかということを一本に絞ることは難しいと考える。

このように、六十枚中、三分の一の異文箇所十九枚と、大島本か又は日大三条西家本のどちらかとは一致する

箇所四枚を合わせた計二三枚の箇所には、河内本・別本系統の本文、独自の異文、数カ所の細かい異同や誤字、詞書の語尾が画帖用に改訂されている箇所等がみえる。しかし、その他の三七枚はすべて大島本・日大三条西家本の本文と一致していることから、青表紙本系統の本文であることがわかる。さらに、青表紙本の中でも様相を異にするとされる大島本と日大三条西家本のどちらに近いかということになるが、これは、右に記したように、『専大源氏画帖』の詞書の本文の限りにおいては、さらにどちらの本文に近いかを特定することは難しいといえる。いずれにしても『専大源氏画帖』の本文は大島本や日大三条西家本に近い青表紙本の本文であるといえる。

『専大源氏画帖』の絵は野々口立圃作『十帖源氏』の挿絵がモチーフとなっていることから、『専大源氏画帖』の詞書・絵と『十帖源氏』本文・挿絵との比較を試みた。その結果が次表である。表によれば、詞書において、六十場面中二十八例のほぼ半数が和歌を採択しており、歌絵的な場面を描くことが多い江戸初期源氏絵の特徴がみえる。

『専大源氏画帖』の詞書の中で『十帖源氏』の本文にないのは、【桐壺①】【須磨】【関屋】【絵合】【若菜下②】【柏木】【夕霧】の七例である。しかし、【桐壺①】【関屋】は大阪女子大学蔵『源氏物語絵詞』(以下、「大阪女子大本」とする)と一致し、【絵合】は和泉市久保惣記念美術館蔵『源氏物語画帖』(以下、「久保惣本」とする)の詞書と一致し、【夕霧】は京都国立博物館蔵『源氏物語画帖』(以下、「京博本」とする)の詞書と一致する。残りの【須磨】【若菜下②】【柏木】の三例は、『十帖源氏』の本文やその他の源氏絵の詞書からは共通する本文箇所が見出せない。しかし、【須磨】の詞書は平安時代の絵師として活躍した飛鳥部常則の箇所「つねのりなとをめし



| 番号 | 専大画帖<br>巻名 | 詞書筆者  | 本文    | 十帖源氏<br>繪 | 備考           |
|----|------------|-------|-------|-----------|--------------|
| 30 | 常夏         | 甘露寺方長 | ○     | ○         |              |
| 29 | 蜜          | 甘露寺方長 | ○(和歌) | ×         |              |
| 28 | 胡蝶         | 清閑寺淵房 | ○(和歌) | ○         |              |
| 27 | 初音         | 清閑寺淵房 | ○     | ○         |              |
| 26 | 玉簪②        | 日野弘資  | ○     | ○         |              |
| 25 | 玉簪①        | 清閑寺淵房 | ○(和歌) | ○         |              |
| 24 | 少女         | 清閑寺淵房 | ○     | ○         |              |
| 23 | 朝顔         | 清閑寺淵房 | ○(和歌) | ○         |              |
| 22 | 薄雲         | 清閑寺淵房 | ○(和歌) | ○         |              |
| 21 | 松風         | 中院通茂  | ○     | ○         |              |
| 20 | 絵合         | 中院通茂  | ×     | ○         | ↓久保惣光吉本詞書と一致 |
| 19 | 閑屋         | 中院通茂  | ×     | ○         | ↓大坂女子大本詞書と一致 |
| 18 | 蓬生         | 中院通茂  | ○(和歌) | ○         |              |
| 17 | 澤標         | 中院通茂  | ○(和歌) | ○         |              |
| 16 | 明石         | 中院通茂  | ○(和歌) | ○         |              |
| 15 | 須磨         | 飛鳥井雅章 | ×     | ○         |              |
| 14 | 花散里        | 飛鳥井雅章 | ○(和歌) | ○         |              |
| 13 | 賢木         | 飛鳥井雅章 | ○(和歌) | ○         |              |
| 12 | 葵          | 飛鳥井雅章 | ○     | ○         |              |
| 11 | 花宴         | 飛鳥井雅章 | ○     | ○         |              |
| 10 | 紅葉賀②       | 道見法親王 | ○     | ○         |              |
| 9  | 紅葉賀①       | 飛鳥井雅章 | ○(和歌) | ○         |              |
| 8  | 末摘花        | 中御門資濃 | ○     | ○         |              |
| 7  | 若紫         | 中御門資濃 | ○     | ○         |              |
| 6  | 夕顔         | 中御門資濃 | ○     | ○         |              |
| 5  | 空蟬         | 中御門資濃 | ○     | ○         |              |
| 4  | 帯木②        | 日野弘資  | ○(和歌) | ○         |              |
| 3  | 帯木①        | 中御門資濃 | ○     | ○         |              |
| 2  | 桐壺②        | 中院通茂  | ○(和歌) | ○         |              |
| 1  | 桐壺①        | 中御門資濃 | ×     | ○         | ↓大坂女子大本詞書と一致 |

| 番号 | 専大画帖<br>巻名 | 詞書筆者  | 本文    | 十帖源氏<br>挿絵 | 備考            |
|----|------------|-------|-------|------------|---------------|
| 60 | 夢浮橋        | 日野弘資  | ○(和歌) | ○          |               |
| 59 | 手習         | 日野弘資  | ○(和歌) | ○          |               |
| 58 | 蝶蛤         | 日野弘資  | ○     | ○          |               |
| 57 | 浮舟         | 日野弘資  | ○(和歌) | ○          |               |
| 56 | 東屋         | 日野弘資  | ○     | ○          |               |
| 55 | 宿木         | 日野弘資  | ○(和歌) | ○          | ↓十帖源氏総角の挿絵と一致 |
| 54 | 早蕨         | 愛宕通福  | ○(和歌) | ○          |               |
| 53 | 総角         | 愛宕通福  | ○(和歌) | ○          | ↓十帖源氏総角の挿絵と一致 |
| 52 | 椎木         | 愛宕通福  | ○     | ○          |               |
| 51 | 橘姫         | 愛宕通福  | ○     | ○          |               |
| 50 | 竹河         | 愛宕通福  | ○(和歌) | ○          |               |
| 49 | 紅梅         | 愛宕通福  | ○(和歌) | ○          | ↓十帖源氏梅枝の挿絵と一致 |
| 48 | 勾宮         | 柳原資康  | ○     | ○          |               |
| 47 | 勾          | 柳原資康  | ○     | ○          |               |
| 46 | 御法         | 柳原資康  | ○(和歌) | ○          |               |
| 45 | 夕霧         | 柳原資康  | ×     | ○          | ↓京博本詞書と一致     |
| 44 | 鈴虫         | 柳原資康  | ○(和歌) | ○          |               |
| 43 | 横笛         | 柳原資康  | ○(和歌) | ○          |               |
| 42 | 柏木         | 持明院持時 | ×     | ○          | ↓十帖源氏宿木の挿絵と一致 |
| 41 | 若葉下②       | 道見法親王 | ×     | ×          |               |
| 40 | 若葉上①       | 持明院持時 | ○     | ○          |               |
| 39 | 若葉上②       | 持明院持時 | ○     | ○          |               |
| 38 | 藤裏葉②       | 中院通茂  | ○     | ○          |               |
| 37 | 藤裏葉①       | 持明院持時 | ○(和歌) | ○          |               |
| 36 | 梅枝         | 持明院持時 | ○     | ○          |               |
| 35 | 真木柱        | 持明院持時 | ○     | ○          |               |
| 34 | 藤袴         | 甘露寺方長 | ○(和歌) | ○          |               |
| 33 | 行幸         | 甘露寺方長 | ○(和歌) | ○          |               |
| 32 | 野分         | 甘露寺方長 | ○     | ○          |               |
| 31 | 篝火         | 甘露寺方長 | ○(和歌) | ○          |               |

てつくりあつかうまつらせはや」であり、【若菜下②】は女樂の場面で春秋の音楽優劣論を交わす光源氏と夕霧親子の場面「春のおほる月夜よ……」であり、【柏木】は「たれも千とせの松ならぬよ」という歌語的な要素を含む箇所である。いずれも和歌的・文化的な要素が強いのが『専大源氏画帖』の詞書の特色といえよう。

### 三 詞書伝称筆者の筆跡・制作年代

では次に、『専大源氏画帖』の詞書伝称筆者について、筆跡の観点から考察し、制作年代についても検証してみたい。各伝称筆者の真筆とされる筆跡を多く含む作品群と比較検討してみる。

#### ・『専大源氏画帖』(A)

・東京国立博物館蔵『徒然草画帖』(住吉具慶筆、一六七八年)<sup>(7)</sup> (B)

・MIHOMUSEUM蔵(茶道文化研究所旧蔵)『源氏物語絵巻』(住吉具慶筆、五巻、一六七〇〜一六七四

年頃)<sup>(8)</sup> (C)

『徒然草画帖』(B)には、『専大源氏画帖』のうち、甘露寺方長・愛宕通福以外の計八名による詞書伝称筆者名がみえる。松原茂氏<sup>(9)</sup>によれば、『徒然草画帖』の詞書伝称筆者の中でも飛鳥井雅章・中院通茂・持明院基時の筆蹟は真跡であるという。『源氏物語絵巻』(C)の詞書伝称筆者には、『専大源氏画帖』の詞書伝称筆者十名のうち、持明院基時以外の九名が含まれている。(B)(C)の画帖はどちらも江戸時代初期に成立しており、制作過程や

制作時期を考える上でも重要な作品といえる。

しかし、『源氏物語絵巻』(C)の詞書においては、現在確認できる資料が榊原悟氏の論文に掲載された詞書(中御門資胤・道晃法親王・飛鳥井雅章・日野弘資・柳原資廉・清閑寺熙房)の六名の筆跡のみであるため、(C)と共通する詞書伝称筆者九名のうち、右記の六名のみを比較対象とした。

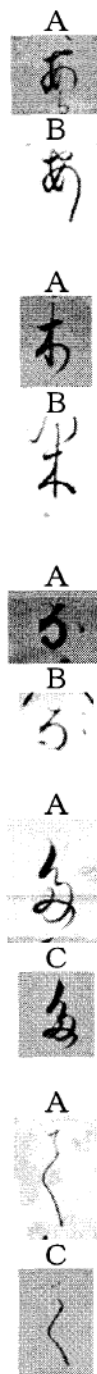
この他、大英図書館蔵『源氏物語画帖』(住吉如慶筆)<sup>(10)</sup>(以下、「大英本」とする)の詞書伝称筆者は、『専大源氏画帖』の詞書伝称筆者である中御門資胤・道晃法親王・飛鳥井雅章・日野弘資・中院通茂・清閑寺熙房の六名と共通し、中でも日野弘資の筆跡以外は真筆であるという。さらに、MIHOMUSEUM蔵『女房三十六人歌合画帖』(清原雪信筆、一六七一年頃)、東京国立博物館蔵『新三十六歌仙画帖』<sup>(11)</sup>(狩野探幽筆、一六六四年)等にも『専大源氏画帖』の詞書伝称筆者の名が散見されるため、参照した。

本章では、『専大源氏画帖』の筆跡を(A)とし、主に『徒然草画帖』の筆跡(B)・『源氏物語絵巻』の筆跡(C)との比較を中心として明示し、検討を試みる。

以下に掲げる(1)・(10)の『専大源氏画帖』の各詞書伝称筆者の叙述について、源氏絵詞書伝称筆者の共通作品の検索や筆跡に関しては、榊原悟氏「筆跡伝称筆者名一覧」<sup>(13)</sup>や高橋亨氏「源氏絵詞書伝承筆者一覧」<sup>(14)</sup>を参考とした。

(1) 中御門資胤【一六三六～一七〇七】

資潤筆とされる作品はこの他、大英本、『女房三十六人歌合画帖』、静嘉堂文庫蔵『時代不同歌合画帖』（住吉具慶・狩野秀信合筆）、開口神社蔵『大寺縁起絵巻』（土佐光起筆、一六九〇年）、板橋区立美術館蔵『三十六歌仙画帖』（住吉具慶筆）などがある。資潤の運筆は丸みがあり、起筆・終筆が丁寧で、「あ」「き」「な」「た」「て」などの文字にその特徴が見られる。



(2) 中院通茂【一六三一〜一七一〇】

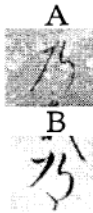
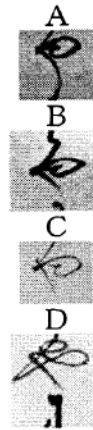
通茂筆とされる作品はこの他、大英本、MOA美術館蔵『源氏物語四季賀絵巻』（住吉具慶筆、以下「MOA本」とする）、『女房三十六人歌合画帖』・『新三十六歌仙画帖』・『三十六歌仙画帖』などがある。書流は中院流。通茂の運筆は丸みがあり、縦角は細く、横角は太く、減り張りがある。同じ中院流である資潤・道晃筆の筆法を受け継いでいる。「の」「れ」「へ」「を」などに特徴が見られる。



(3) 日野弘資【一六一七〜一六八七】

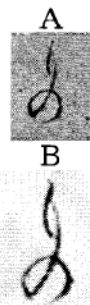
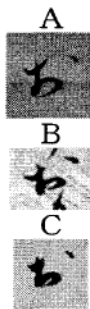
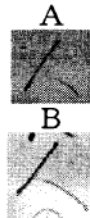
弘資筆とされる作品はこの他、大英本、徳川黎明会蔵『源氏物語画帖』（土佐光則筆、以下「光則本」とする）、広隆寺蔵『聖徳太子絵伝』（住吉如慶筆、一六五三年）、『女房三十六人歌合画帖』・『新三十六歌仙画帖』・『三十六

歌仙画帖』などがある。弘資が伊達家の田村宗永（建顕）に和歌指導したことを記した弘資自筆とされる『日野三部抄』<sup>(16)</sup>（D）などもある。書流は日野流。弘資の運筆は独創的で、絵画的な筆蹟である。「や」「の」「を」等に特徴が見られる。



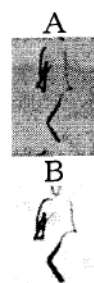
（4）飛鳥井雅章【一六一一～一六七九】

雅章筆とされる作品はその他、大英本、根津美術館蔵『源氏物語画帖』（以下「根津本」とする）、光則本、『聖德太子絵伝』・『女房三十六人歌合画帖』・『新三十六歌仙画帖』・『三十六歌仙画帖』などがある。書流は榮雅流（飛鳥井流）。雅章の運筆は丸みを帯びた線質、字粒が小さく、のびやかさに欠けるものの、繊細な終筆は美しい。「つ」「人」「お」「もの」などに特徴が見られる。



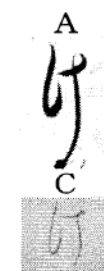
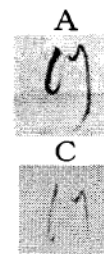
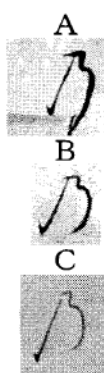
（5）道晃法親王【一六一二～一六七八】

道晃筆とされる作品はこの他、大英本、根津本、MOA本、光則本、『聖太子絵伝』、三室戸寺鐘銘の揮毫、『新三十六歌仙画帖』などがある。書流は中院流の名筆といわれる。道晃の運筆は縦線の流れが繊細で丸みの表現も自在であり、連綿が美しい。「れ」「の」「て」などに特徴が見られる。



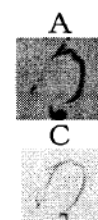
(6) 清閑寺瀬房【一六三三〜一六八六】

熙房筆とされる作品はこの他、真筆とされる『新三十六歌仙画帖』（藤原隆祐）、大英本、根津本、MOA本、『女房三十六人歌合画帖』・『時代不同歌合』・『三十六歌仙画帖』などがある。熙房の運筆は全体的にやわらかくのびやかであるが、繊細さに欠ける。「の」「つ」「け」などに特徴が見られる。ちなみに真筆とされる『新三十六人歌合画帖』の詞書と比較すると、「婦」「起」「乃」などが近似している。



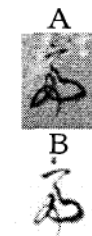
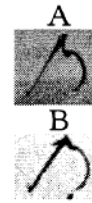
(7) 甘露寺方長【一六四八〜一六九四】

方長筆とされる作品は『徒然草画帖』（B）にはない。この他、徳川黎明会叢書「色紙」<sup>(17)</sup>（E）・『大寺縁起絵巻』・『三十六歌仙画帖』などがある。方長の運筆は大ぶりで一文字一文字に重みがあるものの、繊細さに欠ける。「の」「さ」などに特徴が見られる。



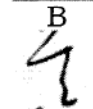
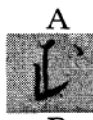
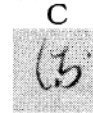
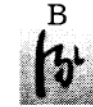
(8) 持明院基時【一六三五〜一七〇四】

基時筆とされる作品は『源氏物語絵巻』(C)にはない。その他、MOA本、『女房三十六人歌合画帖』・『新三十六歌仙画帖』・『大寺縁起絵巻』・『三十六歌仙画帖』、チェスタービーティー図書館蔵『源氏物語絵巻』(一六八八年)、紫宸殿賢聖障子銘及び築地外下馬札等を揮毫、神楽秘曲相伝などがある。書流は持明院流。基時の運筆は繊細な流麗さが秀逸で、「に」「の」「て」などに、入木道の名門である持明院家の筆跡が窺える。



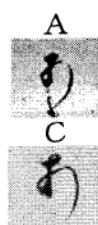
(9) 柳原資廉【一六四五〜一七二二】

資廉筆とされる作品は少なく、管見の限りでは(B)(C)以外にはあまり見られない。杭全神社蔵『三十六歌仙図扁額』(平野幽篁筆、一六七九年)の「中納言家持」の和歌等が資廉筆とされるが未見である。資廉筆の運筆は縦長で太く、墨の濃淡の差がはっきりとしている。「る」「む」「て」などに特徴が見られる。

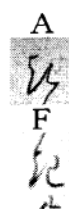


(10) 愛宕通福【一六三四〜一六九九】

通福筆とされる作品は『徒然草画帖』(B)にはない。この他、東京国立博物館蔵『伊勢物語』(住吉如慶筆、詞書は愛宕通福全巻一筆、一六六一年以降)(F)・『新三十六歌仙画帖』などがある。通福の運筆は大ぶりで、「あ」「き」「つ」などに特徴が見られる。



F あ



A  
あ



F  
あ

詞書筆者の筆跡検討を行うと、すべて真筆とは断定できないものの、『徒然草画帖』において真筆とされる飛鳥井雅章・中院通茂・持明院基時の筆跡は『専大源氏画帖』と酷似している。さらに、道晃法親王・日野弘資・清閑寺瀬房・柳原資廉・中御門資瀬なども近い。愛宕通福と甘露寺方長に関しては比較資料が少ないために断定はできないが、詞書伝称筆者十名のうち、八名の筆跡は真筆に近いといえる。書流は中院流・飛鳥井流・持明院流・日野流など、藤原行成の流れを組む世尊寺流派で書かれている。

『専大源氏画帖』の制作年代については、詞書筆者の道晃法親王の詞書の題簽に「照高院」とある。道晃法親王が「照高院」となるのは一六五八年であり、道晃法親王は一六七八年に没している。このことから、一六五八〜一六七八年の間と考えられる。しかし、詞書筆者の中で一番若年の甘露寺方長が一六四八年に生まれているため、一六五八年に方長が十一歳で書写したとするには無理がある。さらに、『十帖源氏』が一六六一年に刊行ということを考慮すると、一六六一年〜一六七八年の間に作成されたものと絞られてくる。『専大源氏画帖』の詞書伝称筆者が多く存在する(B)『徒然草画帖』(飛鳥井雅章の娘の嫁入道具とされる)は一六七八年成立、(C)M I H O M U S E U M 蔵『源氏物語絵巻』は一六七〇〜一六七四年成立している。これらは、『専大源氏画帖』の想定した制作年代一六六一年〜一六七八年の間であり、一六七〇年代の作品群である。



また、序章でも述べたように、『<sup>(20)</sup>隔黄記』によれば、立圃は岩倉具起と交流がある。承応二年（一六五三）十二月十三日条に、『<sup>(具起)</sup>十三日、於岩倉黄門公、而俳諧連歌一座興行、予発句、此中一順廻也。連衆者、予・風早左京太夫実種朝臣・源藏人義純・<sup>(竹内)</sup>雛屋立圃・<sup>(野々口)</sup>河地又兵衛也』とあり、承章とともに立圃は岩倉具起邸で行われた俳諧興行に参加している。立圃筆『花見之記』（綿屋文庫蔵）に賞賛の辞を書くほどに、具起は立圃の良き理解者であったようである。しかし、『専大源氏画帖』には染筆者に具起の名は見えない。岩倉具起【慶長六年（一六〇一）〜万治三年（一六六〇）】は後水尾院が講じた『伊勢物語』講釈の聞書の聴講者の一人である。『伊勢物語』<sup>(21)</sup>講釈は明暦二年（一六五六）八月二日から九月二十九日まで十二回に渡って行われ、具起他、妙法院堯然法親王、聖護院道晃法親王、飛鳥井雅章、中院通茂、日野弘資、白川雅喬、烏丸資慶の八名が聴講者として参加している。さらに、翌明暦三年（一六五七）二月、堯然親王、道晃法親王、雅章、具起は後水尾院から古今伝授を受け、寛文四年（一六六四）五月十二日、後西院、通茂、弘資、資慶も古今伝授を受けている。このように、同時代に後水尾院の伊勢物語講釈や古今伝授に関わった後水尾院の側近者たちの内、道晃法親王、雅章、通茂、弘資の四名は『専大源氏画帖』の染筆者に名を連ねている。具起は一六六〇年に薨去していることから、『専大源氏画帖』の詞書筆者には加わることができなかったと考えられる。やはり、『専大源氏画帖』は一六六〇年以降に制作が立案され、『十帖源氏』が刊行された一六六一年〜一六七八年の間に作成されたものであろうと推測されるのである。

#### 四 承章の文化サロンとの関係性



画師でもあったため、藪家と懇意であった。その由で承章に会う。以降、承章と立圃は主に俳諧を通じた交流記事が『隔蓑記』には約八十箇所に渡る。明暦三年（一六五七）二月二十四日午後、立圃を介して中嶋治右衛門が来て、水野日向守（勝貞）所望の歌仙絵色紙に聖護院宮（道晃）の染筆周旋を依頼されたとある（B）。歌仙絵色紙三十六枚は狩野探幽の筆であるという。立圃は備後国（現広島県）福山藩主である水野勝成、勝俊、勝貞の招きにより、慶安四年（一六五一）から寛文二年（一六六二）まで備後国福山に滞在し、俳諧の手ほどきをしている。福山市には、明王院蔵『草戸記』や福禅寺蔵『備後國鞆之浦觀音堂之縁起』など、福山市の重要文化財として立圃文書が現在も数多く残っている。<sup>(25)</sup> ゆえに、立圃が勝貞のために承章を介して、探幽筆の歌仙絵に道晃法親王の染筆幹旋を依頼したことは十分に考えられる。道晃法親王は『専大源氏画帖』詞書伝称筆者の一人であり、御水尾院より明暦三年に古今伝授を受けた一人でもある。

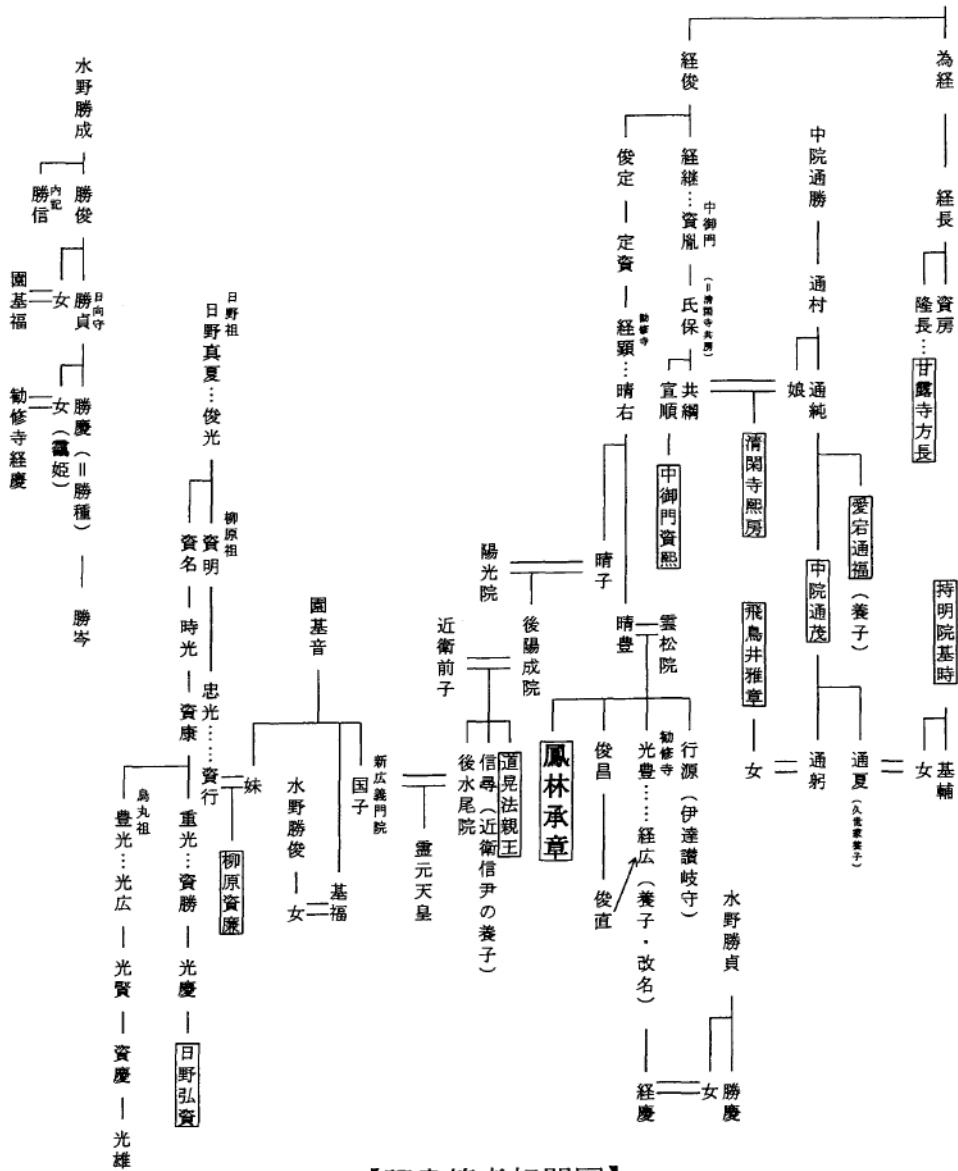
第三篇の序章でも指摘したように、

廿一日、…古今集之御伝授今日相済故、妙法院御門主宮・聖護院御門主宮・飛鳥井前大納言雅章卿・

岩倉前中納言具起卿、此四人御伝授之御祝振舞也。為御相伴、勸修寺前大納言経広卿与予被召者也。

明暦三年（一六五七）二月二十一日、御水尾院から古今伝授を受けた道晃法親王・飛鳥井雅章他に対して祝宴が催され、承章も陪席している。この時、承章とともに陪席し、『隔蓑記』にも度々登場する人物に勸修寺経広がいる。経広は勸修寺俊昌の子、俊直であり、改名して叔父である勸修寺光豊の養子となり、勸修寺家を継いだ人物で承章の甥にあたる。徳川美術館蔵『源氏物語画帖』（土佐光則筆）の関屋巻の詞書を書いた人物でもある。

勅修寺家祖 吉田  
藤原高藤：資經



【詞書筆者相關図】

C十四日、…令帰山、則於門前之内、而勸修寺<sup>(経應)</sup>・同息勘解由公同道、被帰計、相逢、是非可被帰之由

申、立帰被申、出羹・吸物、鉢飯出之、而勸酉水也。從勘解由公、菓子・昆布被惠之也。

D十一日、…赴聖護院宮御門主、赴京之御寺也。自水野日向守、被頼歌仙三十六枚<sup>(勝貞)</sup>【狩野探幽筆之絵】、致持

参、差上也。

E十三日、…自長谷聖護院宮法親王、御直書被下、内々從水野日向守、被申上歌仙三十六枚御歌、被染尊毫、

為持、被下也。

F二日、自水野日向守殿、預使者、為音信、小袖壹重羽二重青白・大樽酉水壹荷・昆布壹箱・木海月壹箱被惠之也。使者中嶋治右衛門也。書状来也。水日州守殿与予未面。雖然、歌仙之歌聖門主江予肝入、申入之礼也。<sup>(遠見)</sup>

G十三日、自水野日向守殿、於聖護院御門主道晃法親王、而使者進上被申二付、案内者之事、自中嶋治右衛門、申来。閑蔵主為案内者、遣岩坊也。予書状遣岩坊也。御小袖三ヶ・昆布壹箱・松海苔壹箱・大樽壹荷進上被

申之由也。

H五日、…自水野日向守殿之内中嶋治右衛門、状来、自野々口立圃之状并素麵壹箱相届也。備後国之水野内

記云仁息女詠歌之点取之事、自立圃、被頼予、而誰人亦点頼之由、於去所、而点頼也。為其礼、自水内記、

備後素麵壹箱【五貫目入】惠之也。

I十一日、自野々口立圃、被申水野内記所之百首和歌之二卷点并改正之事、於去方、而頼、依掛点、而二卷令返進也。其次芙蓉香匂袋五ヶ贈水野内記方、立圃迄遣也。

承章と経広との交流は『隔莫記』の随所にみられ、その一例が承応二年（一六五三）正月十四日条の記事である。承章のもとに経広・経慶親子が来訪し、夕食を交えている（C）。その約一か月後、明暦三年（一六五七）三月十一日、承章は道晃法親王に水野家依頼の歌仙絵三十六枚を持参する（D）。同年八月十三日、歌仙絵が完成する（E）。同年十月二日、歌仙絵のお礼として、水野家より、小袖・お酒・昆布・海月などが承章の元に届けられる（F）。同年十二月十三日には道晃法親王へのお礼として、小袖・昆布・海苔・お酒などが届けられる（G）。

その後も水野家と承章との交流は続き、万治三年（一六六〇）七月五日、立圃より備後国水野内記（勝信）娘の詠歌添削を斡旋し、謝礼として備後素麺が贈られている（H）。寛文二年（一六六二）五月十一日には、以前に依頼のあった水野内記（勝信）の百首和歌の二巻の添削、改正のうち、「去方」掛点の一巻を立圃に返戻し、承章は芙蓉香の匂袋を水野方に立圃を介して贈っている（I）。

これらの記述から想定できるのは、『専大源氏画帖』は水野家に関連するものとしてオーダーされたものではないかということである。立圃と水野家との関わり、立圃と承章の文化交流、そこから発展した道晃法親王と水野家との交流、その先に堂上公家の詞書と立圃の挿絵による『専大源氏画帖』の制作があったのではないだろうか。

当時の立圃の文化人としての評価について、『隔莫記』によれば、

J 八日、…野々口立圃述作十八番発句合二巻奉献 叡眷也。

K 四日、…予歳旦俳諧発句申上、野々口立圃脇申上、立圃発句亦申上也。

万治三年（一六六〇）九月八日、承章が仙洞（後水尾院）に参上、立圃作「十八番之発句合」二巻を奉献、叡覧

に入れている(J)。寛文四年(一六六四)一月四日、仙洞御所にて、承章が発句を、立圃が脇で歳旦俳諧を申し上げ、立圃は自作の発句を言上している(K)。これは、堂上公家、天皇までに及ぶ立圃の社会的な高い評価を示している。

また、詞書の総指揮は、伝称筆者の配列から推測すると中院通茂と日野弘資の二人であつたのではないと思われる。以下に、詞書筆者の巻の配分表を明示してみる。

|    |      |       |           |
|----|------|-------|-----------|
| 1  | 松雲①  | 中院門資  | 1636~1707 |
| 2  | 松雲②  | 中院通茂  | 1631~1710 |
| 3  | 香木①  | 中院門資  |           |
| 4  | 香木②  | 日野弘資  | 1617~1687 |
| 5  | 空柳   | 中院門資  |           |
| 6  | 夕顔   | 中院門資  |           |
| 7  | 若菜   | 中院門資  |           |
| 8  | 末摘花  | 中院門資  |           |
| 9  | 紅葉①  | 飛鳥井雅家 | 1611~1679 |
| 10 | 紅葉②  | 道見法親王 | 1612~1678 |
| 11 | 花菱   | 飛鳥井雅家 |           |
| 12 | 菱    | 飛鳥井雅家 |           |
| 13 | 菱木   | 飛鳥井雅家 |           |
| 14 | 花散里  | 飛鳥井雅家 |           |
| 15 | 須藤   | 飛鳥井雅家 |           |
| 16 | 明石   | 中院通茂  |           |
| 17 | 花柳   | 中院通茂  |           |
| 18 | 露生   | 中院通茂  |           |
| 19 | 蘭麝   | 中院通茂  |           |
| 20 | 総合   | 中院通茂  |           |
| 21 | 松風   | 中院通茂  |           |
| 22 | 海雲   | 清閑寺源房 | 1633~1686 |
| 23 | 新蘭   | 清閑寺源房 |           |
| 24 | 少女   | 清閑寺源房 |           |
| 25 | 玉露①  | 清閑寺源房 |           |
| 26 | 玉露②  | 日野弘資  |           |
| 27 | 初音   | 清閑寺源房 |           |
| 28 | 胡蝶   | 清閑寺源房 |           |
| 29 | 望    | 甘露寺方長 | 1648~1694 |
| 30 | 常夏   | 甘露寺方長 |           |
| 31 | 露火   | 甘露寺方長 |           |
| 32 | 野分   | 甘露寺方長 |           |
| 33 | 行幸   | 甘露寺方長 |           |
| 34 | 藤袴   | 甘露寺方長 |           |
| 35 | 真木柱  | 持明院基時 | 1635~1704 |
| 36 | 梅枝   | 持明院基時 |           |
| 37 | 藤葉①  | 持明院基時 |           |
| 38 | 藤葉②  | 中院通茂  |           |
| 39 | 若菜上  | 持明院基時 |           |
| 40 | 若菜下① | 持明院基時 |           |
| 41 | 若菜下② | 道見法親王 |           |
| 42 | 柏木   | 持明院基時 |           |
| 43 | 橘宮   | 藤原實隆  | 1645~1712 |
| 44 | 鶴虫   | 藤原實隆  |           |
| 45 | 夕顔   | 藤原實隆  |           |
| 46 | 御法   | 藤原實隆  |           |
| 47 | 弓    | 藤原實隆  |           |
| 48 | 勾宮   | 藤原實隆  |           |
| 49 | 紅梅   | 堂宮通福  | 1634~1689 |
| 50 | 竹河   | 堂宮通福  |           |
| 51 | 橘姫   | 堂宮通福  |           |
| 52 | 梅本   | 堂宮通福  |           |
| 53 | 松角   | 堂宮通福  |           |
| 54 | 早慶   | 堂宮通福  |           |
| 55 | 福木   | 日野弘資  |           |
| 56 | 東風   | 日野弘資  |           |
| 57 | 浮舟   | 日野弘資  |           |
| 58 | 蜻蛉   | 日野弘資  |           |
| 59 | 手習   | 日野弘資  |           |
| 60 | 夢浮橋  | 日野弘資  |           |

道見法親王の『陪聴日記』<sup>(26)</sup>によれば、

寛文四年五月十二日戌晴、午刻ヨリ細雨。未刻ヨリ甚雨。新院古今集御伝受之作法、御上壇ニ法皇、南ニ御座。：新院北面ニ御座。次ノ間、中院大納言、日野前大納言、鳥丸前大納言北向ニ伺公。庇ニ飛鳥井前大納言、予伺公シテ聴聞。(以下略)

寛文四年(一六六四)五月十二日、通茂・弘資は後水尾院から古今伝授を受け、その聴聞には『専大源氏画帖』

の詞書伝称筆者である道晃法親王・飛鳥井雅章も同席している。また通茂・弘資の二人は寛文十年（一六七〇）十月八日とともに武家伝奏となつて<sup>(27)</sup>いる。すなわち、『専大源氏画帖』は当初、九名で六図ずつを担当し、計五十四図を作成する予定であつたが、水野家と交流のある道晃法親王が「紅葉賀②」「若菜下②」を書いてくれることとなつた。しかし、五十六図では中途半端な枚数であり、六十図にするために通茂が「桐壺②」「藤裏葉②」を、弘資が「帚木②」「玉鬘②」を追加して書いたものではないかと想定する。

注文主が水野家であると仮定すると、では水野家のどのような出来事のために『専大源氏画帖』は作成されたものなのであろうか。

『水野記』七〔勝慶姉嫁勸修寺経慶事〕によれば、

寛文十年十月十八日、勝慶之姉<sup>シテ</sup>発<sup>ヲ</sup>江<sup>ク</sup>戸<sup>ニ</sup>赴<sup>ニ</sup>京<sup>ニ</sup>都<sup>ニ</sup>、使<sup>下</sup>上田玄蕃 吉田平右衛門 中村治左衛門 竹内所  
左衛門 赤沢善太夫 吉田久米助 林良哲等<sup>ヲ</sup>一<sup>セ</sup>供奉<sup>上</sup>（中略）

十一月六日、着京、廿三日嫁<sup>スル</sup>勸修寺権中納言経慶<sup>ニ</sup>也

寛文十年（一六七〇）に勝慶の姉が勸修寺経慶に嫁いだ記事がみえる。「勝慶之姉」とは、『水野記』七〔水野勝貞於備後国鞆誕生之事〕によれば、

慶安庚寅年<sup>ニ</sup>誕生<sup>ス</sup>女子<sup>ヲ</sup>一<sup>ス</sup>号<sup>ト</sup>「羈姫」

勝貞の娘である羈姫を指し、「慶安庚寅」とあることから、慶安三年（一六五〇）に生まれていることがわかる。<sup>(30)</sup>水野家系図によれば、勸修寺経広に嫁いだと記されているが、経広は一六〇六年に生まれて一六八八年に亡くな



っていることから、一六七〇年に嫁をもらうのは不自然である。経広の子、経敬は幼名を経慶といい、一六四五年に生まれていることから、勝負の娘は経広ではなく、経慶に嫁いだものと思われる。おそらく、記事を書写する段階で「経広（経廣）」の「廣」と「経慶」の「慶」の字が錯綜したと考えられる。そこで本章では羈姫は勸修寺勝慶に嫁いだとしておく。ちなみに勝慶は前述の東京国立博物館蔵『徒然草画帖』第一五一一段の詞書筆者でもある。

『専大源氏画帖』【玉鬘②】詞書には、「藤原のるりきみ」という、筑紫から京へ向かう玉鬘の将来を暗示するような箇所が選び取られている。筑紫から初瀬への下りは、絵巻や画帖の図様として多用されているものの、詞書に「藤壺の瑠璃君」が用いられている源氏絵詞や画帖類は管見の限りでは他に見られない。

【詞書筆者相関図】によれば、甘露寺方長・持明院基時・飛鳥井雅章・愛宕通福・道晃法親王・清閑寺瀬房・中院通茂・中御門資瀬の八名は勸修寺家に関わる人物であり、日野弘資・柳原資廉の二名は園家に関わる人物である。勸修寺家・園家ともに水野家の娘が嫁いでいることがわかる。すなわち、『専大源氏画帖』は、水野家三代藩主勝貞娘、羈姫の勸修寺家お興入れの際の祝いの品の一つとして作られたものとは考えられないだろうか。成立は羈姫の嫁いだ寛文十年（一六七〇）前後と推定される。一六七〇年前後は、第三節で取り上げた詞書筆者の筆跡等から推定した成立時期とも一致する見解である。

## 五 おわりに

以上、『専大源氏画帖』の詞書を中心として、鳳林承章の文化サロンに着目しつつ、江戸初期の文人たちの様相を追った。

『専大源氏画帖』の詞書の本文は大島本や日大三条西家本に近い青表紙本の本文である。道晃法親王・飛鳥井雅章・中院通茂・日野弘資ら堂上公家十人による寄合書きであり、和歌的・文化的な要素が強い。詞書筆者の筆跡は、真筆と思われる画帖類の筆跡との比較を行うと、真筆と思える筆跡が数多く見られた。制作年代は詞書筆者の生没年や動向を追ってみると、一六七〇年前後と考えられる。堂上公家の詞書と地下人である野々口立圃の挿絵をモチーフとした画帖が制作された背景には、承章の文化サロンが見え隠れしている。承章の記した『隔葉記』によれば、天皇までに及ぶ俳諧師立圃の評価の高さを窺い知ることができる。承章サロンの多様な文化の情報交流の中にいた立圃は、そこで多くの一流の文化に触れる機会に恵まれたと考えられる。そして、立圃が水野勝成、勝俊、勝貞の招きによって備後国福山藩に滞在した功績は大きいといえよう。

つまり、『専大源氏画帖』は、詞書に関しては中院通茂と日野弘資の二人が総指揮をとり、寛文十年（一六七〇）に水野勝貞の娘である鶴姫が勧修寺経慶へ嫁ぐ際の祝いの品の一つとして作成されたものであると結論づけておきたい。

- (1) 専修大学図書館所蔵『源氏物語画帖』(A/九一三・三/MU五六)。
- (2) 『日本家紋総鑑』(角川書店、一九九三年、五四四～五四五頁)。備後国福山藩は「丸に鷹の羽違い」。
- (3) 井黒佳穂子氏「テキストとイメージから追う物語性の構築―絵巻から浮世絵まで―」(専修大学大学院博士學位論文(二〇一三年三月))。
- (4) 片桐洋一氏編『源氏物語絵詞―翻刻と解説―』(大学堂書店、一九八三年)。
- (5) 『和泉市久保惣記念美術館源氏物語手鑑研究』土佐光吉筆(和泉市久保惣記念美術館、一九九二年)。
- (6) 京都国立博物館蔵『源氏物語画帖』土佐光吉筆(勉誠社、一九九七年)。
- (7) 東京国立博物館画像データベース(<http://webarchives.tnm.jp/archives/#>)に拠る。『徒然草画帖』については松原茂氏「住吉具慶筆「徒然草画帖」―制作期とその背景―」(東京国立博物館美術誌六月号『MUSEUM』三八七号、一九八三年)を参照した。
- (8) MIHO MUSEUM蔵『源氏物語絵巻』(住吉具慶筆・五巻)の絵の部分は、『週刊絵巻で楽しむ『源氏物語』五十四帖』(朝日新聞出版)等で確認できる。詞書の筆跡画像についてはMIHO MUSEUM所蔵のものを使用し、榊原悟氏「住吉派『源氏絵』解題―附諸本詞書―」(『サントリー美術館論集』第三号・サントリー美術館・一九八九年、六二～八九頁)掲載の具慶筆『源氏物語絵巻』の詞書の筆跡等を参照した。
- (9) 松原茂氏「詞書筆者と執筆分担―絵画作品への書からのアプローチ―」(『講座日本美術史 第一巻 物から言葉へ』東京大学出版会・二〇〇五年)。

- (10) 大英本に関しては、辻英子氏『在外日本重要絵巻集成』（笠間書院、二〇一一年）に詳しい。
- (11) 若杉準治氏『女房三十六人歌合画帖』（ふたば書房、一九九〇年）。高垣幸絵氏「清原雪信筆『女房三十六人歌合画帖』について」（『MIHO MUSEUM研究紀要』十四号、二〇一四年三月）。
- (12) 江戸名作画帖全集Ⅳ『狩野派 探幽・守景・一蝶』（新三十六歌仙画帖）探幽筆（駸々堂出版、一九九四年）。
- (13) 注（8）の榊原悟氏論に同じ（二一六～二二四頁）。
- (14) 高橋亨氏「近世初期「源氏絵」と詞書筆者について」（『中古文学』第八四号、二〇〇九年十二月）、同氏「江戸前期の和文古典学の成立と書画の美―古筆文献学によせて―」（『文学・語学』二〇六号、二〇一三年七月）を参照した。
- (15) 書流に関しては、『小松茂美著作集 第十八巻 日本書道史展望』（旺文社、一九九七年）に拠る。
- (16) 『近世歌学集成（上）』（明治書院、一九九七年）。日野弘資と田村宗永（建顕）の交流に関しては、渡辺憲司氏「大名と堂上歌壇―田村建顕を中心に―」（『近世堂上和歌論集』明治書院、一九八九年）に詳しい。
- (17) 「八雲 裏三二 一二九 甘露寺殿方長卿 色紙」（徳川黎明會叢書『古筆手鑑篇二 蓬左・霜のふり葉・八雲』（思文閣出版、一九八六年）。
- (18) なにわ・大阪文化遺産学叢書十八『杭全神社宝物撰』（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター、二〇一〇年三月、七九頁）。

(19) 東京国立博物館画像データベース (<http://webarchives.tnm.jp/archives/>) に拠る。『伊勢物語絵巻絵本大成 研究篇』(角川学芸出版、二〇〇七年) を参照した。

(20) 赤松俊秀氏校注編『隔蓐記』第三「承応二年十二月」条(思文閣出版、一九九七年復刻版、四一一頁)。  
『隔蓐記』の本文引用は、以下全て同じ。

(21) 大津有一氏「第二章 旧註の時代、第四四 後水尾院の講釈と聞書、四 明暦三年の講釈と聞書」(『伊勢物語古注釈の研究』(八木書店、一九八六年増補版、四八二～四九四頁)、「後水尾院歌壇主要事項年表」(鈴木健一氏『近世堂上歌壇の研究』汲古書院、一九九六年、三〇九～三九九頁)の「明暦三年の記事」(三五六～三五七頁)・「寛文四年の記事」(三六八～三六九頁)等を参照した。

(22) 古今伝授に関しては、横井金男氏『古今伝授の史的研究』(臨川書店、一九八〇年)、鈴木健一氏『近世堂上歌壇の研究』(汲古書院、一九九六年)等がある。寛文四年の古今伝授に関しては、海野圭介氏「後水尾院の古今伝授―寛文四年の伝授を中心に―」(『講座平安文学論究』第十五輯、風間書房、二〇〇一年)に詳しい。

(23) 小高敏郎氏「貞門時代における俳諧の階層的浸透」(『国語と国文学』貞門・談林の俳諧、第三四巻四号、一九五七年四月)。立圃と承章の交流に関わる『隔蓐記』の記述を全用例掲載している。

(24) 【詞書筆者相関図】の作成には、『本朝皇胤紹運録』(『群書類従』第五輯、続群書類従完成会、一九六〇年訂正三版)、『増補諸家知譜拙記』(続群書類従完成会、一九六六年)を参照した。さらに、横谷一子氏『隔

莫記』以前の鳳林承章の文化的動向」、『日本研究』第二三集、国際日本文化研究センター紀要、二〇〇一年三月）掲載の承章に関わる系図も参照した。

(25) 『福山市史』中巻「一 立圃と福山の俳諧」(福山市史編纂会、一九六八年、三三七～三四一頁)を参照した。『福山市史』は水野家と立圃の交流についても詳しい記載がある。

(26) 東山御文庫蔵『古今集講義陪聴御日記』(勅封六二・一一・一一・一二、道晃法親王録、後西院写、仮綴一冊)の活字翻刻は、高梨素子氏編『古今集古注釈書集成 後水尾院講釈聞書』(笠間書院、二〇〇九年、三八二頁)を参照した。

(27) 『徳川実紀』寛文十年十月八日条「八日日野大納言弘資卿。中院大納言通茂卿伝奏命ぜられしをもて。使出し謝せらる」(『新訂増補国史大系』四二、『徳川実紀』第五篇、吉川弘文館、一九九九年新装版、八三～八四頁)に拠る。

(28) 『広島県史』近世資料編Ⅰ(広島県、一九七三年、九五七頁)。

(29) 注(27)に同じ(九四七頁)。

(30) 水野家系図には、注(25)の『福山市史』「水野家系図」(一二〇九～一二一七頁)、青野春水氏「福山藩」(『藩史大事典』第六巻、雄山閣出版、一九九〇年、二六七～二九二頁)を参照した。

## 第二章

### 『源氏物語画帖』の絵における

俳画師立圃の影響

## 一 はじめに

本章は、専修大学図書館所蔵『源氏物語画帖』<sup>(1)</sup>（以下、『専大源氏画帖』とする）の絵における俳画師立圃の影響から、江戸初期の源氏絵享受について考えてみたい。

前章でも述べたように、『専大源氏画帖』（縦二十七・一糎、横二十・八糎、六〇図、折本三帖）は江戸時代初期に成立したもので、詞書は、飛鳥井雅章・愛宕通福・道見法親王・日野弘資・清閑寺瀨房・柳原資廉・中院通茂・中御門資瀨・持明院基時・甘露寺方長の計十名による寄合書である。絵師は不明であるが、絵は野々口立圃作『十帖源氏』の挿絵をモチーフとした『源氏物語』の場面が極彩色豊かに描かれている。『専大源氏画帖』の絵が『十帖源氏』の挿絵をモチーフとしていることに関してはすでに井黒佳穂子氏<sup>(2)</sup>が指摘している。源氏絵の享受史を追いながら、『十帖源氏』の挿絵がどのように変容し、『専大源氏画帖』に取り込まれているかを論じている。

江戸時代になると、それまで公家や武家の教養とされていた『源氏物語』は、町人にも親しまれるようになる。その先駆けとなったのが、山本春正作『絵入源氏物語』<sup>(3)</sup>（以下「絵入源氏」とする）である。漢字に振り仮名を付け、本文に句読点を施し、挿絵を加えた『源氏物語』の版本であり、『源氏物語』を誰でもよりわかりやすく、読みやすいものにしたのである。慶安三年（一六五〇）版、承応三年（一六五四）版、万治三年（一六六〇）版と、何度か改変されて広く流布した。この『絵入源氏』の承応三年（一六五四）版と時を同じくして成立したのが立



圖の『十帖源氏』である。狩野派、土佐派、住吉派の御用絵師が描いた絵に、堂上の詞書を添えた源氏絵が盛んに作られた江戸時代初期に、詞書は堂上の公家によるもので、絵は地下人である野々口立圃の『十帖源氏』の挿絵をモチーフとした特異な組み合わせの源氏絵が作られることになったのはなぜであろうか。

そこで本章では、『専大源氏画帖』を背景として、江戸初期の堂上から地下に及ぶ源氏絵享受の一端を明らかにしたい。

## 二 俳画師としての立圃

前述したように、『専大源氏画帖』の絵は野々口立圃の『十帖源氏』<sup>(4)</sup>の挿絵が基となっている。

例えば、第一図の桐壺巻において、光源氏が高麗から来た相人に人相を見てもらう場面を描いた箇所をみると、建物の三本柱や松、光源氏、右台弁、高麗人の観相見の三人の人物の配置がほぼすべて一致している。光源氏の後背の屏風の横幅や建物に続く階の有無等に違いが見えるものの、『専大源氏画帖』は『十帖源氏』の挿絵を基としていると言えるだろう。

『十帖源氏』は江戸初期（承応三年（一六五四）頃成立・寛文元年（一六六一）刊行）に野々口立圃によって作成された『源氏物語』の梗概書、いわゆるダイジェスト版である。挿絵一三二図を含み、その名の通り、十巻の構成である。『十帖源氏』についてはまず、吉田幸一氏<sup>(5)</sup>による絵と書誌の詳細かつ重厚な研究がある。『源氏物



『十帖源氏』桐壺卷



『専大源氏画帖』桐壺卷①

『語』のダイジェスト化は古くは鎌倉時代から行われ、江戸時代になってからも町人の手によって新たに多くのダイジェスト版が作られた。『源氏物語』の原文の雰囲気但至少でも一般庶民、女性や子供達にもわかりやすく簡単に伝えたい、との意向で制作されたものである。

作者は野々口立圃である。『絵入源氏』の作者である山本春正より十五歳年上の年長者であり、文禄四年（一五九五）に出生し、寛文九年（一六六九）に七五歳で没している。

『浮世絵師伝』<sup>(7)</sup>によれば、「野々口氏、名は親重、俗称紅屋庄右衛門（或は市兵衛、次郎左衛門とも）、立圃また松翁（一に松斎）と號す、丹波国保津村に生れ、後に京都に出でて烏丸家の近傍に居を構へ、禁裏御用の雛人形師となり、傍ら晝技に親しみ、書は尊朝親王の流に習ひ、共に堪能の聞えあり、其他、歌を烏丸光廣に、俳諧を松永貞徳に学び、文才亦豊かなりしが如し、素より専門の

浮世絵師にはあらざれども、世に雛屋立圃の名は、其の肉筆畫を以て多く知られたり、又版本には『十帖源氏』の挿畫あり。墓所、京都要法寺。」とある。立圃は名を親重と言ひ、立圃と号した。丹波国の保津村に生まれ、後に今日に出て烏丸家の近くに居を構えたことから、禁裏御用の雛人形師となつたという。雛屋をしながらも、書は尊朝親王に、歌は烏丸光広に、俳諧は松永貞徳に学び、各分野で才能を発揮していたようである。専門の浮世絵師ではないが、立圃の名はその画才によつて世間によく知られていたという。その代表的な挿画に『十帖源氏』が掲げられている。つまり、立圃は江戸初期の京都において、俳諧のみならず、俳画師としても有名であつたことがわかる。

『画工便覧』「立圃」の項によれば、

名親重、住「京都」、貞徳門弟、翫「俳諧」于「世」發「於」名、「常戲人物鳥獸花草圖而共贊」發句。

名は親重といい、京都に住み、貞徳の七俳仙の一人として世に名を馳せていた立圃ではあるが、その一方で人物・鳥獸・草花の絵に自賛を添えたものを作成し、俳画師としても有名であつたことが窺える。

『画本手鑑』卷六・補遺には、

発句の趣画 立圃世にしれる通書画ともにまめやかにして清玩なり。画てハ其上に一句一首をそへ、和才のよけいに草画をなす事むべなる哉。誰が筆跡を慕ともみゑねども、清潤にしてよく其趣にのる。

とあり、世に知られた立圃の画は本格的で静かに鑑賞するべきものであり、いわゆる略筆で描いた墨絵や淡彩画である草画に自賛を添えたものであつたという。

こうした立圃における俳画師としての評価は、具体的には『十二枝句合』<sup>(10)</sup>などの作品からその特色が見てとれる。『十二枝句合』は立圃の自筆句合で奥書によれば寛文六年（一六六六）に成立したものであるという。十二支の動物に装束を着せ、一対ずつ左右に配置し、それに立圃の発句を合わせたものである。動物の組み合わせは、辰と戌、巳と亥、午と子のように、七番目同士を合わせる「七つ目」というめでたい組み合わせになっている。例えば、午と子の組み合わせは、「竹馬や」「初鼠」などのように、発句の中にも干支が詠み込まれている。淡彩で描かれた動物たちの飄々とした姿には、世俗にこだわらず、超然としたつかみどころのない立圃の生き様がそのまま投影されているようでもある。

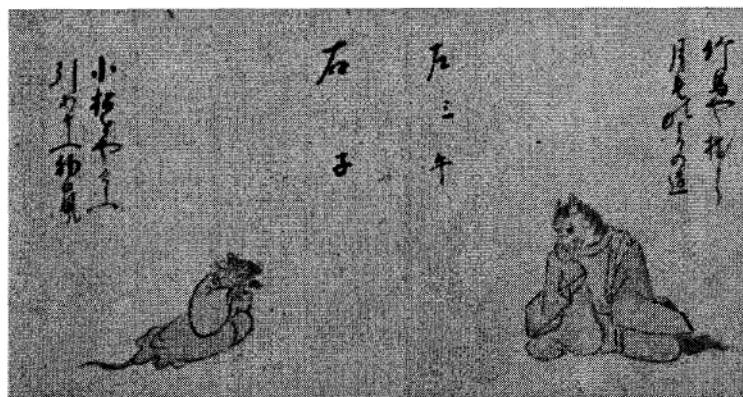
立圃はどのようにして絵の技術を習得したのであろうか。

『俳諧家譜』<sup>(11)</sup>においては、

善書又善画圃曾学画於探幽一々亦学書於立圃二云云

とあり、『浮世絵師伝』によれば、畫系の項目に、

狩野探幽及び俵屋宗達門人



早稲田大学図書館所蔵『十二枝句合』午と子

と見える。つまり、これらの記録類によれば、立圃は探幽や宗達に絵を学んだと考えられていたことがわかる。

しかし、先程の『画本手鑑』巻六・補遺には「誰が筆跡を慕ともみるねども、」とあり、立圃が誰に画を学んだのか、その画風からはわからないが、との指摘もある。木村三四吾氏<sup>(12)</sup>は、立圃が絵を狩野探幽に学んだという明徴はないとし、小杉楹邨氏『鑑定筆記』にある紫式部墨描横物の立圃の画賛の左書に、

絵は六十歳の比より新稽古にて今七十三歳の清書なれば、心ありてご覧じ候へかし

とあることから、画は晩学であったことを指摘している。『観世音霊瑞縁起絵巻』(『世界美術全集』二二)を例に挙げ、立圃の画業の才能が凡庸ではなかったと述べ、立圃の画は多く存するものの、真筆として信頼できるものは少なく、自筆の刊本挿画の確実なものとして、『十帖源氏』を挙げている。『観世音霊瑞縁起絵巻』が成立したとされる寛文元年(一六六一)は、『十帖源氏』が刊行された年と同じであり、立圃が六七歳の時の作である。晩年に画を学んだと言われる立圃だが、その画才は世間においても認められ、立圃の俳画師としての器量は『十帖源氏』の挿絵から窺うことができるのである。

立圃が誰に絵を学んだのか、その詳細は不明である。それでは立圃はどのような作品に影響を受けて、独自の画才を高めていったのであろうか。

石川真弘氏<sup>(13)</sup>によれば、立圃の書画制作の開始は正保元年(一六四四)頃、本格化したのは鳳林承章の文化サロンに登場した承応元年(一六五二)以後のことと指摘している。安田篤生氏<sup>(14)</sup>は、酒井抱一の指摘する俵屋宗達師事説や渡辺華山の指摘する松花堂昭乗敬慕説をふまえた上で、「宗達や松花堂に直接師事したのではなく、残され

た作品に学んだということであろうが、現存作品から立圃の画系を明確にすることはできない」と結論づけてい  
る。

承章の日記『隔莫記』<sup>(15)</sup>によれば、慶安五年（一六五二）四月二四日、鳳林承章は初めて野々口立圃と会う。

廿四日、…今午不時、藪入道殿檀誉公与雛屋立圃同道、而来臨也。立圃者初被来、予初相逢也。立圃者俳諧  
師也。

立圃は藪嗣良に連れ立って承章に会いに来たという。小高敏郎氏によれば、立圃は絵師として比較的によくの  
堂上の人々と交渉があったのではないかと指摘する。

藪家は、藤原南家高倉（藪）嫡流であり、藤原貞嗣の後裔の藤原範季を祖として、高倉家を興す。江戸初期に  
西園寺家の庶流である四辻公遠の子、範遠、次いで弟の嗣良が継いで、寛永十四年（一六三七）十二月二十七日  
に後に藪家と改めた。家業は神楽である。藪嗣良の娘は近衛信尋に嫁いでいる。信尋の母は近衛前子であり、前  
子の父は近衛前久、前子の兄は近衛信尹である。信尹とともに歌道の指南役をしていたのが烏丸光広である。そ  
の光広に立圃は和歌を学んでいたようである。つまり、近衛家に出入りしていた立圃はその親戚筋にあたる藪家  
とも懇意であり、その紹介で俳諧を好む承章に会ったと考えられる。

さらに『隔莫記』によれば、

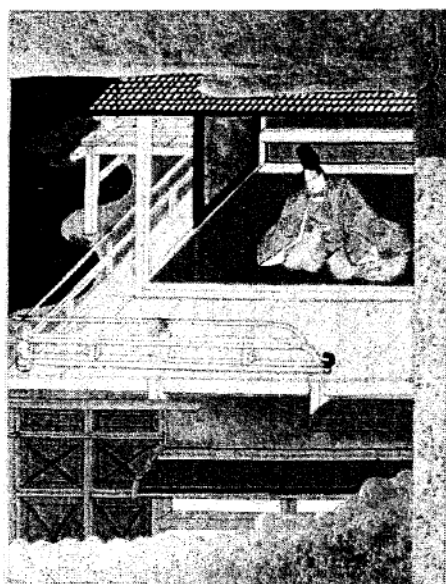
廿四日、午時雛屋立圃被来、自水野日向守殿、被頼歌仙色紙、聖護院宮被染尊毫義被頼故、狩野探幽筆之絵  
三十六枚被持来也。日州守殿屋敷留主居中嶋治右衛門云仁同道、初相对也。扇子二本入箱治右衛門持参也。

侑夕飡、点濃茶也。<sup>野々口</sup>立圃発句、俳諧十二句有之也。

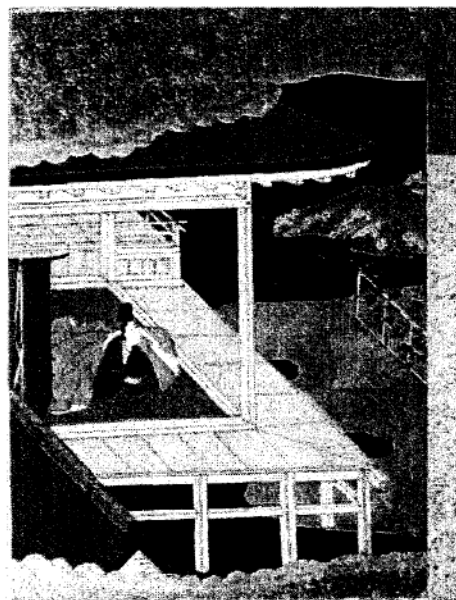
明暦三年（一六五七）二月二十四日午後、立圃を介して中嶋治右衛門が来て、水野日向守（勝貞）所望の歌仙絵色紙に聖護院宮（道晃）の染筆周旋を依頼されたとある。その歌仙絵色紙三十六枚は狩野探幽の筆であるという。前章でも述べたように、立圃は備後国（現広島県）福山藩主である水野勝成、勝俊、勝貞らの招きにより、慶安四年（一六五二）から寛文二年（一六六二）まで備後国福山に滞在し、俳諧の手ほどきをしている。『隔蓑記』にはこの他、承章が探幽や宗達らと交流していたという記述もみえる。つまり、承章のサロンに出入りしていた立圃は、探幽や宗達から直接指導を受けたかどうかは定かではないが、探幽や宗達等の絵に触れる機会を得、その過程で狩野派や琳派等の絵を独自に習得していったのではないかと考えられる。

### 三 『専大源氏画帖』の絵と『十帖源氏』の挿絵

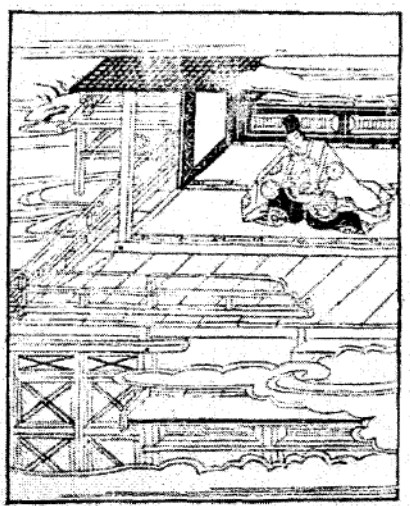
では次に、『専大源氏画帖』と『十帖源氏』の絵について考えてみたい。両者の絵を照合してみると、蛸・若菜下巻②の二例を除いてすべて『十帖源氏』の挿絵が基となっていることがわかる。さらに『十帖源氏』の挿絵ではあるものの、巻が差し替えられて使用されている場面が四図みえる。具体的には、次に示したように、『専大源氏画帖』柏木巻は『十帖源氏』宿木巻、『専大源氏画帖』句宮巻は『十帖源氏』梅枝巻、『専大源氏画帖』総角巻は『十帖源氏』句宮巻、『専大源氏画帖』宿木巻は『十帖源氏』総角巻の挿絵に差し替えられていることがわかる。



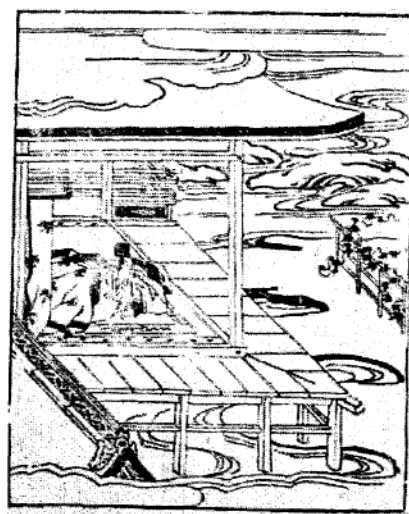
『専大源氏画帖』 勾宮卷



『専大源氏画帖』 柏木卷

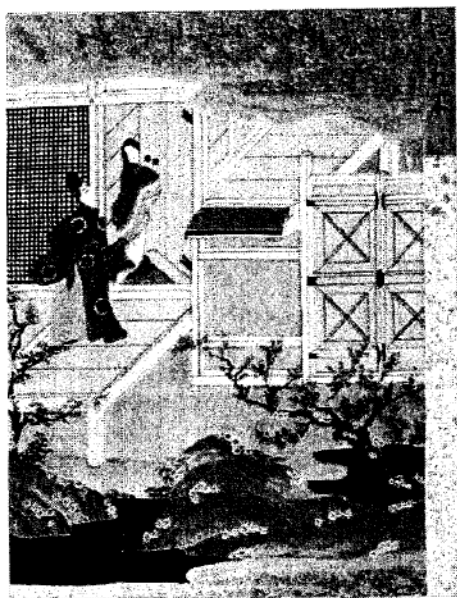


『十帖源氏』 梅枝卷



『十帖源氏』 宿木卷





『専大源氏画帖』宿木卷



『専大源氏画帖』総角卷



『十帖源氏』総角卷



『十帖源氏』匂宮卷

井黒氏<sup>(一七)</sup>は後半の巻になるにしたがつて、絵と詞書が違っており、従来あまり選ばなかった場面や伝統的な源氏絵と異なる図様を用いたことが『十帖源氏』絵との齟齬の原因であるという。確かに差し替えられている『専大源氏画帖』の絵は柏木、匂宮、総角、宿木巻と後半の巻に集中している。しかし、それにしても都合よく差し替えが行われているように思えてならない。清水婦久子氏<sup>(一八)</sup>によれば、『十帖源氏』と同じように『源氏物語』のダイジェスト版の一つである『源氏鬘鏡』において、山本春正作『絵入源氏』の挿絵を『源氏鬘鏡』の別の巻の場面に流用した例があると指摘している。つまり、当時刊行されていた『源氏物語』梗概書の挿絵の流用や差し替えは珍しいものではなかったと考えられる。

『専大源氏画帖』においても同様である。物思いにふける薫を描いた『十帖源氏』宿木巻は憂悶する柏木の『専大源氏画帖』柏木巻に、内大臣の苦悩を描いた『十帖源氏』梅枝巻は薫と香りを競いながら前栽を眺める匂宮の『専大源氏画帖』匂宮巻に、賭弓の還饗の宴を描く『十帖源氏』匂宮巻は紅葉狩りをする匂宮の『専大源氏画帖』総角巻に、大君と薫の夜明けの贈答の姿を描いた『十帖源氏』総角巻は薫と按察の君の後朝の姿の『専大源氏画帖』宿木巻に差し替えられており、ほとんど違和感を与えることなく、挿入されている。単純な差し替えや間違いであればこのようにうまく差し替えることはできないであろう。おそらく『源氏物語』に精通したものである。絶妙な差し替え、転用が行われたものと推測されるのである。

『十帖源氏』の挿絵に関しては、大阪女子大学蔵『源氏物語絵詞』、京都国立博物館蔵『源氏物語画帖』、『絵入源氏』の挿絵等と同じ場面が半数以上を占めるものの、作風も場面設定も異なる立圃独自の挿絵もみられること

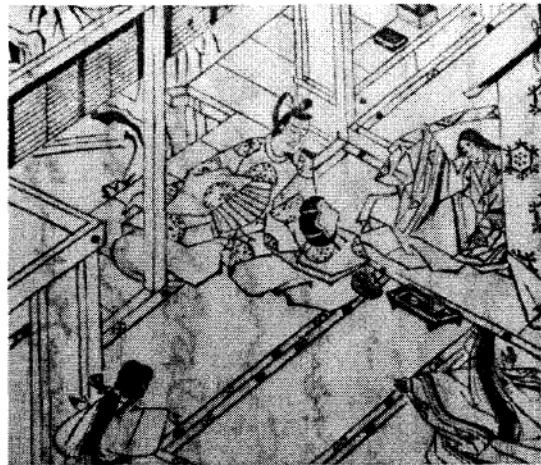
は、すでに吉田氏<sup>(19)</sup>、清水氏によつて指摘されている。また、山本陽子氏<sup>(20)</sup>、阿美古理恵氏<sup>(21)</sup>によつて、『十帖源氏』の挿絵には狩野派の流れを組む岩佐派の絵との類似性が指摘されている。阿美古氏は岩佐勝友筆『源氏物語図屏風』<sup>(22)</sup>（出光美術館蔵、以下、「勝友源氏」とする）と詳細に比較検討し、両者の近似性を明示している。

例えば真木柱巻には物の怪に取り憑かれた北の方が鬚黒大将に火取の灰を浴びせる場面がある。京都国立博物館蔵『源氏物語画帖』<sup>(23)</sup>では、実際に火取（絵では香炉）を投げつける姿ではなく、北の方が香炉を手にとっている姿で描かれている。しかし、勝友源氏では、実際に北の方は香炉を鬚黒に投げつけており、それが『十帖源氏』真木柱巻や『専大源氏画帖』真木柱巻においても同様に描かれていることがわかる。阿美古氏が指摘するように、実際に火取（香炉）を投げつけた様子を描くのは勝友源氏、『十帖源氏』、同じく立圃作の『おさな源氏』のみである。そしてそれが『専大源氏画帖』にも反映されている。人々の心情や行動を躍動感あふれる姿で生き生きと描くのが岩佐派の絵の特徴であり、その影響が『十帖源氏』にも見られ、『専大源氏画帖』ではさらに極彩色豊かに描かれているのである。

出光美術館蔵

『源氏物語図屏風』(岩佐勝友筆)

真木柱巻



『十帖源氏』真木柱巻

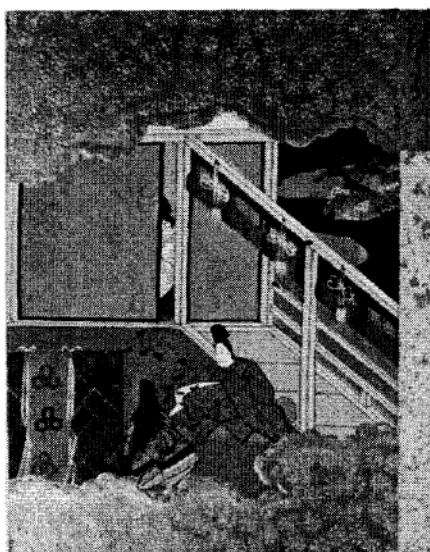


『専大源氏画帖』真木柱巻

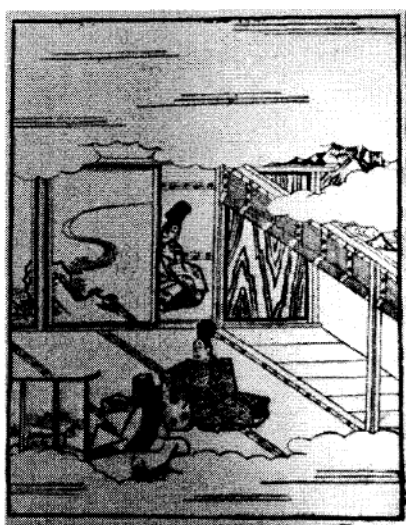
#### 四 『専大源氏画帖』の絵の特徴

最後に、『十帖源氏』の挿絵にはなく、『専大源氏画帖』にしか見られない螢・若菜下巻②の二つの絵に関して考えてみたい。螢巻は螢火に照らされる玉鬘の場面、若菜下巻②は女樂の場面であり、源氏絵としてはよく描かれる場面である。しかしこの二つの場面は『十帖源氏』『おさな源氏』には存在せず、また先行する『絵入源氏』<sup>(25)</sup>においても図様が一致しないのである。

ではなぜ『専大源氏画帖』においてこの二図が描かれているのであろうか。『十帖源氏』成立前後にはこの二図の挿絵が『十帖源氏』に存在していたのではないかという可能性が一つある。しかし、現在、万治四年（一六六



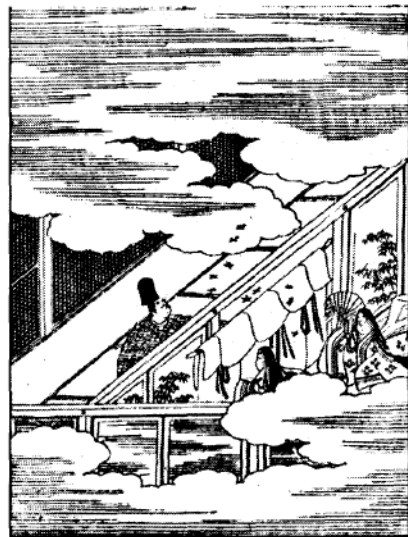
『専大源氏画帖』螢巻



東京都立中央図書館特別文庫室  
所蔵『源氏小鏡』螢巻  
無刊記須原屋版（江戸版中本）



愛知県立大学  
長久手キャンパス図書館蔵  
『源氏鬘鏡』蜚卷



『絵入源氏』蜚卷  
承応三年版

二) 版の跋文を持つ『十帖源氏』以外に版本はないため、その確証はない。

版本類を含め、現在確認できる源氏絵と比較検討してみると、井黒氏もすでに指摘しているが、『専大源氏画帖』蜚卷の図様は『源氏小鏡』と『源氏鬘鏡』の構図に近いといえる。春正の『絵入源氏』にも蜚火に照らされる玉鬘の場面絵は存在するが、図様が異なる。さらに、細かく見てみると、『専大源氏画帖』蜚卷は、『源氏小鏡』(無刊記江戸版中本)よりも、『源氏鬘鏡』(万治三年上方版)によく似ている。『専大源氏画帖』の蜚卷の絵の右上の御簾の下に描かれている高欄が『源氏鬘鏡』にはあり、『源氏小鏡』にはないからである。

『源氏鬘鏡』は、『源氏物語』の梗概書である『源氏小鏡』をさらに要約したもので、俳諧発句と絵を添えて解説したものである。『源氏鬘鏡』の蜚火の発句は「蜚火も蜚もひかる源氏かな」という立圃の発句である。『源

氏鬘鏡』は吉田氏によれば、大きく分類すると、上方版三種（万治三年版、天和三年版、正徳三年版）と江戸版二種（万治三年鱗形屋版（天和頃刊か）、元禄七年版）があるという。『専大源氏画帖』はこの中の上方版の万治三年版に近似している。吉田氏によれば、この万治三年上方版『源氏鬘鏡』の挿絵全五五図を盗用したものが『源氏小鏡』（無刊記須原屋版江戸版中本）であるという。

『源氏小鏡』は最も流布した『源氏物語』の梗概書であり、近世において、明暦三年版、延宝三年鶴屋版、須原屋江戸版、など多くの版本が存在している。しかし、『専大源氏画帖』の蜚巻は明暦三年版、延宝三年鶴屋版の図様には見られず、須原屋江戸版『源氏小鏡』にのみ見える構図である。つまり、吉田氏が指摘するように、須原屋江戸版『源氏小鏡』の挿絵はそれまで刊行された『源氏小鏡』ではなく、万治三年上方版『源氏鬘鏡』の絵をそのまま用いており、万治三年上方版『源氏鬘鏡』の江戸版である万治三年鱗形屋版『源氏鬘鏡』とはさらに障子の文様から衣裳の柄まで完全に一致するのである。

また、『<sup>(29)</sup>絵本年表』によれば、明暦三年（一六五七）の項に「源氏小鏡 大本三冊／画工不明／立圃風」や、正徳三年（一七一三）の項に「源氏鬘鏡 大本三巻／画工不明 立圃敷」とある。つまり、明暦三年版『源氏小鏡』や正徳三年版『源氏鬘鏡』の挿絵は画工不明としつつも、立圃ではないかと記録類に見えるのである。正徳三年版『源氏鬘鏡』の画工が立圃であるとすれば、正徳三年版『源氏鬘鏡』は万治三年上方版の『源氏鬘鏡』を再版したものであり、それに一番近い図様である『専大源氏画帖』蜚巻の図様は万治三年（一六六〇）以降に成立した『源氏鬘鏡』の図様を基に制作されたと考えられる。それは『十帖源氏』の成立時期（一六五四年成立、一六

六一年刊行)にも近い。つまり、両者の絵が錯綜したか、あるいは『源氏簪鏡』『源氏小鏡』の絵も立圍が書いたものであるとすれば、それが『専大源氏画帖』の挿絵に流用、または影響を与えた可能性は十分考えられることである。

では『専大源氏画帖』若菜下巻②の挿絵はどうであろうか。若菜下巻②は光源氏と女性四人(紫上、明石女御、明石君、女三宮)、箏の調弦をする夕霧の姿を描く女樂の場面である。女樂という図様は『豪華源氏絵』<sup>(30)</sup>によれば、藤岡家本扇面、久保惣本光吉画帖、個人蔵五十四帖屏風、御物探幽五十四帖、勝友源氏、清原雪信源氏画帖、サントリー本如慶画帖にみえる。これらの源氏絵と比較すると、『専大源氏画帖』の若菜下②の構図は、勝友源氏に



『専大源氏画帖』若菜下②巻

近いと考えられる。岩佐勝友についての詳細は不明であるが、その画風には風俗的な要素を持つ岩佐又兵衛様式が窺え、又兵衛派の絵師と言われている人物である。

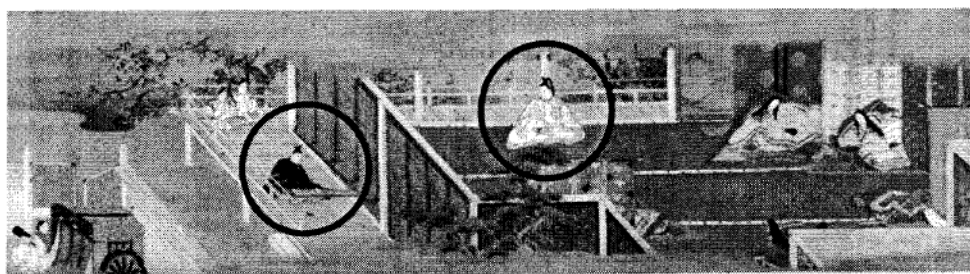
本章では、勝友源氏<sup>(31)</sup>(六曲一双(左隻)、一五五・二×三六四・〇糎、江戸時代前期)に加えて、同じく構図が近いと思われる早稲田大学図書館九曜文庫蔵『源氏物語絵巻』<sup>(32)</sup>(以下、「九曜文庫本」とする、若菜下巻の卷子本一軸、二七・四×四七一・〇糎、烏丸光雄詞・



土佐光成画、箱入り、古筆了信の極書、江戸初期、中野幸一氏旧蔵本）、個人蔵『源氏物語図屏風』<sup>(33)</sup>（以下、「個人蔵本」とする、六曲一双（右隻）、一五一・九×三五・二、二、江戸時代）と比較してみる。

九曜文庫本は、若菜下巻「正月二十日ばかりになれば、くなつかしき夜の御遊びなり。」（『源氏物語』四一―一八五―一九一頁）の本文を書き写し、最後に絵を配置した巻物仕立てである。九曜文庫本の本文部分と『専大源氏画帖』の若菜下②の詞書との一致は見い出せないが、図様は光源氏や夕霧の配置などが似ていると思われる。『源氏物語』本文に即した九曜文庫本の絵を、さらにより時間的に長く描いたものが『専大源氏画帖』若菜下②の絵であると思われる。

特に『専大源氏画帖』若菜下②において特徴的なのは女性たち四人の配置である。絵の右斜め上、脇息にもたれ掛かる明石の女御と、琵琶の前に座る実母の明石の御方の二人を並べて描いているのは珍しい構図である。源氏絵において、女樂の場面はたいいてい女性三人（紫上、明石の女御、女三宮）を並べ、その向かい側に琵琶を弾く明石の御方という構図で描かれることが多い。版本『絵入源氏』（承応三年版）においても、若菜下巻には女樂の絵があるが、やはり三人と一人の構図で女性が描かれている。しかし、『専大源氏画帖』若菜下②は女



早稲田大学図書館所蔵九曜文庫『源氏物語絵巻』若菜下巻

性が二人ずつ向かい合わせで描かれているのである。

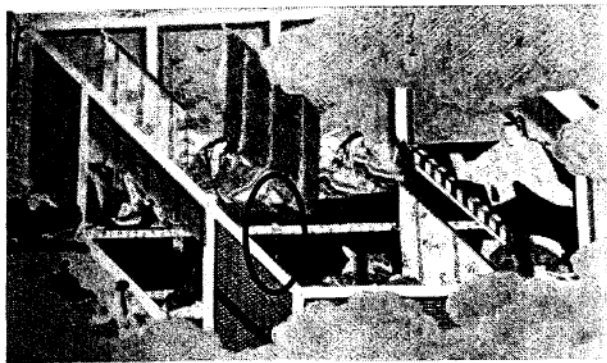
これと同じような構図が勝友源氏にみえる。女性が二人ずつ向かい合わせで描かれ、絵の上方にいる二人の女性の前にはそれぞれ琴が置かれ、下方にいる一人の女性の前には琵琶が置かれている。おそらく下方の女性は明石の御方であろう。その隣に描かれている女性が、脇息は見えないものの明石の女御の可能性は高い。

また、個人蔵本では絵の中央に灯をともし童の姿がみえ、『専大源氏画帖』の女童が灯をともし姿と共通している。勝友源氏においても、童の姿はなにもものの、絵の中央に灯火がはつきりと描かれている。

このように、『専大源氏画帖』若菜下②は、帝の後である明石の女御とその実母である明石の御方を中心として描き、女性たちの合奏、夕霧の調弦、

暗くなってきたので灯をともし女童、という時間的・空間的に長い一連の物語の本文を一つの画面に忠実に集約して描こうとする独自の構成方法が垣間見えるのである。

さらに、『専大源氏画帖』若菜下卷②の女楽の場面に描かれた「琴」は、武家の女性の嗜みとして必要不可欠なものであり、嫁入道具の一つとして然るべきものであったと考えられる。また、『専大源氏画帖』は図様が板敷ではなく、畳敷を示す緑色で塗られて<sup>34</sup>いる。平安時代の寝殿造ではなく、武家の書院造の建築様式で描かれている



出光美術館蔵『源氏物語図屏風』若菜下巻

『十帖源氏』の挿絵が、『専大源氏画帖』の極彩色によってより明確化している。江戸時代初期、武家社会の嫁入り道具の一つとして源氏絵が好まれ、それに男性の絵が多く描かれるのは社会的な家の権威を示すためであることがすでに指摘されている。<sup>(35)</sup>『専大源氏画帖』にも六十図中、二十五図に儀式的な場面や男性の登場人物だけを描く場面が選ばれており、当時の流行が垣間見える。つまり、『専大源氏画帖』からは華麗さや祝事の要素が垣間見えるのである。『専大源氏画帖』は堂上公家の詞書を持つ武家のお興入れの際の祝いの品の一つであったと考えられ、『十帖源氏』(一六五四年成立、一六六一年刊行)・万治三年(一六六〇)上方版『源氏鬘鏡』が成立・刊行された時期以降に制作された可能性が高いのである。

## 五 おわりに

以上、『専大源氏画帖』の絵における俳画師立圃の影響から、江戸初期の源氏絵享受について考察した。

『専大源氏画帖』は、『源氏物語』の代表的な場面を描いたもので、差し替えの行われた巻が散見するものの、ほぼ『十帖源氏』の挿絵が踏襲されたものといつてよいであろう。

立圃は、貞門の俳諧師としてだけでなく、俳画師としても知名度のあったことが窺える。現存する世俗にくだわらない悠然とした生き様をも垣間見せる草画の書きぶりは、俳画を極めた立圃の技量を偲ばせる。その代表的な作品が『十帖源氏』なのである。そして、立圃の躍動感あふれる『十帖源氏』の挿絵が『専大源氏画帖』に

そのまま踏襲されている。立圃の画系は不明であるが、その画風は鳳林承章と交流していた狩野派の流れを組む岩佐派かと思わせる。立圃独自の『十帖源氏』の挿絵を基に、極彩色豊かに描かれていることが『専大源氏画帖』の源氏絵の特色であるといえる。

『専大源氏画帖』蛩・若菜下巻②の二つの絵については、『十帖源氏』に挿絵がないものの、蛩巻は蛩火に照らされる玉鬘の場面、若菜下巻②は女樂の場面である。蛩巻の図様は万治三年上方版『源氏鬘鏡』・須原屋版『源氏小鏡』（無刊記江戸版中本）の図様に近く、若菜下巻②は九曜文庫本、個人蔵本、勝友源氏の構図と近似している。『源氏鬘鏡』『源氏小鏡』（無刊記江戸版大判）、九曜文庫本、個人蔵本、勝友源氏、いずれも江戸時代初期に成立した作品群である。つまり、『専大源氏画帖』の成立は、『十帖源氏』や『源氏鬘鏡』が成立した一六六一年以降に制作された可能性が考えられる。

若菜下巻②は女樂の場面を描き、『十帖源氏』挿絵にはない『専大源氏画帖』独自の図様である。女樂に描かれる「琴」や「箏の琴」は武家の女性の嗜みとして必要不可欠なものである。ちなみに第一章で指摘した『専大源氏画帖』制作意図に深く関わると思われる水野家の拠点・福山藩は「福山琴」の発祥地でもある。詳細は不明であるが、その歴史は初代藩主水野勝成が築城した元和五年（一六一九）頃に始まったと言われている。つまり、「琴」は嫁入道具の一つとして水野家にとっても然るべきものであり、『源氏物語』若菜下②の女樂の絵は重要な場面であったのではないかと考えられる。

『専大源氏画帖』の絵は武家様式であり、祝事や権威を示そうとする近世初期源氏絵の特徴が見て取れる。『専

『大源氏画帖』は、堂上公家の詞書を持つ武家のお輿入れの際の祝いの品の一つであったと考えられる。俳画師立圃の絵と堂上公家の詞書という珍しい組み合わせの源氏絵は、江戸時代初期の『源氏物語』享受の実情を示す貴重な作品の一つであるといえる。

#### 注

(1) 専修大学図書館所蔵『源氏物語画帖』(A/九一三・三/MU五六)。

(2) 井黒佳穂子氏「テキストとイメージから追う物語性の構築―絵巻から浮世絵まで―」(専修大学大学院博士學位論文(二〇一三年三月))。

(3) 『絵入源氏』に関しては、吉田幸一氏「I 『繪入源氏物語』考」、『繪入本源氏物語考』上、日本書誌学大系五三(一)、青裳堂書店、一九八七年、九〇―一九三頁)に詳しい。

(4) 専修大学図書館所蔵『十帖源氏』(A/九一三・三/N九五)に拠る。以下、同じ。

(5) 吉田幸一氏「II 『十帖源氏』考」、『繪入本源氏物語考』上、日本書誌学大系五三(一)、青裳堂書店、一九八七年、一九四―二四四頁)。

(6) 注(3)の著書の中で、吉田氏は立圃の没年を一六六九年としている(一九四頁)。『浮世絵師伝』(渡辺版書店、一九三二年、二二二頁)によれば、「慶長四年(一五九九)」であり、各書で見解が異なる。本章では

米谷巖氏「野々口立圃年譜」『十帖源氏下』古典文庫第五一二冊、古典文庫、一九八九年）に従い、一六七〇年としておく。

(7) 注(6)『浮世絵師伝』に同じ(二二一～二二二頁)。

(8) 『日本絵画論大系』二(名著普及会、一九八〇年、五一六頁)。

(9) 安田篤生氏「江戸時代における光琳<sup>イメー</sup>像の変遷について(下―三)―酒井抱一(二)―」『愛知教育大学研究報告』第六一号、二〇一二年三月、九五頁)を参照した。安田氏によれば、大岡春卜編『画本手鑑』は大坂府立中之島図書館蔵享保五年刊本に拠るといふ。

(10) 早稲田大学図書館所蔵『十二枝句合』(請求記号…へ五―六〇九八)に拠る。寛文六年(一六六六)成立、立圃自筆、一巻、縦二五・二糎、横三四二・五糎。巻軸には十二支が方位の形に丸く彫り込まれ、瓢箪型の入れ物に収められている。横山重氏(赤木文庫)旧蔵である。早稲田大学図書館所蔵「古典籍総合データベース」(<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>)を参照した。

(11) 『俳諧家譜』(『日本俳書大系』十五巻、日本俳書大系刊行会、一九二七年、八二頁)。

(12) 木村三四吾氏「野々口立圃」『俳句講座2』俳人評伝上、明治書院、一九五八年、一一三～一二五頁)。

(13) 石川真弘氏「立圃の書画幅について」『俳画の流れ立圃から芭蕉へ』(福山城博物館、一九九五年、七一頁)。

(14) 安田篤生氏「江戸時代における光琳<sup>イメー</sup>像の変遷について(下―三)―酒井抱一(二)―」『愛知教育大学研

究報告』第六一号、二〇一二年三月、九四頁。

(15) 『隔蓑記』の本文引用は、赤松俊秀校注編『隔蓑記』（思文閣出版、一九九七年）に拠る。

(16) 小高敏郎氏「貞門時代における俳諧の階層的浸透」（『国語と国文学』貞門・談林の俳諧特輯号、一九五七年四月）。藪家に関しては『系図纂要』新版、第二冊下、藤原氏（2）（名著出版、一九九〇年、六〇八頁）、

『国史大辞典』第十四卷、（吉川弘文館、一九九三年、一〇三頁）を参照した。

(17) 注（2）に同じ。

(18) 清水婦久子氏『源氏物語版本の研究』（和泉書院、二〇〇三年、四五二頁）。

(19) 注（3）の吉田氏論（二三七～二三八頁）、清水婦久子氏『十帖源氏』『おさな源氏』の本文——歌書としての版本——（『文学』第四卷・第四号、二〇〇三年七月、一〇四～一〇六頁）。

(20) 山本陽子氏「源氏絵における天皇の描き方——近世初期の天皇表現の伝承について——」（『日本宗教文化史研究』第四卷第一号、日本宗教文化史学会、二〇〇〇年）。

(21) 阿美古理恵氏「源氏絵の世俗化——伝菱川師宣画『おさな源氏』の成立背景——」（『学習院大学人文科学論集』第一七号、二〇〇八年）。

(22) 岩佐勝友筆『源氏物語図屏風』（出光美術館所蔵）に拠る。『勝友源氏』真木柱巻の絵は、「七九・八〇『源氏物語図』縦一五六・〇糎、横三六六・〇糎」（日本屏風絵集成・第五巻・人物画『大和絵系人物』講談社、一九七九年、六八～六九頁）、【3】岩佐勝友画『源氏物語図屏風』（国文学研究資料館編『源氏物語 千

年のかがやき』(思文閣出版、二〇〇八年、七八〜七九頁)、「巻頭カラー折り込み、『源氏物語図屏風』左隻・

若菜下 岩佐勝友 縦一五五・二糧、横三六四・〇糧 江戸時代前期」『週刊絵巻で楽しむ源氏物語』四十

二帖匂兵部卿、四五号、二〇一二年十一月、二〇四頁)を参照した。

(23) 京都国立博物館所蔵『源氏物語画帖』(勉誠社、一九九七年)。

(24) 北の方が実際に火取(香炉)ではなく、灰を浴びせかけている絵には『源氏物語歌絵扇面画帖』真木柱巻

(伝住吉如慶筆、江戸前期、チェスター・ビーティー・ライブラリ蔵)や『源氏物語画帖』真木柱巻(土

佐光信筆、室町後期、ハーバード大学サックラー美術館蔵 Arthur M. Sackler Museum, Harvard University

Art Museums) 等がある。

(25) 専修大学図書館蔵『絵入源氏物語』(請求記号…A/九一三・三/MU五六)に拠る。『絵入源氏』(承応三年版大本・第一〇五図蛸①六才)(吉田幸一氏『絵入本源氏物語考』中、図録一、日本書誌学大系五三(二)、青裳堂書店、一九八七年、一一三頁)も参照した。

(26) 『源氏小鏡』(無刊記須原屋版、江戸版中本、第二五図・蛸・中八ウ)は吉田幸一氏『日本書誌学大系五三(三) 絵入本源氏物語考』下、図録二(青裳堂書店、一九八七年、五三二頁)に拠る。吉田氏掲載の『源氏小鏡』(江戸版中本)は東京都立中央図書館特別文庫室所蔵の加賀文庫本(三卷三冊本)であり、一六八〜一六八七年頃成立とされ、画風は菱川師宣風であるという。

(27) 『源氏鬘鏡』(万治三年上方版)は、『源氏鬘鏡』(万治三年度々市兵衛刊、大二本)、『批評集成・源氏物語』



第一卷近世前期篇、ゆまに書房、一九九九年、七一頁）に拠る。『批評集成・源氏物語』掲載の『源氏簪鏡』は愛知県立大学長久手キャンパス図書館蔵本である。『源氏簪鏡』の解説は『古典俳文学大系一 貞門俳諧集一』（集英社、一九七〇年、四九三頁）を参照した。

(28) 吉田幸一氏「江戸版中本の挿絵と萬治版『源氏簪鏡』との関係」（『日本書誌学大系五三（一）絵入本源氏物語考』上（青裳堂書店、一九八七年、三六六～三九二頁）。

(29) 『絵本年表』一（日本書誌学大系三四（一）、青裳堂書店、一九八三年、五四・二五五頁）。

(30) 「女楽」の図様に関しては、秋山虔氏・田口榮一氏監修『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語』（学習研究社、一九九九年）の他、『江戸のやまと絵―住吉如慶・具慶― 展示図録』（サントリー美術館・一九八五年）、榎原悟氏「住吉派『源氏絵』解題―附諸本詞書―」の「源氏絵帖別場面一覧」（『サントリー美術館論集』第三号・サントリー美術館・一九八九年、一二五～一四五頁）、高橋亨氏「近世初期「源氏絵」と詞書筆者について」（『中古文学』第八四号、二〇〇九年十二月）を参照した。

(31) 岩佐勝友筆『源氏物語図屏風』出光美術館蔵に拠る。『勝友源氏』の若菜下の絵は、日本屏風絵集成・第五巻・人物画『大和絵系人物』（講談社、一九七九年、六八～六九頁）に掲載された「七九・八〇『源氏物語図』（縦一五六・〇糎、横三六六・〇糎）、「源氏物語図屏風」左隻・若菜下 岩佐勝友 縦一五五・二糎、横三六四・〇糎 江戸時代前期」（『週刊絵巻で楽しむ源氏物語』三十五帖若菜下①、三六号、二〇一二年九月、二三頁）、「巻頭カラー折り込み、「源氏物語図屏風」左隻・若菜下 岩佐勝友 縦一五五・二糎、横三

六四・〇糧 江戸時代前期」『週刊絵巻で楽しむ源氏物語』四十二帖匂兵部卿、四五号、二〇一二年十一月、二～四頁）、【3】岩佐勝友画『源氏物語図屏風』（国文学研究資料館編『源氏物語 千年のかがやき』（思文閣出版、二〇〇八年、七八～七九頁）を参照した。『源氏物語 千年のかがやき』によれば、『勝友源氏』は右隻に桐壺巻から篝火巻までを、左隻に野分巻から夢浮橋巻までの全五四帖を絵画化したものであるという。表具内部に岩佐勝友の署名・印章が隠れており、井田太郎氏の解説によれば、「図様も、又兵衛後期の作成とおなじく風俗的な要素が観察される。京都国立博物館蔵土佐光吉画『源氏物語画帖』と同様の構成に抛りながらも、過剰なアクチュアリティを画面に加え、定型パターンを逸脱している点が指摘できる」とある（『源氏物語 千年のかがやき』七八頁）。

（32）早稲田大学図書館所蔵『源氏物語絵巻』若菜下〔請求記号…文庫三〇／B〇四二二〕。早稲田大学古典籍総合データベースを参照した。

（33）個人蔵『源氏物語図屏風』に拠る。宇治市歴史資料館特別展パンフレットの書誌・解説によれば、「一隻の上下に場面ずつ、合計十二場面を配した屏風。場面は朝顔・空蟬・夕霧・花散里・若菜下などで、金雲で自然に区画されている。人物の表現も巧み且つ豊かで、樹木の表現などに江戸時代初期の狩野派の筆法がうかがえるが、画中画として描かれている草木には水墨画の手法がみられ、大和絵のみでなく水墨画の素養もある人物により描かれたことが推測できる」とある（二九 源氏物語図屏風」『特別展 源氏物語の世界―王朝文化への憧憬―』宇治市歴史資料館、一九九一年、三六・三七、七八頁）。

(34) 清水婦久子氏『源氏物語版本の研究』(和泉書院、二〇〇三年、四三八～四四八頁)。清水氏は『十帖源氏』の建物や調度品は「武家屋敷」の様子で描かれていて、「立圃の関心は、源氏物語の風俗ではなく登場人物にあった」ため、表情や動作を個性的に描こうとする「俳優的描法」をとっていると指摘する。

(35) 岩坪健氏「源氏絵に描かれた男女の比率について——土佐派を中心に——」(古代文学論叢十六号『源氏物語とその享受 研究と資料』武蔵野書院、二〇〇五年、三三頁)。岩坪氏によれば、「源氏絵の注文主は江戸時代になっても、文献で見える限り男性である」とし、江戸時代に源氏絵や詞書筆者を「男性が独占するのは、注文主が男性であり、伝統文化の象徴である朝廷と密接に関わるからと推測される」と指摘している。

第三章 立圃作『十帖源氏』の本文構造

## 一 はじめに

本章では、『源氏物語』の梗概書である『十帖源氏』の本文について検証し、立圃の制作意図について考えてみたい。

『十帖源氏<sup>(1)</sup>』は、俳諧師である野々口立圃によって江戸時代に作られた『源氏物語』の梗概書である。『源氏物語』五十四帖を十巻十冊にまとめたものである。跋文に「老て二たび児に成たりといふにや」とあり、これが著者の還暦を示すならば、立圃が六〇歳の承応三年（一六五四）頃の成立であるという。巻頭に「光源氏物語」の由来を説き、紫式部の石山寺参籠や巻々の名には天台四諦の法門を盛ったことを述べて序文とし、桐壺から夢浮橋巻までを巻ごとに分けて、所々に引用を交えながら、原作の和歌を全て掲出し、本文を簡略的にまとめている。第三篇の序章・第一・二章でもすでに述べているように、立圃は俳・画の両面に秀でており、『十帖源氏』には立圃の自画一三一図の挿絵が添えられている。寛文六年（一六六六）には、『十帖源氏』を簡略化した『おさな源氏』が出版されている。

清水婦久子氏<sup>(2)</sup>は、『十帖源氏』の本文は、寛永正保頃（一六四〇～一六四八）に刊行された無跋無刊記本『源氏物語』に拠るものと述べている。今西祐一郎氏<sup>(3)</sup>によれば、無跋無刊記本『源氏物語』は一部識者の間で「素（す）源氏」と称されていたもので、柱刻や丁付けもなく、注釈や挿絵、刊記や付録もない、物語本文だけを刻

した製版本のことを指すという。清水氏は、『絵入源氏』や『湖月抄』などの河内本系統の本文を含む流布本とは異なり、三条西家系統の本文を受け継ぎ、版本『万水一露』に近似している無跋無刊記本『源氏物語』を傍らに置いて、立圃はダイジェスト版を作成していたと推定している。湯浅佳子氏は、『十帖源氏』は『源氏物語』本文を比較的丁寧<sup>(4)</sup>に抽出し、平易な言葉に替えていると指摘する。中西健治氏は、立圃がこれ<sup>(5)</sup>と思う本文を単に摘録したのではなく、松永貞徳門下の重鎮として、原作の叙情的な場面を絵と共に簡潔平易に提供しようとしたのだと論じている。

『十帖源氏』本文の要約方法には立圃のどのような制作意図があったのか。本章では、先行の論をふまえつつ、無跋無刊記本『源氏物語』と、それに依拠したと思われる『十帖源氏』の本文とを比較検討し、『源氏物語』を独自に抽出・改変した『十帖源氏』の本文の様相に迫ってみたい。

## 二 歌物語としての『十帖源氏』

『十帖源氏』の具体的な本文の比較を行う前に、『十帖源氏』を体系的な側面から見ておきたい。清水氏<sup>(6)</sup>によれば、『絵入源氏』に比べて『十帖源氏』は和歌の率が圧倒的に多く、『源氏物語』中の和歌をすべて網羅して掲載していることから、歌物語的な要素が強いと指摘する。そこで、『十帖源氏』の和歌の比率を提示するために次表を作成した。参考として、『十帖源氏』の和歌で終わる巻には「〇」印を、『源氏物語大成』の本文行数、『源氏

物語大成』と『十帖源氏』の本文比率も掲げた。

これによると、『十帖源氏』の和歌の比率が高い上位五位は幻巻五四・七％、須磨巻四九％、賢木巻四七・五％、花散里巻四四・四％、早蕨巻四一・一％の順となっている。逆に和歌の比率が低い上位五位は夢浮橋巻二・三％、句宮巻五・三％、空蟬巻六・七％、野分巻十一・一％、蜻蛉巻十一・八％の順となっている。『十帖源氏』の和歌

|    | 巻名<br>一覧 | 大成<br>本文行数 | 十帖源氏<br>本文行数 | 十帖源氏<br>和歌行数 | 十帖源氏<br>和歌比率 | 十帖源氏<br>和歌終巻 | 『大成』十帖<br>本文比率 |
|----|----------|------------|--------------|--------------|--------------|--------------|----------------|
| 1  | 桐壺       | 328        | 126          | 18           | 14.3%        |              | 38.4%          |
| 2  | 帯木       | 617        | 287          | 28           | 9.8%         |              | 46.5%          |
| 3  | 空蟬       | 145        | 60           | 4            | 6.7%         | ○            | 41.4%          |
| 4  | 夕顔       | 636        | 272          | 38           | 14.0%        | ○            | 42.8%          |
| 5  | 若紫       | 628        | 147          | 50           | 34.0%        | ○            | 23.4%          |
| 6  | 末摘花      | 419        | 92           | 28           | 30.4%        | ○            | 22.0%          |
| 7  | 紅葉賀      | 368        | 97           | 34           | 35.1%        | ○            | 26.4%          |
| 8  | 花宴       | 139        | 45           | 16           | 35.6%        | ○            | 32.4%          |
| 9  | 葵        | 615        | 133          | 48           | 36.1%        | ○            | 21.6%          |
| 10 | 賢木       | 653        | 139          | 66           | 47.5%        |              | 21.3%          |
| 11 | 花散里      | 55         | 18           | 8            | 44.4%        | ○            | 32.7%          |
| 12 | 須磨       | 583        | 196          | 96           | 49.0%        |              | 33.6%          |
| 13 | 明石       | 522        | 167          | 60           | 35.9%        |              | 32.0%          |
| 14 | 滑標       | 436        | 97           | 34           | 35.1%        |              | 22.2%          |
| 15 | 蓬生       | 310        | 63           | 12           | 19.0%        |              | 20.3%          |
| 16 | 関屋       | 64         | 26           | 6            | 23.1%        |              | 40.6%          |
| 17 | 絵合       | 248        | 63           | 18           | 28.6%        |              | 25.4%          |
| 18 | 松風       | 280        | 87           | 32           | 36.8%        |              | 31.1%          |
| 19 | 薄雲       | 402        | 104          | 20           | 19.2%        | ○            | 25.9%          |
| 20 | 朝顔       | 275        | 92           | 26           | 28.3%        | ○            | 33.5%          |
| 21 | 少女       | 668        | 199          | 32           | 16.1%        |              | 29.8%          |
| 22 | 玉簫       | 534        | 108          | 26           | 24.1%        |              | 20.2%          |
| 23 | 初音       | 192        | 48           | 12           | 25.0%        |              | 25.0%          |
| 24 | 胡蝶       | 277        | 82           | 28           | 34.1%        |              | 29.6%          |
| 25 | 螢        | 256        | 73           | 16           | 21.9%        |              | 28.5%          |
| 26 | 常夏       | 290        | 49           | 8            | 16.3%        |              | 16.9%          |
| 27 | 篝火       | 46         | 18           | 4            | 22.2%        |              | 39.1%          |
| 28 | 野分       | 238        | 72           | 8            | 11.1%        |              | 30.3%          |
| 29 | 行幸       | 368        | 82           | 18           | 22.0%        |              | 22.3%          |
| 30 | 藤袴       | 188        | 44           | 16           | 36.4%        | ○            | 23.4%          |
| 31 | 真木柱      | 490        | 137          | 42           | 30.7%        | ○            | 28.0%          |
| 32 | 梅枝       | 248        | 83           | 22           | 26.5%        | ○            | 33.5%          |
| 33 | 藤裏葉      | 309        | 134          | 40           | 29.9%        |              | 43.4%          |
| 34 | 若菜上      | 1341       | 296          | 48           | 16.2%        | ○            | 22.1%          |
| 35 | 若菜下      | 1348       | 273          | 36           | 13.2%        |              | 20.3%          |
| 36 | 柏木       | 532        | 117          | 22           | 18.8%        |              | 22.0%          |
| 37 | 横笛       | 242        | 63           | 16           | 25.4%        |              | 26.0%          |
| 38 | 鈴虫       | 189        | 56           | 12           | 21.4%        |              | 29.6%          |
| 39 | 夕霧       | 938        | 228          | 52           | 22.8%        | ○            | 24.3%          |
| 40 | 御法       | 249        | 70           | 24           | 34.3%        |              | 28.1%          |
| 41 | 幻        | 288        | 95           | 52           | 54.7%        | ○            | 33.0%          |
| 42 | 句宮       | 177        | 38           | 2            | 5.3%         |              | 21.5%          |
| 43 | 紅梅       | 166        | 56           | 8            | 14.3%        |              | 33.7%          |
| 44 | 竹河       | 538        | 167          | 48           | 28.7%        |              | 31.0%          |
| 45 | 橘姫       | 499        | 163          | 26           | 16.0%        |              | 32.7%          |
| 46 | 椎本       | 489        | 167          | 42           | 25.1%        |              | 34.2%          |
| 47 | 総角       | 1170       | 315          | 62           | 19.7%        |              | 26.9%          |
| 48 | 早蕨       | 246        | 73           | 30           | 41.1%        |              | 29.7%          |
| 49 | 宿木       | 1220       | 300          | 46           | 15.3%        | ○            | 24.6%          |
| 50 | 東屋       | 839        | 164          | 22           | 13.4%        | ○            | 19.5%          |
| 51 | 浮舟       | 936        | 307          | 44           | 14.3%        |              | 32.8%          |
| 52 | 蜻蛉       | 747        | 186          | 22           | 11.8%        | ○            | 24.9%          |
| 53 | 手習       | 863        | 321          | 56           | 17.4%        |              | 37.2%          |
| 54 | 夢浮橋      | 222        | 86           | 2            | 2.3%         |              | 38.7%          |
|    | 総計       | 25066      | 6981         | 1586         | 22.7%        | 19           | 27.9%          |
|    | 平均値      | 464        | 129          | 29           | 24.6%        |              | 29.2%          |

行数の平均値は二九行であり、和歌比率の平均値は二四・六％である。この和歌の平均比率に近いのは、初音巻二五％、玉鬘巻二四・一％、横笛巻二五・四％、閑屋巻二三・一％である。

ここで注目すべきは、花散里巻と閑屋巻の本文行数と和歌行数の差異である。花散里巻は『十帖源氏』の本文行数が十八行で和歌が四首であり、閑屋巻は『十帖源氏』の本文行数が二十六行で和歌が三首である。花散里巻は一首につき本文が四・五行であるのに対して、閑屋巻は一首につき八・六行の本文行数となっているのである。つまり、和歌数はほぼ同じくらいであるにもかかわらず、本文行数は閑屋巻の方が花散里巻の二倍の量であるということである。この差は一体何であるのか。表にある通り、五十四巻中、和歌で終わる巻が十九巻である。これは『十帖源氏』の約三分の一に当たる。『源氏物語』中の和歌をすべて取り込んだ『十帖源氏』において、本文の長短の差は何を意味するのであろうか。以下、具体的に本文にあたることによって検証してみたい。

### 三 『十帖源氏』花散里巻

前節をふまえてまず、花散里巻の本文の様相を探ってみる。現存する『十帖源氏』は、大きく四種<sup>(7)</sup>に分類されている。

- (1) 万治四年（一六六二）荒木利兵衛版（跋文あり、刊記あり）
- (2) 万治四年立圃自跋本（跋文あり、刊記欠）



(3) 立圃自跋無刊記本（署名のみあり、刊記欠）

(4) 無跋無刊記本（跋文・刊記欠）

吉田幸一<sup>(8)</sup>氏によると、(1)(2)は後摺であり、跋文が改変されていると指摘する。初版本は(3)(4)ということになるが、(3)が先に出版されたとすれば、その署名のみの跋文が(4)の版行にないのはおかしいことになるという。さらに、(4)は装丁においても、表紙は装飾的であり、本文料紙は丈夫で障子紙などによく用いられる楮を用い、長く保存のきく美しいものが用いられていることから、吉田氏は(4)を初版本と推定している。つまり、(4)(3)(1)(2)の順に版次されたと想定しているのである。そこで本章においても、『十帖源氏』は(4)の無跋無刊記本を採用する<sup>(9)</sup>。

では以下に、『十帖源氏』の本文の基盤となったとされる無跋無刊記本『源氏物語』と『十帖源氏』の花散里巻の翻刻本文を掲げ、比較検討してみる。

【無跋無刊記本『源氏物語』「花散里」<sup>(10)</sup>の翻刻】

\* 改行

\* 改頁

\* 【一】『十帖源氏』の省略箇所の冒頭部分を示した通し番号

\* 後筆の朱書き入れ傍記は省略した。

人知れぬ御心つからのものおもはしきはいつとな【A】  
きことなめれとかく大かたの世につけてさへわつ  
らはしうおほしみたるゝ事のみまされは物心  
ほそく世中なへていとはしうおほしならるゝに  
さすかなる事おほかりれいいてんと聞えしは  
宮たちもおはせず院かくれさせ給てのちいよ／＼  
あはれなる御有さまをたゝこの大將殿の御心に  
もてかくされて過し給ふなるへし御おとうとの【2】  
三の君うちわたりにてはかなうほのめき給し  
なこりのれいの御心なれはさすがに忘れもはて給  
はすわさとももてなし給はぬに人の御心をのみ【B】  
つくしはて給ふへかめるをもこのころのこる事な  
くおほしみたるゝよの哀のくさはひには思ひいて  
給ふにしのひかたくてさみたれの空めつらしう  
はれたる雲まにわたりたまふなにはかりの御よ  
そひなくうちやつし御前などもなくしのひてな

か川のほとおはしするにさゝやかなるいへのこた【4】  
ちなとよしはめるによくなることをあつまに【C】  
しらへてかきあはせにきはしうひきなすなり  
御みゝとまりてかとちかなる所なれはすこしきし  
出て見いたまへれはおほきなるかつらの木の  
をひ風にまつりのころおほしいてられてそこ  
はかとなくけはひおかしきをたゝ一め見給しやと  
りなりと見給ふたゝならすほとへにけるおほめかし  
くやとつゝましけれとすきかてにやすらひ給  
おりしも郭公なきてわたるもよほしきこえか  
ほなれは御車をしかへさせてれいのこれみつい  
れ給ふ  
をちかへりえそしのはれぬほとゝきすほのかた  
らひしやとのかきねにしん殿とおほしきやのにし【D】  
のつまに人々ゐたりさき／＼もきゝし声なれは  
こはつくりけしきとりて御せうそこ聞ゆわかや

かなるけしきとしておほめくなるへし』

ほととぎすかたらふこそゑはそれなれとあなお

ほつかな五月雨の空ことさらにたとるとみればよし／＼【E】

うへしかきねもとていつるを人しれぬころにはね

たうも哀にも思ひけりさもつゝむへき事そかしこと

はりにもあれはさすか也かやうのきはつくしの

五節からうたけなりしはやとまつおほしいつい

かなるにつけても御心のいとまなくくるしけなり

年月をへてなをかやうに見しあたりなさけす

くし給はぬにしもなか／＼あまたの人のもの思

ひくさなりかのほいの所はおほしやりつるものしく

人めなくしつかにておはするありさまを見た

まふもいと哀なりまつ女御の御かたにてむかしの【6】

物語など聞え給に夜ふけにけり廿日の月さ

しいつる程にいと木たかきかけともこくらうみえ

わたりてちかきたち花のかほりなつかしう匂ひて

女御の御けはひねひにたれとあくまでよういあ【F】

りてあてにらうたけなりすくれてはなやかなる

御おほえこそなかりしかとむつまじうなつかしき

かたにはおほしたりしものをなと思ひ出きこえ給に

つけてもむかしのことかきつらねおほされてうちな

き給ふ郭公有つるかきねのにやおなしこそゑに

うちなくしたひきにけるよとおほさるゝほともえん

なりかしいかにしりてかなとしのひやかに打すん

し給ふ

たちはなの香をなつかしみほととぎす花ちる

里をたつねてそとふいにしへの忘れかたきなくさめ

にはまつまいり侍りぬへかりけりこよなうこそま

きるゝ事も数そふことも侍けれおほかたのよにし

たかふ物なれば昔かたりもかきくつすへきひとす【G】

くなくなりゆくをましていかにつれ／＼もまきれ

なくおほさるらんと聞え給ふにいとさらなる世

なれものをいとあはれにおほしつゝけたる御けしきのあさからぬも人の御さまからにやおほく』  
哀そそひにける」

人めなくあれたるやとはたち花のはなこそ軒のつまとなりけれとはかりの給へるさはいへと人

にはいことなりけりとおほしくらへらる西おもて【H】

にはわさとなくしのひやかにうちふるまひ給ての

そき給へるもめつらしきにそへてよにめなれぬ御さ

まなれはつらさも忘ぬへしなにやかやとれいのな

【『十帖源氏』卷三「花散里」の翻刻】

\* 「 改行

\* 』 改頁

\* 〈 傍記・割注など（／は改行）

\* 【 改変・補足部分の通し番号

つかしくかたらひ給もおほさぬことにはあらさるへ」

しかりにもみ給ふかきりはをしなへてのきはには」

あらねはにやさま／＼につけていふかひなしとおほ

さるゝはなければにやにくけなくわれも人もなさけ』

をかはしつゝ過し給ふなりけりそれをあひなしと

思ふ人はとかくにかはるもことはりなる世のさかとお

もひなしたまふありつるかきねもさやうにてあ

りさまかはりにたるあたりなりけり」

花散里 以歌名也 源廿四才【1】

れいけいてん（れ傍＝桐壺の女御）は宮たちもおはせず院かくれ給て後」

源にもてかくされて過し給ふ御いもうとの三の君【2】

（割・花ちる／里也）はかなうほのめき給しなこり源忘れ給は

す【3】

五月雨の空めつらしう晴たるにわたり給ふ中川の

程過給ふに小家の木だちよしばめるにあつまにしらへ【4】

てかきならず御みゝとまりて御車かへさせ惟光いれ給ふ」

（源）をちかへりえぞしはれぬ郭公【5】

ほのかたらひしやとのかきねに」

（返し）ほとゝきすかたらふこゑはそれなれと」

あなおほつかなさみたれのそら」

彼ほゐの所は人めなくしつかにて物哀也【6】

まつ女御の御かたにて昔物語聞え給ひ廿日」

の月さし出る程に時鳥ありつるかきねのに」

やおなし聲にうちなく 源」

たちはなのかをなつかしみほとゝきす」

花ちるさとをたつねてそとふ」

（女御）人めなくあれたるやとはたちはなの」

はなこそ軒のつまとなりけれ」

（絵1）麗景殿女御邸にて、光源氏が花散里を訪れる場面

無跋無刊記本『源氏物語』翻刻本文に付した【A】、【H】は、『十帖源氏』において省略された本文箇所を、『十帖源氏』翻刻本文に付した【1】、【6】は、無跋無刊記本『源氏物語』本文（以下、「無跋無刊記本」とする）と『十帖源氏』本文の共通する箇所を指し示している。以下、指摘する箇所には四角囲いを施した。

【1】の『十帖源氏』『花散里 以歌名也 源廿四才』という巻名の説明は、『十帖源氏』全体において一貫した書式形式である。『花鳥余情』の「以歌為巻名さかきの末は源氏廿四歳の夏也」や『弄花抄』の「巻名哥によりて号す／此巻は源氏廿四歳夏五月の事也」や『細流抄』の「巻名一哥によりて号する也 源氏廿四歳の五月の事也」に近い表現方法である。光源氏の年齢が二四歳と明確に示されていて、読者にとっては大変わかりやすい構成である。

【2】の『十帖源氏』『御いもうと』は、無跋無刊記本では「御おとうと」とある。「おとうと」は兄弟のうち、年少の者、もとは男女ともに用いたが、次第に男性の場合に限られるようになり、また、義理の弟や異腹の弟にも用いられるようになる。よって、花散里に対して用いることに差し障りはない。しかし、立圃は「おとうと」に「いもうと」と傍記するのではなく、本行本文自体を「いもうと」へと改変している。

【2】と【3】の「源」という表記に関しては、無跋無刊記本では「大將殿」とあるが、その代わりに「源（光源氏）」を追加することによって、誰の行動や感情なのかがわかりやすく読み取りやすくなっている。こうした補足説明の様相は『十帖源氏』の本文全体を通していえることであり、すでに先行研究でも指摘されているところである。

【4】の無跋無刊記本「さゝやかなるいへ」は、『十帖源氏』では「小家」と簡潔に記されるのみである。『孟津抄』には「小家のせはき也」とあり、『細流抄』には「ちいさき家也」、『岷江入楚』には「ちいさき家也 秘逼サ、ヤカナリ／或抄少々也 狭々也いづれもちいさき心也」とあることから、諸注釈書の見解を鑑みて、立圃がわかりや

すく改作したものと考えられる。

【5】の『十帖源氏』の和歌は、詠者を〈源〉と明記し、二行分ち書きであり、これも大変読みやすい仕立てとなっている。

【6】については、無跋無刊記本「哀」を『十帖源氏』では「物哀」としている。こうした読者に易しい『十帖源氏』の一連の手法は『おさな源氏』にもそのまま反映されているものである。

一方、『十帖源氏』で省略された部分を見てみたい。

無跋無刊記本【A】の場面は光源氏の賢木巻の藤壺や、朧月夜との恋の懊悩を踏まえた叙述の箇所であるが、『十帖源氏』ではすべて省略されている。

無跋無刊記本【B】の場面、花散里が光源氏を思い、煩悶する描写、巻の後半部分で、光源氏が花散里と久しぶりに対面する場面も削除されている。巻名が「花散里」とあるにもかかわらず、『十帖源氏』における花散里の登場は「御いもうとの三の君はかなうほのめき給しなこり源忘れ給はす」のみであり、光源氏が花散里を想う場面のみを残す。和歌に焦点を置いたためか、巻名にはむしろ必要のない中川の宿の女との贈答歌や麗景殿女御との贈答場面は残されている。すべての和歌を抽出して掲載するという立圃の一貫した基本姿勢がここに垣間見える。しかし、和歌はすべて抽出するものの、【C】の場面における「こと（琴）」「かつら（桂）の木」「まつり（葵祭）」など、男女の贈答歌を醸し出す歌物語的な表現が採録されていない。

無跋無刊記本の傍線部「よくなることをあつまにしらへてかきあはせにきはしうひきなすなり」という箇所

については、光源氏の行動に重きを置いた表現となっている。この場面はいろいろな指摘が諸注にみえる箇所である。河内本では、「よくなるさうの琴にあつまをしらへあはせてよし／＼しうひきなすなり」とあることから、『河海抄』<sup>(15)</sup>『孟津抄』などは「あづま」を和琴と解釈し、それに対して、『休聞抄』などは琴の音の調子のことであると、『岷江入楚』は諸注をふまえて、揺れているが一応「琴の琴」で決着している。これを立圃は、定家本系統の【C】「よくなることをあつまにしらへてかきあはせにきはしうひきなすなり」をふまえつつも、読み手の困惑をさけるためか、さらに簡略化して傍線部「あつまにしらへてかきならず」とだけ明記する。「琴」も「合奏」の流用性もなく、ただ雅楽の音が聞こえてきたことにのみ焦点を絞って、描く。

さらに、【D】の女房たちの様子や、【E】の中川の宿の女との艶やかな遣り取り等、光源氏の色好み性は削除されている。【F】の麗景殿女御の様子、【G】の麗景殿女御と光源氏が昔語りする場面、【H】の光源氏と花散里との重要な対面の場面も削られている。巻名でもあり、後の巻においても重要な役割を担う花散里の登場を『十帖源氏』はなぜ敢えて省略してしまうのであろうか。次節を論証した上で結論を述べることにする。

#### 四 『十帖源氏』関屋巻

では続いて、関屋巻を見てみたい。無跋無刊記本『源氏物語』の翻刻本文と『十帖源氏』「関屋」の翻刻本文を掲げ、比較検討してみる。前節と同様に、『十帖源氏』は無跋無刊記本を採用する。



【無跋無刊記本『源氏物語』「関屋」の翻刻】

\* 「 改行

\* 『 改頁

\* 【 】【十帖源氏』の省略箇所、冒頭部分を示した通し番号

\* 後筆の朱書き入れ傍記は省略した。

伊よのすけといひしは故院かくれさせ給て【A】

又の年ひたちになりてくたりしかはかの

はゝき木もいさなはれにけりすまの御旅

ゐもはるかにきゝて人しれす思ひやりき

こえぬにしもあらさりしかとつたへ聞ゆへき

よすかたになくつくはねの山をふきこす風も

うきたる心ちしていさゝかのつたへたになく

てとし月かさなりにけりかきれる事もな

かりし御旅みなれと京にかへりすみ給ひて

またのとしの秋そひたちはのほりけるせき

いる日しもこのといし山に御くはんはたしに』

まうて給へり京よりかのきのかみなといひし

子ともむかへにきたる人ゝこの殿かくまうて

給ふへしとつけゝれはみちのほときはかし【B】

かりなんものそとてまた暁よりいそきける

を女車おほく所せうゆるきくるに日たけ

ぬうちいてのはまくる程にとのはあはた山

こえ給ひぬとて御前の人ゝ道もさりあへ

すきこみぬれはせきにみなおりゐてこゝ

かしこの杉のしたに車ともかきおろしこ

かくれにあかしこまりて過し奉る車など」

かたへはをくらかしさにたてなとしたれと』

猶るいひろくみゆくま十はかりそ袖くち物」

の色あひなどもり出て見えたるゐなか」

ひすよしありて斎宮の御くたりなにそやう」【C】

のおりのものみ車おほし出らるとのもかく」

世にさかへ出給ふめつらしさにかすもなき御」

せんともみなめとゝめたり九月つこもり」

なれは紅葉の色／＼こきませ霜かれの草むら／＼」

おかしうみえわたるにせき屋よりさとほ」

つれいてたる旅すかたどもの色／＼のあをのつき／＼」

しきぬい物くゝりそめのさまもさるかたにお」

かしうみゆ御車はすたれおろし給て彼』

昔のこ君右衛門のすけなるをめしよせて」

けふの御せきむかへはえ思ひすて給はしなど」

の給ふ御心のうちいとあはれにおほしいつる」

事おほかれとおほそうにてかひなし女も人

しれすむかしの事忘れねはとりかへして」

物あられなり」

行とくとせきとめかたき涙をやたえぬ清」

水と人はみるらんえしり給はしかしと思ふ」

にいとかなしいし山よりいて給御むかへに」

衛門のすけまいれり一日まかり過しかしこ」

まりなと申すむかしわらはにていとむつ』

ましうらうたき物にし給ひしかはかうふり」

なとえしまてこの御とくにかくれたりしを」

おほえぬ世のさはきありしころ物の聞え」【D】

にはゝかりてひたちにくたりしをそすこし」

御心をきてとしころはおほしけれといろに」

もいたし給はすむかしのやうにこそあらね」

となをしたしきいへ人のうちにはかそへ給けり」

きのかみといひしもいまはかうちのかみにそ」【E】

なりにけるそのおとうとの右をのそとうと

けて御ともにくたりしをそとりわきてなし

いて給ければそれにそたれも思ひしりてな

とてすこしも世にしたかふ心をつかひけんなど

思ひいてけるすけめしよせて御せうそこ

あり今はおほし忘れぬへきことをころなか

くもおはするかなと思ひあたり一日はちきり

しられしをさはおほししりけんや

わくらはにゆきあふみちをたのみしも猶

かひなしやしほならぬ海せきもりのさも

うらやましくめさましかりしかなとあり

とし比のとたえもうゐくしくなりにけれ

と心にはいつとなくなつ今心のちするなら

ひになんすきくしういとくまれんや

とて給へれはかたしけなくてもいきてなを

【F】

聞え給へ昔にはすこしおほしのく事あら

むと思ふ給ふるにおなしやうなる御心の

なつかしきなんいとありかたきさきひ事

そえうなき事と思へとえこそすくよかに

聞えかへさね女にてはまけきこえ給つらんに

つみゆるされぬへしなといふ今はましていと

はつかしうよろつのことうゐくしき心ち

すれとめつらしきにやえしのはれさりけん

あふさかのせきやいかなるせきなれはしけき

なけきの中をわくらん夢のやうになんと

きこえたりあはれもつらさも忘ぬふしと

おほしをかれたる人なれはおりくはなを

の給ひうこかしけりかゝる程にこのひたちの

かみおいのつもりにやなやましくのみして

物心ほそかりければ子ともにたこの君の御

事をのみいひをきてよろつ的事たこの

御心にのみまかせて有つる世にかはらてつ

かうまつれとのみ明暮いひけり女君心うき【G】

すぐせありてこの人にさへをくれていかなる」

さまにはふれまとふへきにかあらんと思な」

けき給をみるにいのちのかきりある物なれば」

おしみとゝむへきかたもなしかてかこの人の御」

ためにのこしをく玉しゐもかなわか子ともの」

心もしらぬをとうしろめたうかなしき事に」

いひ思へと心にえとゝめぬ物にてうせぬしはし」

こそさの給ひしものをなとなさけつくれと」

うはへこそあれつらきことおほかりとあるもか」

かるもよのことはりなれば身ひとつのうき」

ことにてなけきあしくらすたゝこのかうちの」

【『十帖源氏』卷三「関屋」の翻刻】

\* 改行

\* 改頁

かみのみむかしよりすき心ありてすこしな」

さけかりける。あはれにの給ひをきし数」

ならずともおほしうとまての給はせよなと」

ついろうしよりていと浅ましき心のみえ」

ければうきすぐせある身にてかくいきとまり」

てはて／＼はめつらしき事ともを聞そふる」

かなと人しれす思ひしりて人にさなんとも」

しらせて尼に成にけりある人ゝいふかひなし」

とおもひなけくかみもいとつらうのをれをい」

とひ給ふ程に残りの御よはひはおほく物し」

給ふらんいかてかすくし給ふへきなとそあい」

なのさかしらやなとそ侍める」

\* へ 傍記・割注など（／は改行）

\* 【】 改変・補足部分の通し番号

関屋 以詞名也

**源須磨**よりかへり給て又の年**九月つこもり**【1】

石山に御願はたしにまうて給へり其日**いよの介**

**ひたち**よりのほる折出のはまくる程に殿は粟

田山こえ給ぬ」といよのすけがむかへに紀のかみ【2】

なといひし子も出てつげゝれば関に皆おりゐて

杉の下に車ともかきおろし過し奉るるいひろ

くて**車十はかり袖口の色あひよしめきたり昔**【3】

の小君今は右衛門のすけなるを源めしよせて給ふ

の関むかへはえ思ひすて給はしなどの給ふ女も人

しれすむかしの事おもひて

ゆくときとせきとめかたきなみたをや

たえぬ清水と人はみるらん

石山より出給ふ御むかへにゑもんのすけ参れり

此すけは**源須磨**への時**ひたち**へくたりければ御心【4】

をきて年ころはおほしたれと色にも出し給

はす家人のうちにはかそへ給けりすけ召よせて

御せうそこあり 源

わくらはにゆきあふみちをたのみしも

なをかひなしやしほならぬうみ

へうつせみ／返し あふさかのせきやいかなるせきなれば

しけきなけきの中をわくらん

いよのすけはおいのつもりにやなやましくのみして

つゐにうせぬきのかみ今は河内守なるか昔【5】

よりすき心ありてあさましき心の見えけ

れはうきすぐせある身と人しれす思ひ

しりてうつせみはあまに成にけり

〔絵1〕逢坂の関にて、光源氏が空蟬一行と行き会う場面

花散里巻と同じように、『十帖源氏』で省略された箇所には、無跋無刊記本『源氏物語』翻刻本文に【A】と【G】を付し、無跋無刊記本と重なる箇所については、『十帖源氏』翻刻本文に【1】と【5】を付した。以下、順を追ってみていくこととする。

【1】は、「源」「須磨」「九月つこもり」「いよの介」「ひたち」など、日にち、場所、主語を明確に記し、簡潔な説明があるのは花散里巻と同じ方式である。【2】の箇所は本文の前後が入り乱れ、かなり錯綜している。

【3】は詣でる車中の装束について語る場面を残して描き出している。【4】の箇所も【1】と同じように、「源」「須磨」「ひたち」など、主語や場所の説明を付加し、読みやすい体裁を取っている。

一方、『十帖源氏』の省略部分を見てみる。無跋無刊記本【A】の場面は、帚木巻における空蟬とのやりとりはここでは描かず、【B】の石山詣でをする人々の様子も採録しない。旅装束については触れるものの、【C】の賢木巻における斎宮下向の叙述、【D】の光源氏須磨蟄居の場面についても削除されている。【E】の場面で、時の権勢に追従した右衛門佐（昔の小君）と河内守（昔の紀伊守）の様子などが語られる場面も削られている。【F】の光源氏と右衛門佐との遣り取り、【G】の常陸守（空蟬の夫）と空蟬との場面等も省略されていく。

そんな中、「あふさかのせき」の和歌の箇所以後の本文である無跋無刊記本では、傍線部の箇所が【5】の『十帖源氏』にかなり簡略されてはいるものの、全てを省略することなく描かれていることがわかる。

これは、常陸守の息子である河内守からの懸想を懸念して、空蟬が出家したことが描かれる場面である。花散

里巻では光源氏と麗景殿女御との贈答で終わり、花散里と光源氏との逢瀬の場面は採録しないにもかかわらず、なぜ、関屋巻ではこのように夫亡き後の空蟬の様子を描くのか。『十帖源氏』【5】の場面において、空蟬が尼になつてゐることをここで指し示しておかなければならない物語上の必然性はないと思われるのである。

## 五 立圖の制作意図

このように『十帖源氏』花散里・関屋巻を見てみると、単に和歌をすべて選び取り、歌絵のような物語のダイジェスト化を計ったかに見えるが、それだけではない別の制作意図が浮かび上がってくる。それは、現実的な描写を中心に描いてゐるのではないかということである。前述したように、花散里巻の冒頭【A】の賢木巻から続く光源氏の憂悶、【B】の花散里の長年の煩悶、【G】の麗景殿女御と昔語りする場面などが削除されていることから明らかである。登場人物たちの長年の憂悶の情は省略されているのである。さらに花散里巻の細部を見ると、「かのほい所」という場面で、「おほしやりつるもしるく」と読み手が本来は光源氏と花散里とのことを想像する叙述が削除されているのである。

そう考えれば、今も光源氏が忘れずにいる麗景殿女御邸の花散里に会いに出かける途中で、中川の宿の女と贈答し、麗景殿女御と贈答して終わるといふ、現在の光源氏の姿を明確に浮かび上がらせる風雅な巻に終始して花散里巻は終わつてゐることになる。

また、和歌を重視し、全歌掲出（全七九四首、但し玉鬘巻最後の一首脱落、これは単純な誤りである<sup>(16)</sup>）というが、それにしても和歌の並び立てが非常に形式的であると思われる。花散里巻について、中西氏は「四首目の歌の後に描かれている麗景殿女御の妹君である花散里との逢瀬を十帖源氏もおさな源氏も言及していないのは原作と乖離した省略と言えよう。」と指摘する。『十帖源氏』の花散里巻が和歌で終わることによって和歌を重視していることはわかる。しかし、果たして本当にそれだけの意図によって、『十帖源氏』は成立したのであろうか。それでは立圃の目的は他に何が考えられるのか。

藤原定家以来、源氏歌集というものがあり、和歌をより理解するために連歌が生まれ、梗概書が作られるようになっていった。その流れの中に立圃作の『十帖源氏』がある。

『十帖源氏』の巻末が十九首の和歌で終わっていることを重視し、清水氏は若紫巻の例などを挙げて、「まるで歌物語のようである」といい、「巻末が和歌で終わる巻が『十帖源氏』では三分の一、『おさな源氏』になると半数にも及ぶ」と指摘する。しかし、代表的な歌物語の一つである『伊勢物語』七八段において、和歌の説明のみならず、「山科の禪師の親王おはします、その山科の宮に」等と人物の説明のための本文箇所がある。それが歌物語の本質であるとなると、『十帖源氏』は和歌の説明に必要な箇所しか抜き出してはいないこととなり、『十帖源氏』が歌物語的とはいえないかと思われるのである。

前述した表に示したように、『十帖源氏』において、和歌で終わる十九巻（空蟬、夕顔、若紫、末摘花、紅葉賀、花宴、葵、花散里、薄雲、朝顔、藤袴、真木柱、梅枝、若菜上、夕霧、幻、宿木、東屋、蜻蛉）のうち、十



二卷（夕顔、末摘花、紅葉賀、葵、薄雲、朝顔、藤袴、真木柱、梅枝、若菜上、夕霧、東屋）は、和歌をすべて抜き出したとする梗概書の一つである『源氏大鏡』<sup>(20)</sup>の類でやはり和歌で終わっている。『十帖源氏』十九卷のうちの七卷（空蟬、若紫、花宴、花散里、幻、宿木、蜻蛉）は、『源氏大鏡』ではその後文があるので、『十帖源氏』は『源氏大鏡』の和歌で終わる形式を一層推し進めたものように見えるが、『十帖源氏』において和歌の後文のある巻のうちの十卷（明石、薄標、絵合、松風、玉鬘、胡蝶、螢、行幸、椎本、手習）は、『源氏大鏡』では和歌で終わっている。

要するに、和歌で終わる巻が、『十帖源氏』は十九卷、『源氏大鏡』は二三卷（夕顔、末摘花、紅葉賀、葵、明石、薄標、絵合、松風、薄雲、朝顔、玉鬘、胡蝶、螢、行幸、藤袴、真木柱、梅枝、若菜上、夕霧、椎本、東屋、手習）と、巻の出入りはあるものの、共に二〇巻前後の巻を和歌で締めくくっているという点では変わりはない。よって、『十帖源氏』の文体は歌物語的であるとか、叙情的な場面を簡潔に提供したというのではなく、『源氏大鏡』などに代表される梗概書の文体を継承しているというべきである。吉田氏によれば、『十帖源氏』<sup>(21)</sup>の序文は『河海抄』巻第一料簡や『源氏大鏡』三類序などをそのまま抄出して引用していることから、『十帖源氏』の本文内容もほぼ同様な文献資料を活用して成ったものであると推測している。

『十帖源氏』の要約方法について、清水氏は夕顔巻の「なにかしの院」の箇所が長文に渡って省略されていることを重視し、それを『十帖源氏』の要約の特質として指摘されるが、同じ傾向は『源氏大鏡』などの梗概書の先駆けとされる天理大学附属天理図書館蔵『源氏古鏡』にすでに見られるものである。

『源氏古鏡』の特色として、田坂憲二氏<sup>(22)</sup>は以下の三点を指摘する。第一の特色は「源語中の和歌の存する箇所」に力点が置かれ、和歌の少ない部分は物語の展開上重要な記述を含んでいても言及されることが少ない」こと、第二の特色は「源語本文の一部がそのままの形で、或いは簡略化された形で示され、梗概を述べることに終始するのみで、引歌や難義語句の注・人物考証と言った注釈的言辭が全く付加されていないという点」、第三の特色は「源語の本文それ自体を梗概本に相応しいような説明的な平易な文章に書き改めるのではなく、必要な本文を、原典からほぼそのままの形で借用して繋ぎ合せて行く」ということである。つまり、梗概化において、和歌のある箇所に重点が置かれ、物語の内容上必須の本文であっても和歌がない箇所であれば省略しており、その省略した本文の連結は説明的に文章を改訂せず、なるべく原文をそのままに繋ぎ合わせる形式をとっていることがわかる。

こうしたことを考えると、巻末を和歌で締めくくる方法といい、和歌のない場面は物語展開上、重要であつても省略される傾向といい、さまざまな『源氏物語』梗概書の定型に共通してみられる傾向であると考えべきである。要するに、『十帖源氏』は『源氏物語』の梗概書の正統な後継者というべきものであり、それ以上でもそれ以下でもない。過剰に『十帖源氏』の文体の特質をいうべきではないと考える。

それでは、『十帖源氏』は従来の『源氏物語』の梗概書の枠から踏み出す点はないのであろうか。『十帖源氏』の挿絵に関しては重要であるが、それは第二章で述べたので繰り返さない。ここでは、俳諧師立圃という立場に注目したい。木村三四吾氏<sup>(23)</sup>によれば、「貞徳の最高足立圃は、俳諧を連歌に接近せしめることによって、前期俳諧

からぬけ出ようとした「発句に譬喩見立の法をとるのは貞門俳諧の一般であり、連歌に俳言を加えるというのも、もちろん他門に共通したものであるが、発想法にまで真句の——連歌の心をかかるところを主張するところに立圃の特色がある。発想句作りまで連歌に近付くとき、その句の姿は、当然詞より心に重心がおかれねばならない」という。つまり、立圃が俳諧を連歌の詞に留まらず、連歌の詠む心、その発想方法にまで近づけて詠むべきであるとしたことは、立圃にとつての俳諧というものを知る上で重要なことであろう。

連歌は和歌の五・七・五と七・七の音節を複数の者が連作する形式であり、その連歌を付合ともいう。寺本直彦氏によれば、その付合において詞や物に関係があり、付合の有力な契機となるような詞をさして寄合と呼ぶ。そのうち、和歌を詠むための必読書の一つであつた『源氏物語』を簡単に理解するために、また、端的に連歌の資料として、『源氏物語』の中から寄合として適当な詞を選んだ「源氏寄合」が発生するに至つたという。源氏寄合として知られるものを挙げれば、『源氏古鏡』『光源氏一部連歌寄合』『光源氏卷名歌』『源氏大鏡』『源氏小鏡』『源氏綱目』等である。寺本氏によれば、『光源氏一部連歌寄合』をはじめとして、室町期以降多くの源氏寄合が多く行われ、近世における俳諧の付合にも及んでいることは、第二章でも触れた『源氏小鏡』が近世において何度も再版されていることから窺えるという。

連歌師たちは『源氏物語』の詞を連歌の付合として重視していたのであるが、立圃は俳諧の資料として『源氏物語』を見ていたのではないか。『十帖源氏』にはそうした傾向が見られる。つまり、『十帖源氏』は、俳諧に用いやすい言葉を採録したのではないだろうか。

吉田氏は著書において、『俳諧（口五十九句魚鳥寄）』を挙げている。『俳諧（口五十九句魚鳥寄）』（山本唯一氏蔵）は、奥書に「明心居士」の名が見えることから、松永貞徳が立圃（親重）の独吟俳諧に批判を加えたものであることがわかる。吉田氏も指摘しているように、『源氏物語』に関わる地名を読み込んだ和歌を掲げており、『源氏物語』への立圃の関心の高さを示唆している。

つる 野々宮を守つるハ鼻たれて

たら 咳氣したらん嵯峨の山賤

くしら わひしさや関寺辺のすみくじら

はまち 名月を見るや近江の浜ちかミ

ひは 源氏さうしに日ハをくりけん

かぢ 貴僧のかちをするわらハやみ

しのぶ 北山でちと見初しを忍ふ草

いね 稲をいたくふりもしほらし

「かぢ」「しのぶ」は若紫巻を連想させると吉田氏は指摘する。確かに「しのぶ」は「忍ふ草」という表現が夕顔巻にも出てくる。これは『十帖源氏』夕顔巻においても残されている表現である。

十五日の月いざよふ程に、かららかに打のせ給へば、右近

ぞのりける。其わたりちかき、なにがしの院におはして、

あづかりめし出る。あれたる門のしのぶ草、霧もふかく露  
けきに、御袖もいたうぬれにけり。源

いにしへも かくやは人の まどひけん

我またしらぬ しのゝめのみち

〈夕〉山のはの こゝろもしらで ゆく月は

うはのそらにて 影やたえなん

和歌中の歌語でもなく、直後の和歌に直接関わるわけでもないが、「あれたる門のしのぶ草」という表現は残  
されているのである。

また、花散里巻に登場する「ほととぎす」や「五月雨の空」という言葉は、「立圃自筆寛文元年林鐘奥書」と  
いう新出の立圃の俳諧集に散見される。

一七五 小柴など引かこひてすませ給へるを、

卯月の比、とぶらひたてまつりけるに、

山ほととぎす折りしがほなる聲して

たび／＼行めぐりければ、 立圃

ほととぎすとふやしげきのかくれ里

一九五 染色の花や五月のひかりへに

五月雨の晴間や沖の小人嶋

一七五番目の「山ほとゝぎす」「ほととぎす」「とふや」「かくれ里」は花散里巻を連想させ、「小柴」は若紫巻をも連想させる。一九五番目の「五月雨の晴間」は、花散里巻の「五月雨の空めつらう晴たるに」を思い起こさせる。壇上正孝氏<sup>(28)</sup>によれば、この新出資料は「野々口立圃年譜」<sup>(29)</sup>に記載がないものの、天理大学附属天理図書館が所蔵する『野々口立圃集』<sup>(30)</sup>の一部と合致しているという。

さらに、年譜によれば、立圃が入道するのは寛永十四年（一六三七）、立圃が四十三歳のときである。『十帖源氏』が成立するのは、それから十七年後の承応三年（一六五四）、立圃の晩年である。入道後の立圃であるから、懸想されても空蟬がそれに靡くことなく出家するという道徳的な見解を示す関屋巻の本文箇所は、『十帖源氏』において削除しなかったとも考えられる。そうであるとすれば、和歌が四首である花散里巻よりも和歌三首である関屋巻の本文量の多さの説明がつくのである。

つまり、立圃は『十帖源氏』の本文において、『源氏物語』の登場人物の現実的な心情や行動に焦点をしばり、立圃自身の観念を含み、俳諧の付合を選び取って繋ぎ合わせようとしたと結論づけておきたい。立圃は敢えて『十帖源氏』の本文中に俳諧の心を忍び込ませようとしたのではないだろうか。そこには俳諧師としての立圃の制作意図が見えてくるのである。

注

(1) 渡辺守邦氏『日本古典文学大辞典』(岩波書店、二七七頁)を参照した。『日本古典文学大辞典』によれば、挿絵は一二九図とあるが、実見したところ、『十帖源氏』の挿絵は一二一図である。

(2) 清水婦久子氏『『十帖源氏』『おさな源氏』と無刊記本『源氏物語』―若紫巻の本文―』(『青須我波良』第五八号、二〇〇三年三月、二八頁)。

(3) 今西祐一郎氏「江戸初期刊 無跋無刊記 整版本 源氏物語」(九州大学附属図書館編「日本古典籍画像データベース」資料解説)。

(4) 湯浅佳子氏「立圃『おさな源氏』『十帖源氏』」(鈴木健一編『源氏物語の変奏曲―江戸の調べ―』三弥井書店、二〇〇三年)。

(5) 中西健治氏「十帖源氏攷」(『立命館文学』第五八三号、二〇〇四年二月)。

(6) 清水婦久子氏『『十帖源氏』『おさな源氏』の本文―歌書としての版本―』(『文学』第四卷四号、二〇〇三年七月)。

(7) 伊井春樹氏『源氏物語注釈書・享受史事典』東京堂出版、二〇〇一年、三九七―三九九頁)によれば、「十帖源氏」と外題するものに大きく分けて三種類あり、一つは本章に掲げた数種の伝来本が存在する万治四年(一六六一)版の『十帖源氏』である。この他、国立国会図書館蔵本と後土御門院『十帖源氏』がある。国立国会図書館蔵本の序は『十帖源氏』や『おさな源氏』と異なり、立圃の自筆でもない。途中からは『源氏

大鏡』との近似性が見られるものの、その転写本ではないことから、立圃が『十帖源氏』や『おさな源氏』を作成する前に、『源氏大鏡』を用いて源氏物語のダイジェスト化を試みた草稿本ではないかと指摘する。後土御門院『十帖源氏』は、室町中期に成立したもので、玉鬘十帖の梗概書（残欠本）である。和歌を一首欠く他、『源氏大鏡』と共通した形式を取るが、内容は異なるという。なお、後土御門院『十帖源氏』については寺本直彦氏の論に詳しい（『源氏物語論考』風間書房、一九八九年、四三二～四六四頁、四八五～五〇三頁）。本章では万治四年の刊記を持つ『十帖源氏』に関してのみ論じた。

(8) 吉田幸一氏『絵入本源氏物語考』上（日本書誌学大系五三（一）、青裳堂書店、一九八七年）。

(9) 『十帖源氏』「花散里」「関屋」の本文引用はすべて、吉田幸一氏編『十帖源氏 上・下』（古典文庫・第五〇七・五一二冊、一九八九年）に収録された自筆版下本に拠る。専修大学図書館所蔵『十帖源氏』（請求記号：A／九一三・三／N九五）も参照した。

(10) 無跋無刊記本『源氏物語』「花散里」「関屋」の本文引用はすべて、九州大学附属図書館所蔵「九大コレクション」貴重資料画像（<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/search/browse/rare>）を参照した。

(11) 『松永本花鳥餘情』（源氏物語古注集成第一巻、桜楓社、一九七八年、九二頁）。『弄花抄』（源氏物語古注集成第八巻、桜楓社、一九八三年、六六頁）。『内閣文庫本 細流抄』（源氏物語古注集成七巻、桜楓社、一九八〇年、一一二頁）。

(12) 『角川古語大辞典 CD-ROM版』（角川書店、二〇〇二年）。



(13) 注(2)に同じ(二九頁)。

(14) 『孟津抄 上』(源氏物語古注集成第四卷、桜楓社、一九八〇年、二六九頁)、『細流抄』は注(11)に同じ(一一三頁)、『岷江入楚 一』(源氏物語古注集成第一二卷、桜楓社、一九八〇年、六八八頁)。

(15) 『紫明抄・河海抄』(角川書店、一九六八年)、『休聞抄』(源氏物語古注集成第二三卷、おうふう、一九九五年)。

(16) 注(6)に同じ(一一四頁)。

(17) 注(5)に同じ(五四頁)。

(18) 注(6)に同じ(一〇六・一〇七頁)。

(19) 新編日本古典文学全集十二『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(小学館、一九九四年、一八〇頁)。

(20) 『源氏大鏡』について、田坂憲二氏は「梗概書群の中で、梗概叙述の質の高さと、本文分量の多さ・詳細さからいっても最も重視すべきものが『源氏大鏡』である」と述べている(『源氏物語享受史論考』風間書房、二〇〇九年、四〇八頁)。

(21) 注(8)の吉田氏論「四 『十帖源氏』の序説と『源氏大鏡』などとの関係」(二四〇～二四四頁)に拠る。

(22) 注(20)の田坂氏論に同じ(三九〇～四〇七頁)。

- (23) 木村三四吾氏「野々口立圃」(『俳諧講座2』俳人評伝上、明治書院、一九五八年、一二二～一二三頁)。
- (24) 寺本直彦氏(「前編第二章第五節 源氏寄合―その成立と性格―」『源氏物語受容史論考正編』風間書房、一九七〇年、四六九～四七一頁)。
- (25) 注(8)に同じ(二二四～二二五頁)。
- (26) 山本唯一氏「貞徳・親重に関する一資料」(『元禄俳諧の位相』法蔵館、一九七一年)。
- (27) 檀上正孝氏「新出『立圃自筆 寛文元年林鐘奥書句文長卷』研究と資料」(『国文学攷』第一四一号、一九九四年三月)。
- (28) 注(27)に同じ。
- (29) 年譜は、米谷巖氏「野々口立圃年譜」(吉田幸一氏編『十帖源氏 下』古典文庫・第五一二冊、古典文庫、一九八九年)に拠る。
- (30) 『野々口立圃集』(天理図書館綿屋文庫俳書集成・第十三卷、八木書店、一九九六年)。

結

(

(

以上、『源氏物語』が鎌倉、室町、江戸時代の各時代の中で、どのように伝えられ、受けとめられ、継承されて来たか、ということについて、『源氏物語』の本文を中心として論証した。

第一篇では「専修大学図書館所蔵資料」と題して、以下の内容を論じた。

第一章「伝冷泉為秀筆『源氏物語』桐壺巻の本文」では、専修大学図書館蔵為秀筆本の実態について考察した。書誌や奥書からみると、冷泉家の人々、為家、為経、為秀の関係性が推測される。為秀筆本は、定家の所持本を同世代の為家經由で為経が借覧した為経本があり、その為経本を為秀が書写したもの、ということになる。『奥入』の影響が随所に見られ、為経の奥書を持つ、大島本、池田本、伏見天皇本などに近い本文である。それはすなわち、三条西家本系統の本文より遠いということであり、定家本の面影を伝える重要な『源氏物語』の一伝本であることを証明している。

第二章「伝藤原為家筆『源氏物語』総角切考」では、『専大源氏切』の書誌・書写年代・本文系統を考察した。『専大源氏切』は『源氏物語』総角巻本文の前半部「さ夜ころも」から「いとなをく」までを書き写したもので、薫と大君の贈答場面である。伝承筆者は為家であるが、他の為家筆本と比較したところ、『専大源氏切』は別筆であると思われる。極札は朝倉茂入であるが、初代と二代の朝倉では極印が酷似しているため、どちらの朝倉であるかを特定することは難しいといえる。『専大源氏切』に出てくる仮名「し」の字母である「新」は、伝阿仏

尼筆切や伝慈鎮和尚筆切にも散見される字母表記である。三つの切において、「し(新)」は、「をと新(おどす)」  
「すぐ新(過す)」  
「やつ新(やつす)」といずれも動詞の活用語尾でありながら、切の行頭の表記に使用されているという共通項が見出された。つまり、「新」という字母表記が用いられた『専大源氏切』は、大ぶりで字形に特色のある表記を行頭に用いるという変字意識のあつた鎌倉時代に書写された可能性が考えられるのである。『専大源氏切』の本文は「御返には」という独自異文や、僅かながらに別本の影響が垣間見られるものの、「なれきとは」「こなたかなた」「いかゝ」「おほしわつらふ」という青表紙本の特徴的な表現を持つ。つまり、『専大源氏切』は鎌倉時代の早い時期に書き写された可能性を持つ、LC本、首書源氏、絵入源氏、湖月抄等に近い本文であり、鎌倉時代に書写された『源氏物語』の本文の書写態度を探る上で貴重な古筆切であるといえる。

第三章「菊亭文庫蔵『源氏物語抜書』の様相」では、専修大学図書館所蔵本である菊亭文庫蔵『源氏物語抜書』について考察した。『源氏物語抜書』六帖の書式の基本形は、まず最初に巻名をあげて、次に最小三行から最大七行で、その巻から一項目の原文を抜き出している。項目の頭に数字「一」をつけ、原則として一卷一項目(浮舟巻のみ二項目)を袋綴本の丁の表面に書き抜き、丁の裏面は白紙とする。引用文には全て作中歌があるわけではないため、和歌の部分をあえて抽出しようとする『源氏物語』の抜書形式ではない。表面を使い、裏面を書写しないのは、四ツ目綴の形跡から、紙のこよりで綴じた仮綴本であろう。あるいは引き続き同じ巻から抜き出す項目を追加できるように余白を設けたのかもしれない。また、『万水一露』の本文立項と『源氏物語抜書』の本文立

項の形式とが一致するものの、実際は原文のみで注釈は抜書されてはいない。さらに、『源氏物語抜書』の本文が選ばれたのは、この箇所が著名な画帖になりやすい場面であり、裏面を白紙にして後から絵を配することを想定したもののように思える。つまり、菊亭家、あるいはその周辺の依頼による画帖作成にあたっての試作課程（詞書と絵）を示す、草稿本の可能性が考えられ、抜書された本文の内容からは琵琶を家職とする菊亭家の特別な思いを窺い知ることができるのである。

第二篇では「本文の伝来と享受」と題して、以下の内容で論じた。

第一章「正徹本の伝来と奥書」では、正徹本の奥書から想定される書写の経緯について考察した。奥書から想定すると、書写経路は以下の通りとなる。正徹が諸本の『源氏物語』を読み合わせて、奥書を記した本【正徹自筆本】があり、定家自筆本を写したと思われる為相本と正徹自筆本を正徹が校合し、その旨を記した正徹の奥書を持つ本【嘉吉三年本】があり、この嘉吉三年本の葵巻は翌年読み書きで用いられている。さらに、秘本である嘉吉三年本を書写したいと所望する宗耆（香禅坊）らに書き写させ、その旨を記した正徹の奥書と、桐壺巻三枚程度は正徹が書き写し、源氏談義にもこの本が使用されたという宗耆の奥書を持つ本【文安三年本】がある。嘉吉三年本を再度書き写し、正徹が亡くなる直前に記した奥書を持つ自筆本【長祿三年本】がある。以上のことから、正徹本には、【正徹自筆本】から派生した【嘉吉三年本】【文安三年本】【長祿三年本】の転写本があることが

わかるのである。これらを基に、国文研本、慶應大本、書陵部本、京都女子大本、大青歴博本、徳本本の本文はどれにあたるのかを検証すると、以下の通りとなる。国文研本は【嘉吉三年本】の奥書を持つ【文安三年本】（正徹の夢浮橋巻の奥書なし）を転写したもの、慶應大本は国文研本をさらに転写したもの、書陵部本は徳本本をさらに転写したもの、京都女子大本は【嘉吉三年本】を【長祿三年本】に正徹が自ら転写したもの、大青歴博本は毛利家旧蔵本で、本文の筆は正徹自筆ではないが、奥書の筆跡は正徹自筆に近く、徳本本は【嘉吉三年本】の奥書を持つ【文安三年本】（正徹の夢浮橋巻の奥書あり）を転写したものか、となる。

第二章「正徹本の本文―国文研本・京都女子大本・慶應大本・書陵部本を中心に―」では、正徹本の本文四種（国文研本、慶應大本、書陵部本、京都女子大本）の比較検討を行った。桐壺巻においては、書陵部本は他の三種とは離れた本文であり、京都女子大本も国文研本・慶應大本とは少し離れた本文であるということがわかる。また、他の四巻（花宴・花散里・潯標・絵合巻）について、三種（国文研本、慶應大本、書陵部本）を対校したところ、桐壺巻と同様に、書陵部本が一番孤立した本文であり、国文研本・慶應大本が比較的親近度がある本文であるといえる。書陵部本は実際の本文表記においても孤立している。また、国文研本・慶應大本が校異数の差異においては最も本文校異が少ないことから、一番近い本文であると考えられるものの、さらに実際の本文の表記を比較検討してみると、国文研本と京都女子大本の本文の表記も近いことがわかった。そこで、国文研本と京都女子大本の校異箇所本文表記を他の諸本と比較してみると、国文研本は池田本、伏見天皇本、穂久邇文庫本、

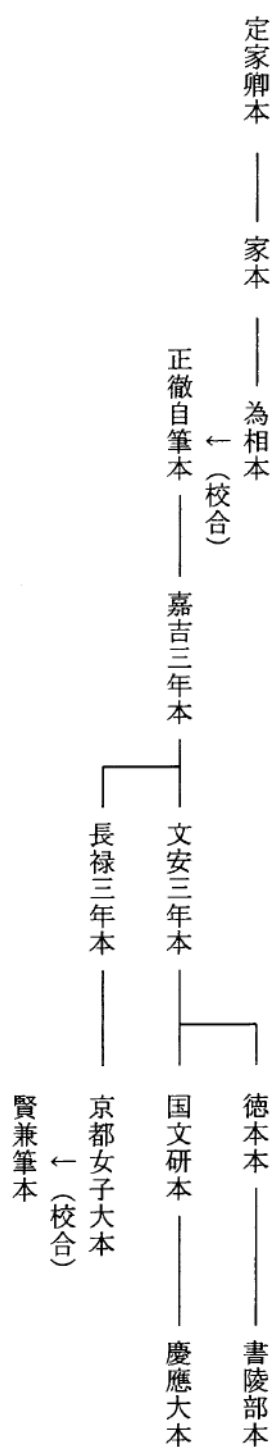
高松宮家本、尾州家本と共通する本文が多いことがわかる。つまり、国文研本は、大部分では京都女子大本と共通する本文を有しているといえるが、その一方で三条西家本や肖柏本ではない青表紙本諸本に近い本文の表記も有しているといえるのである。すなわち、この検証結果を考慮すれば、現状において、正徹本を他本と比較検討する際には、五十四帖揃の国文研本もしくは慶應大本のどちらかを対校させるべきであると考ええる。

第三章「大庭賢兼と『源氏物語』享受」では、大庭賢兼という武将に焦点を当て、賢兼周辺の『源氏物語』享受の実態を探った。大庭賢兼は桓武平氏・鎌倉氏の庶流である大庭氏を継ぐ人物であり、剃髪して大庭宗分とも称し、大内家・毛利家の防長の奉公人として活躍する中で、『源氏物語』作成にも大きく関与した人物である。飛鳥井家や三条西家などの源氏学を受け継いだ人々と深く交流した大内家には、宗碩や正広などの連歌師たちが出入りしていた。すなわち、賢兼の周辺には良質の多種多様な『源氏物語』やその他の文芸作品が存在し、賢兼筆本に見えるさまざまな校合跡は、大内家、毛利家家臣であればこそ成立した精密な作業の実態を示唆しているといえる。

第四章「大庭賢兼筆『源氏物語』の本文」では、賢兼筆本の奥書や書誌、校合された正徹本の桐壺巻との比較検討によって、賢兼筆本の様相、正徹本の校合跡について考察した。賢兼筆本は、桐壺巻の奥書によれば、永禄十年（一五六七）六月一日に正徹本と校合していることから、永禄十年にはすでに成立していたと考えられる。賢兼筆本の本文を『源氏物語』諸本と比較すると、日大三条西家本、次いで書陵部三条西家本に近いことから、



賢兼筆本は三条西家本系統の本文であることがわかる。正徹本に関わる賢兼筆本の桐壺巻の奥書には「定家本」「長祿三年」の記載がある。これは京都女子大本の奥書に一致し、それ以外の正徹本の奥書には見られない記載であることから、賢兼筆本が校合した正徹本は京都女子大本に近い本文である可能性がある。さらに、賢兼筆本の桐壺巻における傍記箇所と正徹本文（国文研本・慶應大本・書陵部本・京都女子大本）の傍記箇所とを比較すると、〈濁点〉の箇所は書陵部本や国文研本の濁点と共通する箇所が多い。〈傍記〉に関しては京都女子大本の傍記方法と共通項の多い校訂方法が見られた。つまり、賢兼が賢兼筆本の校合に用いた正徹本は京都女子大本に近い本文であった可能性が高いと考えられるのである。以上、第一章から第四章までをふまえて、正徹本の伝来の流れをまとめてみると、以下のようになる。



第五章「米国議会図書館本の素姓―行方不明の諸仲本か―」では、LC本と五辻諸仲筆本との書誌形態や本文との関わりについて指摘し、LC本の本文の実態を考察した。LC本は、昭和初期、渡部榮氏が見て以来行方不明であった諸仲真筆本そのものか、あるいはその忠実な転写本であるのか、という二つの道筋が見えた。いずれにしても、従一位麗子本との関係で『源氏物語』研究史上に姿を現した伝本、もしくはその伝本に近い転写本が、約八十年の歳月を経て、その存在が明らかになったことになる。写本の伝流史、『源氏物語』研究史の両方の観点において、重要な問題提起をするものであることに変わりはない。LC本と諸仲本は、本文の漢字仮名表記の差異や異文、書誌による半丁ごとの行数など、多少の違いが見受けられる。しかし、本の大きさ、表紙、折紙の酷似から考えれば、諸仲本とLC本は同一のものであり、その一方で、異文から考えれば、忠実な転写本ということになる。現段階ではどちらの可能性も考えられる。異文の問題の方が重要とも思われ、昭和初期の転写本の可能性も捨てきれない。しかし、仮に転写本と考えた場合、LC本の折紙は諸仲本に元々付されていた折紙であることは動かしがたく、希有な偶然の積み重ねを想定しなければならないことになる。LC本の本文において、漢字仮名表記の差異は傍らに置いておくとして、独自の共通異文三十五例を確認できることがやはり重要であろう。この三五例の独自の共通異文は、現存する『源氏物語』三一本の写本には見られないものであり、LC本と諸仲本にのみ見える『源氏物語』の本文表記である。そういう意味において、両者は『源氏物語』諸写本からひどく孤立した本文、すなわち、極めて酷似した本文である。つまり、LC本は、渡部氏が麗子本と対校した五辻諸仲

真筆本そのものである可能性の高い本文が新出したものと考えたい。そして、LC本は諸仲本を通して、麗子本を採る一つの手立てとなる可能性も秘めた本文であるといえるのである。

第三篇は「野々口立圃と『源氏物語』」と題して、以下の内容で論じた。

第一章『源氏物語画帖』の詞書における鳳林承章サロンの人々」では、『専大源氏画帖』を中心として、鳳林承章の文化サロンに着目しつつ、江戸初期の文人たちの様相を追った。『専大源氏画帖』の詞書の本文は大島本や日大三条西家本に近い青表紙本である。道晃法親王・飛鳥井雅章・中院通茂・日野弘資ら堂上公家十人による寄合書きであり、和歌的・文化的な要素が強い。詞書筆者の筆跡は、真筆と思われる画帖類の筆跡との比較を行うと、真筆と思える筆跡が数多く見られた。制作年代は詞書筆者たちの生没年や動向から一六七〇年前後と推定される。堂上公家の詞書と地下人である野々口立圃の挿絵をモチーフとした画帖が制作された背景には、承章の文化サロンが見え隠れしている。承章の記した『隔蓑記』によれば、天皇までに及ぶ俳諧師立圃の評価の高さが窺える。立圃は、近衛信尋サロンに出入りしていた猪苗代兼与に連歌を、狩野探幽に絵を、烏丸光広に和歌を、青蓮院宮尊朝法親王に書を、松永貞徳に俳諧を学んだと言われている。承章サロンの多様な文化の情報交流の中にいた立圃はそこで多くの一流の文化に触れる機会に恵まれたと考えられる。そして、立圃が水野勝成、勝俊、勝貞の招きによって備後国福山市に滞在した功績は大きいものがある。つまり、『専大源氏画帖』は、寛文十年（一

六七〇）に水野勝貞の娘が勧修寺家へ嫁ぐ際の祝いの品の一つとして、詞書は中院通茂と日野弘資の二人が総指揮をとり、作成されたものであると結論づけた。

第二章『源氏物語画帖』の絵における俳画師立圃の影響』では、『専大源氏画帖』の絵における俳画師立圃の影響から、江戸初期の源氏絵享受について考察した。『専大源氏画帖』は、『源氏物語』の代表的な場面を描いたもので、差し替えの行われた巻が散見するものの、ほぼ『十帖源氏』の挿絵が踏襲されたといつてよいであろう。立圃は、貞門下の俳諧師としてだけではなく、俳画師としても当時知名度のあったことが窺える。世俗にこだわらず、悠然とした立圃の生き様を垣間見せる草画は、俳画を極めた立圃の技量を偲ばせる。立圃の躍動感あふれる『十帖源氏』の挿絵が『専大源氏画帖』にそのまま踏襲されているのである。立圃の画系は不明であるが、その画風は鳳林承章と交流していた狩野派の流れを組む岩佐派風であろうか。立圃独自の『十帖源氏』の挿絵を基に、極彩色豊かに人物が生き生きと描かれていることが『専大源氏画帖』の絵の最大の特徴であろう。『専大源氏画帖』蛸・若菜下巻②の二つの絵については、『十帖源氏』に挿絵が見当たらないが、蛸巻は蛸火に照らされる玉鬘の場面、若菜下巻②は女樂の場面である。蛸巻の図様は『源氏鬘鏡』（万治三年上方版）・『源氏小鏡』（無刊記江戸版中本）の図様に近く、若菜下巻②は九曜文庫本、個人蔵本、勝友源氏の構図と近似している。『源氏鬘鏡』（万治三年上方版）、『源氏小鏡』（無刊記江戸版中本）、九曜文庫本、個人蔵本、勝友源氏等の源氏絵は、いずれも江戸時代初期に作成された作品群である。つまり、『専大源氏画帖』の成立は、『十帖源氏』や『源氏鬘鏡』が

成立した一六六一年以降に制作された可能性が考えられるのである。若菜下巻②は女楽の場面を描き、『十帖源氏』挿絵にはない『専大源氏画帖』独自の図様である。女楽に描かれる「琴」や「箏の琴」は武家の女性の嗜みとして必要不可欠なものである。さらに、『専大源氏画帖』には祝事や権威を示そうとする近世初期源氏絵の特徴が見える。おそらく『専大源氏画帖』は、堂上公家の詞書を持つ武家のお輿入れの際の祝いの品の一つであったと考えられる。多才な立圃の絵と堂上公家の詞書の組み合わせは、江戸初期文芸の自由さや『源氏物語』享受の実情を示す貴重な作品であるといえる。

第三章「立圃作『十帖源氏』の本文構造」では、『十帖源氏』花散里・関屋巻を中心として、本文の様相を探った。『十帖源氏』を見ると、単に和歌をすべて選び取り、歌絵のような物語のダイジェスト化を計ったかに見える。しかし、『十帖源氏』花散里・関屋巻の本文をつぶさに見ていくと、それだけではない立圃の別の制作意図が浮かび上がってくるのである。それは一つには、現実的な描写を中心に描いていないかということである。花散里巻の冒頭の賢木巻から続く光源氏の憂悶、花散里の長年の煩悶、麗景殿女御と昔語りする場面などが削除されていることからそれは明らかである。つまり、登場人物たちの長年の憂悶の情は省略されているのである。さらに花散里巻の細部を見ると、「かのはい所」という場面で、「おほしやりつるもしるく」と読み手が本来は光源氏と花散里とのことを想像する叙述が削除されているのである。そう考えれば、今も光源氏が忘れずにいる麗景殿女御邸の花散里に会いに出かける途中で、中川の宿の女と贈答し、麗景殿女御と贈答して終わると

いう、現在の光源氏の姿を明確に浮かび上がらせる風雅な巻に終始して花散里巻は終わっていることになる。二つには、立圃は、連歌師が『源氏物語』の詞を連歌の付合として重視していたように、立圃は俳諧の資料として『源氏物語』を見ていたのではないだろうか、ということである。藤原定家以来、和歌をより理解するために連歌が生まれ、梗概書が作られるようになる。その流れの中に『十帖源氏』がある。つまり、『十帖源氏』は『源氏物語』の梗概書の正統な後継者というべきものであり、連歌の付合という枠を超えて、俳諧に用いやすい言葉を散りばめたものと考えられるのである。立圃の俳諧には『源氏物語』にちなんだ詞が「山ほととぎす」「ほととぎす」「とふや」「かくれ里」等と散見しており、そのことから裏付けられる。つまり、立圃は『十帖源氏』の本文において、『源氏物語』の現実的な人物の心情や行動に焦点をしばり、立圃自身の観念を含ませ、俳諧の付合を選び取ってうまく繋ぎ合わせたと考える。立圃は敢えて『源氏物語』の本文中に俳諧の心を忍び込ませようとしたのではないだろうか。そこには俳諧師としての立圃の制作意図が見えてくるのである。

以上、『源氏物語』が書写された平安時代以降、鎌倉、室町、江戸期において、『源氏物語』に関わる写本・注釈書・抜書・古筆切・版本・絵画等について考察した。

そこからは、

定家―為家―為相―為秀―了俊―正徹―宗祇―実隆―公条―実枝―幽斎―貞徳―立圃

正統な青表紙本系統の源氏学派の伝流と享受が見えてくる。さらに派生的に、為家の母は西園寺家三代藤原実宗の娘であり、その支流である菊亭家へ、宗祇から大内政弘を通じて大庭賢兼へ、実隆・公条から五辻諸仲へ、と『源氏物語』に関わる文芸が伝えられ、受け継がれていることがわかる。

『源氏物語』の享受史の歴史は長く、広い。現存する『源氏物語』の写本・注釈・絵画資料等の中には、十分に位置づけがされていないものが極めて多く存在する。調査されていないもの、究明されていないものを一つ一つ調べて、位置づけていくことは、日本の文化史を考えることにもなる。本論文は小さいながらもその一つの試みをしたものである。

## 初出一覧（初出原題及び発表・掲載誌）

本論文所収にあたり、各論考は改題の上、全面的に補筆修正を施している。本論文の素稿となったものを左記に記しておく。

### 第一篇 専修大学図書館所蔵資料

#### 第一章 伝冷泉為秀筆『源氏物語』桐壺巻の本文

『源氏物語』正徹本の本文系統——専修大学図書館所蔵『源氏物語』（為秀筆本）に及ぶ冷泉家の書写経路——（『専修国文』第九二号、二〇一三年一月所収）の一部抜粋。

#### 第二章 伝藤原為家筆『源氏物語』総角切考

「専修大学図書館蔵伝為家筆『源氏物語切』試論」（『専修国文』第九五号、二〇一四年九月所収）。

#### 第三章 菊亭文庫蔵『源氏物語抜書』の様相

「菊亭文庫蔵『源氏物語古注断簡』考」（『専修国文』第九四号、二〇一四年一月所収）。

### 第二篇 本文の伝来と享受

#### 第一章 正徹本の伝来と奥書



「正徹本の所在」(科学研究費補助金基盤研究(A)「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究」課題番号[22242010]研究代表者・今西祐一郎氏、二〇一一年度成果報告書『日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究』第Ⅰ号、国文学研究資料館・今西祐一郎氏編、二〇一二年三月所収)。

## 第二章 正徹本の本文―国文研本・京都女子大本・慶應大本・書陵部本を中心に―

『源氏物語』正徹本の本文系統―専修大学図書館所蔵『源氏物語』(為秀筆本)に及ぶ冷泉家の書写経路―(『専修国文』第九二号、二〇一三年一月所収)。  
『源氏物語』正徹本の本文系統二―慶應大本・書陵部本・天理大本を中心に―(科学研究費補助金基盤研究(C)「源氏物語本文関係資料の整理とデータ化及び新提言に向けての再検討」課題番号[23520241]研究代表者・豊島秀範氏、二〇一三年度成果報告書『源氏物語本文のデータ化と新提言』第Ⅲ号、國學院大學・豊島秀範氏編、二〇一四年三月所収)。

## 第三章 大庭賢兼と『源氏物語』享受

## 第四章 大庭賢兼筆『源氏物語』の本文

第三章・第四章は、『源氏物語』正徹本の伝来過程―大庭賢兼の文事との関わり―と題して、二〇一三年度中古文学会春季大会(於学習院女子大学、二〇一三年六月九日)における口頭発表を基とする。

## 第五章 米国議会図書館本の素姓―行方不明の諸仲本か―

書き下ろし

## 第三篇 野々口立圃と『源氏物語』

### 第一章 『源氏物語画帖』の詞書における鳳林承章サロンの人々

「鳳林承章サロンにおける江戸初期の文人たち―専修大学図書館所蔵『源氏物語画帖』を中心として―」と題して、二〇一四年度日本近世文学会秋季大会（於日本大学、二〇一四年十一月二二日）において口頭発表を予定している。

### 第二章 『源氏物語画帖』の絵における俳画師立圃の影響

「専修大学図書館蔵『源氏物語画帖』考 A study on Illustrated albums of *The Tale of Genji* by Senshu University Library collections」(『Japanese Civilization: Tokens and Manifestations』ポーランド・ヤギェウォ大学出版 (Wydawnictwo Uniwersytetu Jagiellońskiego) 二〇一五年一月刊行予定)。

### 第三章 立圃作『十帖源氏』の本文構造

「『十帖源氏』試論」（科学研究費補助金基盤研究（A）「源氏物語の研究支援体制の組織化と本文関係資料の再検討及び新提言のための共同研究」課題番号 [19202009] 研究代表者・豊島秀範氏、二〇一〇年度成果報告書『源氏物語本文の研究』國學院大學・豊島秀範氏編、二〇一一年三月所収）。